

355

84

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始



9.1.17

7.4

2.2

1.4

355-84



博物辭典

大正
8. 1. 17
購求



序

皆さんが博物の書物を繙いたときに、まゝむつかしい名稱に出會ふことがあるでせう。さういふ場合には何か容易くこれを調べる書物がほしいのである。尤もこの頃はいろ／＼な辭典類が出来てをるけれども、博物だけのものは一寸見當らないので本書を公にすることにした。本叢書のうちに博物界の現象通俗生理衛生動物と人生植物と人生などの姉妹篇が出版されて居るが、これ等の書物に詳しく説明したことは、本書には成るべく簡略にしたから、記事の足りないところは、更に以上の書物で補ふやうにして下さい。

大正七年一月

編者識す

序

(11)

博物辭典

目次

| | | | |
|-----|----|---|-----|
| アの部 | 一 | コ | 一〇〇 |
| イの部 | 一八 | ク | 一〇八 |
| ウの部 | 三〇 | ケ | 一一八 |
| エの部 | 四〇 | キ | 一二七 |
| オの部 | 四二 | カ | 一三八 |
| カ | 五〇 | セ | 一五八 |
| キ | 七二 | ソ | 一六八 |
| ク | 八二 | タ | 一七一 |
| ケ | 九三 | チ | 一八四 |
| | | ツ | 一八九 |

凡例

一 本叢書は、國民教育に根柢を置き、學校科外に於ける無上の良教科書青少年に對する絶好の良友たらしめんが爲に發行したものである。

一 本叢書は有益にして趣味ある材料をあらゆる方面に採り、内容の正確善美を圖ると同時に、自學自習に適せしむべく其の行文を平易簡明にし、又繪畫をも挿入することにした。

一 本叢書は其の内容の精選充實に努め、知らず識らずの裡に智能を啓發し、徳器を成就せしめんことを期した。

一 本書「博物辭典」は、畠山久重氏の執筆されたものである。

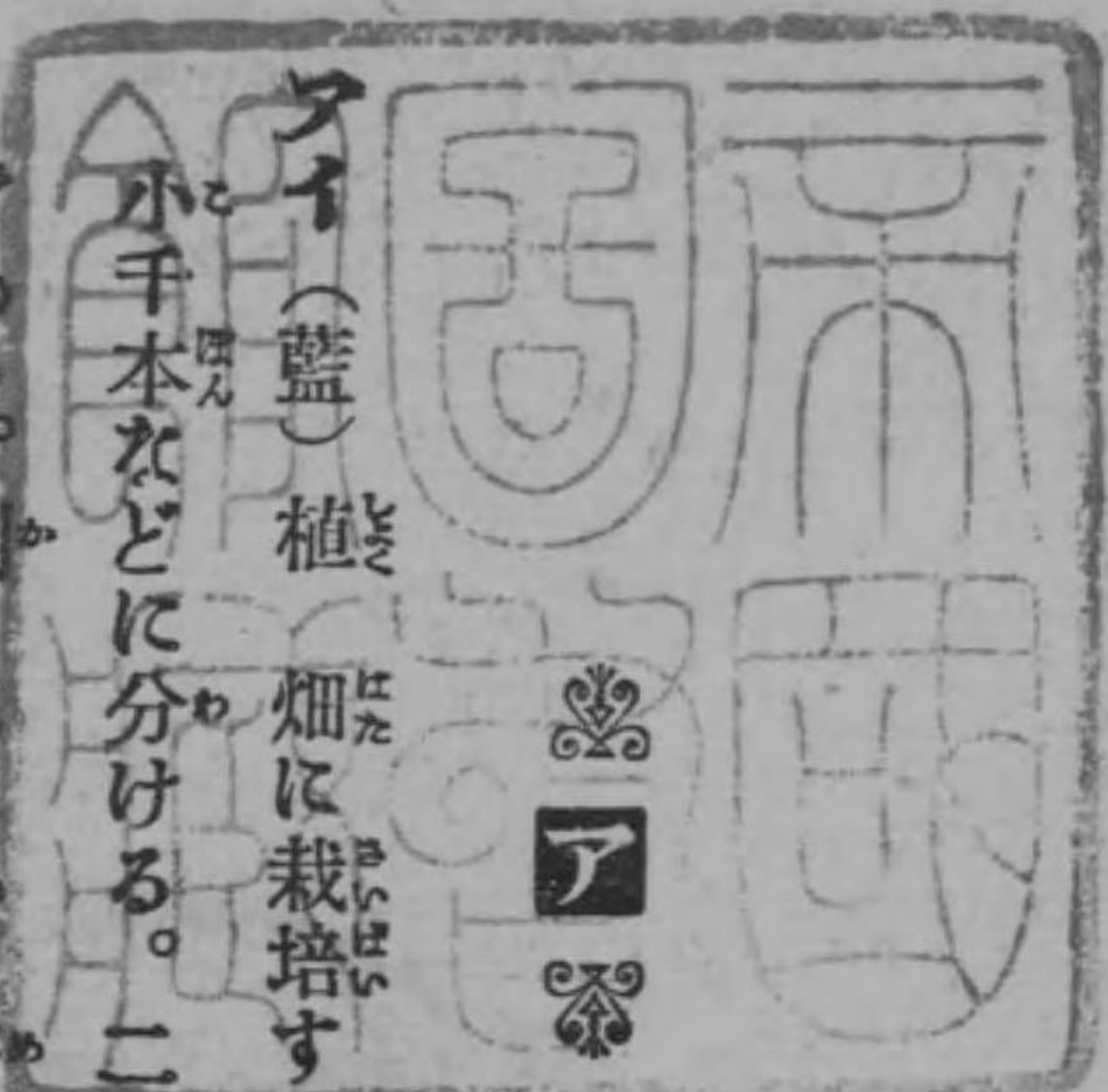
| | |
|-----|-----|
| テの部 | 一九三 |
| トの部 | 一九六 |
| ナ | 二〇七 |
| ニの部 | 二一二 |
| ヌの部 | 二一六 |
| ネの部 | 二一七 |
| ノの部 | 二二〇 |
| ハの部 | 二二二 |
| ヒの部 | 二三八 |
| フの部 | 二四七 |
| ヘの部 | 二五四 |
| ホの部 | 二五七 |
| マの部 | 二六三 |
| ミの部 | 二七〇 |
| ム | 二七六 |
| メ | 二七八 |
| モ | 二七九 |
| ヤ | 二八二 |
| ユ | 二八八 |
| ヨ | 二九〇 |
| ラ | 二九三 |
| リ | 二九五 |
| ル | 二九八 |
| レ | 二九九 |
| ロ | 三〇〇 |
| ワ | 三〇一 |

挿畫目次

| | |
|----------|-----|
| △あをかび | 二 |
| △うきくさ | 三 |
| △おつとせい | 三 |
| △おりーぶ | 四 |
| △肝臓及び脾臓 | 六 |
| △輝石及び角閃石 | 七 |
| △筋肉 | 九 |
| △喉頭の水平斷面 | 一〇 |
| △黒曜石 | 一〇 |
| △犀 | 一八 |
| △あかさんど | 二五 |
| △鹿 | 二九 |
| △班馬 | 三四 |
| △腎臓の縦斷面 | 三七 |
| △麝香鹿 | 四〇 |
| △鐘乳石 | 一四六 |
| △松露 | 一四八 |
| △纖維素 | 一六六 |
| △てんたうむし | 一九五 |
| △馴鹿 | 一〇三 |
| △とびのうを | 一〇五 |
| △腦の部分 | 一〇〇 |
| △のちぎく | 一一一 |
| △蚕 | 一一一 |
| △はぜのき | 一一九 |
| △ふき | 一二〇 |
| △ふくろう | 一二九 |
| △方鉛鐵 | 一三八 |
| △まるはち | 一七〇 |

—(をはり)—

博物辭典



アイ (藍) 植 畑に栽培する一年生草本で、莖の色や葉の形によつて青莖小千本・赤莖小千本などに分ける。二月頃苗床をつくつて種をまき、七月頃刈取る。これが一番藍である。刈りあとから芽がのびたのを更に八月頃刈取る。所謂二番藍である。この後から三番藍をも刈取られる。刈取つた藍は直に乾かして貯へ、藻とし、臼に入れて搗きかためる。これを藍玉といふ。青色染料として有用なものである。

アイマツ 植 クロマツの條を見よ。

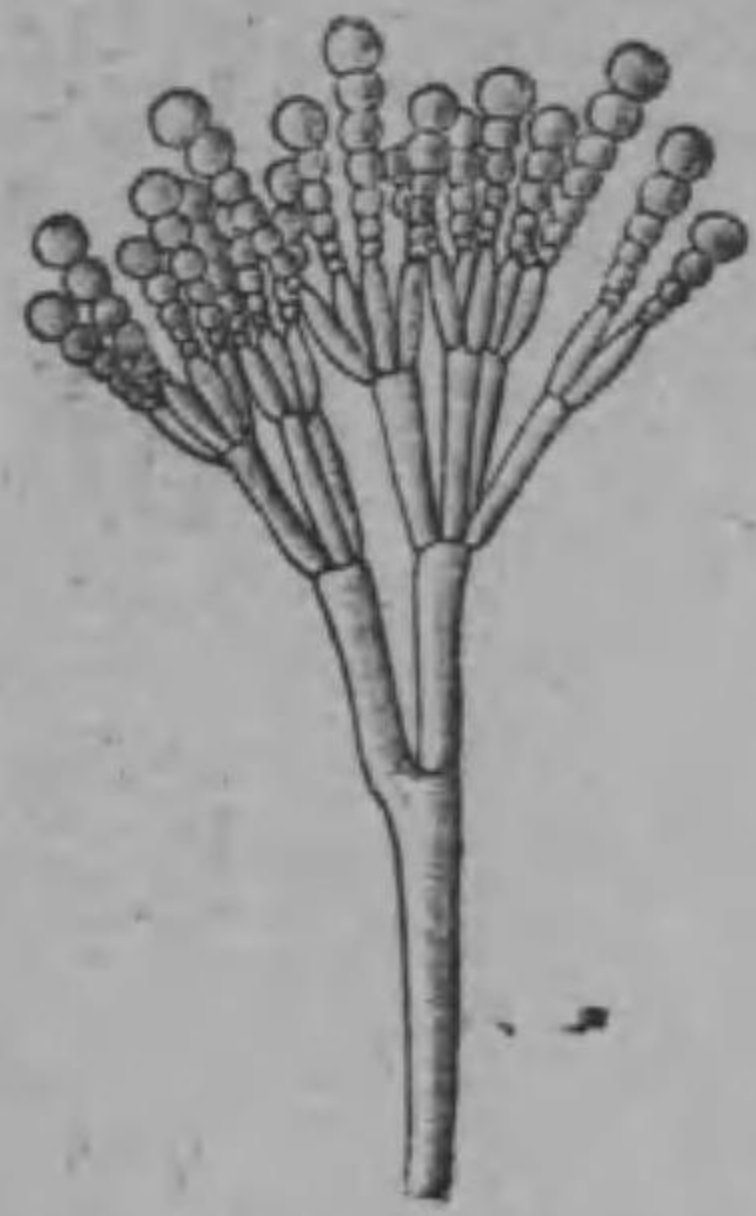
*アの部

アエン (亞鉛) 鑛 色青白く、大麻の葉のやうな模様があり、光澤が強く質が硬い。乾燥いた空氣中には鏽を生ずること少く、濕氣にあつても腐らないから、板や管とし、又は鐵板・鐵線などに鍍金してその鏽を防ぎ、或は眞鍮・洋銀などの合金をつくり、或は理化學上に用ひられ、用途がすこぶる廣い。原鑛は閃亞鉛鑛・菱亞鉛鑛などである。

アオウキクサ 植 ウキクサの條を見よ。

アオウミガメ (綠蟎龜又 正覺坊) 動 ウミガメの條を見よ。

アオガエル 動 アマガエルの條を見よ。



(ア ナ カ ビ)

アオカビ 植 アヲカビはきはめて普通なカビであつて、直立せる胞子柄はその先きが又狀に分れて小さい胞子柄となり、その上に連鎖狀の胞子をつけてゐる。そのやうすが恰も箒を倒に立てたやうで、これらの部分が青綠色に見えるからアヲカビの名を得たのであらう。

アオクビ 動 マガモ (眞鴨) に同じ同條を見よ。

アオサ (石專) 植 好んで淺い海の岩石に著いてゐる綠藻で、體は平たくて紙片の如く、全形が略橢圓狀をなし縁にきれこみがない。底部は腎臟狀のものが多し。普通は高さ一尺内外、幅六七寸であるけれども、稀には二尺餘のものがある。其中でアナアヲサといふのは葉面の所々に大小不規則の孔が散ばつてゐる。

アオサギ 動 サギの條を見よ。

アオダイショ (黃領蛇) 動 我が國に棲む蛇類の中、一番大きくなるもので、長さ六尺位にいたる。頭は青綠色で、背は暗綠色、淡黒色の斑紋がある。野鼠・蛙・家鼠などを食ふ、無毒の蛇である。

アオナムシ 動 モンシロテフの幼蟲である。モンシロテフの條を見よ。

アオノリ 植 綠藻類アノリ屬の總稱で、我が國には約十五六種を産し、その處によつて形狀が異つてゐるが、大抵太さは六七厘から五六分、長さは二三寸から一尺内外に及び、多くは淡水と鹹水との混じるところに鮮な綠色をなして叢り生じ、大さう美

しい、市場に賣られてあるものにはアヲサのまじつてゐることが多い。

アオミドロ (水綿) 植 池沼または古井戸などに生ずる藻類の一種で、體は綠色の纖維をなし、枝をもたない。構造が大さう簡單で、細胞が一行に縦にならんでゐるにすぎない。ホシミドロもこれに似てゐるが、顯微鏡で見なければ、區別がつかない。

アオムシ (螟蛉) 動 主として煙草の葉を害する昆蟲である。體長五分、翅をひろげると一寸ばかりになる。ネキリムシの類にはいる。イネノアヲムシと稱せらるゝものは稻の害蟲である。

アカ (垢) 生 表皮の一部の剝げたものや、汗の水分が蒸發して残つたものや、皮脂腺から出た脂肪や、體に附着いた塵埃などの一緒になつたもので、よけいにたまると皮膚の作用を妨げ、色々の病氣を起すものになるから、時々洗ひ落したはうがよろし。

アカウキクサ (滿江紅) 植 羊齒植物の蘋類に入るもので、葉は紅くて細い鱗狀をなし、上片を水面に出して下片を水中に入れ、根は髻のやうに水中に垂れてゐる、子囊

は葉腋から生じ、大小二種の胞子があり、大胞子は一個で雌性、小胞子は多數あつて雄性を帯びて居る。

アカエイ (赤鰐) 動 エイの條を見よ。

アカガヘル (赤蛙又山蛤) 動 體は瘦せ、後肢が大さう長い。大抵色が赤く、眼の後と後肢に黒斑がある。昔から食用にせられてゐる。

アカナス 又トマト (蕃茄) 植 原産地は南米ペルーであつて、今では我が國にも盛んに栽培せられる。果實は煮て食ひ、生のものはソースをつくる原料にしたり、サラダとしたりする。

アカニシ (紅螺) 動 殻の内面が紅色で美しい。長さは四五寸、殻の表面は淡褐色で、これに黒褐色の斑紋が縦に走つてゐる。ナギナタホリヅキといふのはこの貝の卵が厚い膜につまされたものである。巻貝の一種である。

アカハラ 動 イモリに同じ。

アカハラ 動 ウグヒに同じ。ウグイの條を見よ。

アカマツ (赤松) 植 樹の皮は赤褐で主に海岸に遠い地方に發育する。生長が速く四五十年たてば直径一尺以上五尺、高さ四十尺より百尺以上にも及ぶことがある。葉は黒松にくらべて軟かく、色も淡い。クロマツをヤマツといふに對して、アカマツをママツと云ふ。

アキニレ 植 ニレに同じ。

アキノナナクサ (秋の七草) 植 昔から秋の七草と云つてゐるものについては、色々の説があるが、萬葉集に出てゐる山上憶良の秋の野の花をよんだ歌に「萩が花・尾花・葛花・嬰麥の花・女郎花また藤袴・朝顔の花」とあるによつて、近頃はこれを主にとつてゐるやうである。併しこの歌のうちに詠んである瞿麥の花はカハラナデシコ、朝顔は今ノキキヤウであるといつて居る。

アキレスシタン (アキレス氏腿) 生 人體の中で一番大きく、そして一番強い腿である。歩くにも走るにも飛ぶにも悉くこの腿をつかふ。この腿は上部は腓腸筋・比目魚筋につながら、下部は跟骨につき、踵を引き上げる用をなすものである。

アクビ (欠伸) 生 緩く深い吸息をし、次にまた緩く深い呼息を行ふことで、肺の中にとまつた炭酸瓦斯を出して多量の酸素を得る效がある。

アゲハノチヨ (鳳蝶) 動 この蝶は一年に三回發生し、その時期につれて翅の色もちがふが、大概前翅は黒く黄色の斑紋があり、後翅に燕の尾のやうな突起がある。幼蟲は、エズムシ又はオキクムシなど、稱せられ一寸三分に達し、暗緑色で赤黄の紋あり、頭に近く一對の黄色の肉角がある。平生はかくれてゐるが、敵にあふと直にあらはれて悪臭を放つのである。

アコ (榕樹) 植 琉球・臺灣その他の暖地に産する常緑喬木で、幹の高さ五丈、周囲五尺に達する。樹皮は赤黒色で緑白の斑點があり、梢上から氣根を垂れて、地中に入り、一樹で一森林をなすことが珍らしくない。果實は無花果に似てゐるが小さい。琉球に産するこの一種にガジマルといふのがある。この氣根は地上に達することなく、ちやうど髯のやうである。材は大そう堅硬く、木理が甚だ美しい。琉球朱塗又はガジマル漆器と稱せらるゝものはこれを原料としたものである。

アコヤガイ 動

シンジュガイに同じ。シンジュガイの條を見よ。

アサ (大麻) 植

温帯及び熱帯地方に栽培せられる一年生の草で、よく成長した莖は一丈二三尺に及ぶことがある。葉は五裂乃至九裂の掌状複葉で内皮は強靱な繊維から出来てゐる。この繊維から綱・網・織物などを製造し、種子は香辛料に、その種油は燈用・料理用の外、繪具・ペンキなどを溶解くに用ひられる。

アザ (痣) 生 色素が表皮の下に沈着したために生ずるものである。黒子もこの一種である。

アサガオ (牽牛花) 植

昔は種子を薬用に供しただけであつたから、花の色や形はいづれも單純でありましたが、今は觀賞用として栽培せられるので、種々の變りものが見える。園藝家が蔓の先を摘むのは生長をとめて開花を促すためである。種子は有毒である。

アサクサノリ (淺草海苔) 植

アマノリの一種であつて、今の東京淺草邊一帶が東京灣であつた時代にこの海中に生じたものを採つて食品に製したので、この名稱が起つた

のである。今は大森・品川・羽田などで採つてゐる。元來滿干兩潮線の間にある岩石に生ずる種類であるけれども、需要が多いから人工によつて養殖する。その法はまづ筵と稱する檜・樺・椎・竹などの一丈内外の枝を五六本宛束ね、満潮の時の深さ六七尺の砂地の海底に、一尺五寸から三尺位土中に入るやうにして立て、東と東との間は三尺程へだてて數十列をつくる。秋の彼岸前後一箇月にたてるとノリが枝條につき十一月頃すでに早いものを採取することが出来る。波の静かな灣内で、淡水のまじる所は一番養殖に適する。

アザラシ (海豹) 動

鹽豚獸・海驢などと同じ類である。この類は體が魚の形で短い毛があり、四肢は短くして鰭のやうになつて居る。食肉性で常に海中にすみ、游泳ぐことは迅速いが陸上の歩行は至つて拙い。海豹は體長六尺、黄灰色に褐黒色の斑紋があり美しい光澤を有して居る。常に同一の場所に群居し、住所をかへない。水中に入る時には鼻孔をとり、時には半時間近くも潜つてゐることがある。上陸して睡眠るときは番兵をゝいて警戒するさうだ。

アサリ (蛤仔又淺蜆) 動 ハマグリとほゞ棲む所が同じい。二枚の殻は卵形で、淡茶色に白い斑紋がある。この色と斑紋は海底の砂に似てゐるので保護色となる。

アシ (蘆) 植 ヨシともいふ。高さ七八尺、水邊に生じ、地下に莖を伸して繁殖する。葉は幅がひろく長さは一尺にも達する。秋、長い穂をぬいて開花し、穎は長大、褐色、毛なく、殻片は芒がのびて白い毛にかこまれてゐる。

アシカ (海驢) 動 體は黒褐色で往々斑紋がある。體長一丈五六尺で雌は大きう小さい。海豹に似て頭が稍長い、アザラシ・オットセイに近いものである。

アスナロ (羅漢柏) 植 鱗葉樹の中で一番大きい葉を有する種類である。本州中部以北の山地に生じ、ヒノキに次いで各種の用材となり、よく水濕に堪へる。青森縣のアスナロ林・木曾のヒノキ林・秋田のスギ林は我が國の三大美林として名高い。

アスファルト (土瀝青) 礦 重油が天然に固つたもので、成分は炭化水素である。石油地方に産する。黒い樹脂のやうな物で脂肪光澤がある。擦すれば一種の臭氣を放ち、熱すれば直に溶け、火を點すれば濃い煙をあげて燃える。屋根板、床板などに塗り、

黒いワニスを製し、土瀝青セメントをつくるに用ひられる。

アセ (汗) 生 皮膚内の汗線から出る液體である。無色透明で一種の臭氣をもち、少しく鹹味がある。成分は水、食鹽、尿素、揮發性脂肪酸などで、水は九割九分を占めてゐる。汗は體温を平均にたもつ上に大そう關係のあるものであつて、人の體から出す量は一日平均約三合である。

アセモ (汗疹) 生 汗の多く出たために皮膚が犯されて小さい疹を生ずるものである。天華紛を塗るとよろしい。

アダン (阿旦) 植 單子葉類に屬する植物で、林投樹の變種である。我が國では琉球に自生し、大きい氣根を生じ、幹の高さ一丈五六尺に到る。林投樹とちがふ點は、葉の下部だけに短くて小さい棘を生ずることである。果實の肉と皮を取り去つて纖維だけを附けたものを毛筆の代用にするところがある。俗にアダンフデと云い。

アツシノキ 植 オヒヨリの條を見よ。

アナアオサ 植 アオサの條を見よ。

アナグマ (獾) 動 ササグマともいひ、信州木曾ではマミとよぶまた或る地方ではこの獸をムジナと呼んで居る。體は狸ほどで長い毛があり、前肢の爪は強大で、敵に追はれた時は忽ち地中に穴をほつて逃げ去る。

アナナス 植 バインアップルに同じ。

アネハヅル (姉羽鶴) 動 ツルの條を見よ。

アネモネ 植 觀賞用としてよく栽培せられる草本である。三月頃花莖をのぼして椀状の花をひらく、一重咲・八重咲・菊咲など様々ある。栽培法は花が過ぎて後、葉の枯れるを待ち、根を掘り取つて乾いた砂の中に埋め、秋の彼岸頃再び植ゑる。肥料には油粕や燐酸などの薄いのをほどこすがよろしい。

アヒル (鶩) 動 マガモを飼ひならして變じさせたもので、體は鴨よりも大きく、翼は短くてよく飛び得ない。卵と肉は食用にせられる。品種が多い。

アブラナ (蕪菁) 植 二年生の草で莖の高さは三四尺あり、葉は柄なくして莖を抱き、花瓣は黄色で四枚十字形にならんでゐる。雄蕊は六本、中四本が長く二本が短い。その基には四個の蜜槽があつて綠色をして居る。種子から種油を採り、その搾り粕は肥料にする。

アブラムシ (蚜蟲) 動 アリマキとも稱せられる。種類が大さう多く、植物の液汁を吸うて大害をあたへる。體は綠色又は黒色で、肛門より甘い汁を出す性がある。蟻がこの蟲のまはりに居るのは、これを保護して、甘露を得るためである。

アベマキ (綿櫛) 植 クヌギによく似てゐるが、葉は長楕圓形で、裏に白い毛茸のあるところがちがつてゐる。樹皮のコルク層が大さう厚いのでコルククヌギとも云ふ。

アホドリ (信天翁) 動 バカドリともいはれ、主として熱帯の海にすむ。翼がすこぶる長く、數日の間休みなしで飛行することがある。尾は大さう短い、我が國の近海に産するものはその體色白から暗色までいろいろあるが、嘴と脚は常に青味ある白色である。

アマ (亞麻) 植 一年生の栽培植物で、纖維が柔軟で、純白色であつて光澤があるから、リンネルやその他の織物を製造する原料とせられる。種子からは亞麻仁油を取つて藥

用に供し、その搾粕は亞麻仁粕と稱して家畜の飼料や肥料にする。

アマガエル (雨蛙) 動 各地に普通である。小形の種類で體は綠色である。趾の端にある吸盤でよく水にのぼる。雨がふらうとする時や、俄か雨などには盛んに鳴く。上顎に齒があり、昆蟲殊にウンカの類を食ふ。アマガエルによく似たものでアヲガヘルがある。アヲガエルはアマガヘルよりも趾端の吸盤が大きく、蹠が趾の半ばに達し、舌のきれこみが深い。

アマノリ (紫菜) 植 紅藻の一屬の總稱であつて、本邦に産するものは二十種をこえて居る。體は綠紫色・薄皮狀で一層の細胞よりなり、細胞膜は大さう厚く、表面は一樣に滑かである。多角形又は楕圓形の細胞の中に、葉綠素・藻紅素の二色素粒を有し、乾燥けば紫黑色に變る。

アンコ (鮫鱈) 動 頭部大きく口が大さう闊く、眼及び鼻は上に向いてゐる。背部は淡褐色で腹部はやゝ色が淡い。背鰭の一番先の棘は觸鬚にかはり、やはらかで大きくなつてゐる。胸鰭がよく發達して手の掌の如く、海底を匍ひあるく役をつとめる。ア

ンカウは岩や海藻や泥の中にかくれて、觸鬚をふりうごかし、小さい魚などをさそひ、魚が來てこれを食はうとすると、大きな口を開いてのみこむ、體の長さは四五尺にも及ぶものがある。

アンザンガン (安山岩) 鑛 火山岩の一で富士岩とも稱せられ、斜長石・輝石または角閃石が主なる成分である。我が國の火山は大抵この岩から出來てゐる。種類がすこぶる多く、色も一樣でない、小松石、根府川石などいふものはいづれも安山岩で、建築材や石碑などに用ひられる。

アンチモニー (安質母尼) 鑛 灰白色の金屬で、軟かく且つ脆く、火に溶け易い活字金をはじめ、種々の合金をつくる。自然に出ることは稀で、主として輝安鑛から製煉する。

アメーバ 動 ゲンセードロプツの條を見よ。

アメンボ (水黽) 動 川沼などの水上を走つてあるく昆蟲で、體細長く黒褐色をおび、中肢と後肢は前肢より長く、これを以て蜘蛛のやうに水上をはふので、カハグモとも

らよ。

アヤメ (溪蓀) 植 單子葉類鳶尾科に屬し、カキツバタ・ハナシヤウブなどと同じ類の植物である。葉は劍狀でその基は紅色、中央の主脈は膨れてゐるけれども、あまり目立たない、而して上の方へ行くに従つてわからなくなる。花莖は大抵葉よりも低く、二三花を着生する。萼片は圓形で莖色をなし、柄は黄色で中央から紫の線が左右に出てゐる。花瓣は直立して、長い楕圓形である。

アユ (鮎) 動 我が國各地の河川に産する。よく急流をよぎ水垢などを食ふ。琵琶湖に棲む一種 (コアユ) の外、幼魚は一寸位に成長した頃海へいで、二寸位にいたつて再び川へ上つてくる。成長したものは一尺をこえ、背が蒼黒く腹が白い。

アラメ (荒布) 植 褐藻類に屬し、カジメの生ずる所より稍深いところに産する。葉の真中は肉が厚く、これにますぐに伸びた小さい葉片を羽狀に着け、中央部の各片が一番大きく、下部にいたるに従つて小さく、最下部のものは突起狀になつてゐる。食用としたり、沃度灰の原料としたりする。

アララギ 植 イチイの條を見よ。

アリ (蟻) 動 地中または朽木の中に巢をつくり、多數集まつて社會生活をしてゐる。

一社會の中に雌蟻・雄蟻・働蟻の三種があつて勤勉な昆蟲である。白蟻については同條を見よ。

アリマキ 動 アブラムシに同じ。同條を見よ。

アルパカ 動 羊駱駝ともいはれ、南亞米利加中部の山地に産する。體はラマより小さく、毛は織物に用ひられる。往々二三千頭の大群をつくつてゐることがある。

アルミニウム 鑛 自然に産することなく、化合物となつて他の岩石や土壤の中にある。銀白色で金屬の中で一番軽く、強靱くて展性や延性にも富んでゐる。空氣中には容易に錆びず、火にもなか／＼熔けないが、酸類にはよく熔ける。我が國には未だこれを産しないから佛國・米國などから輸入する。日用の食器類をはじめ、裝飾品・理化學機械などをつくり、銅と合してアルミとし、箔として物を包む。氷晶石・ボークジツトなどから製煉する。

アワビ (鮑又石決明) 動 巻貝の一種である。貝殻は耳形で、殻の口が大さう大きい。長さ六七寸、殻の外縁に一列の孔がありつきぬけてゐるものが四つ五つある。色は褐に少しく紫色をおびてゐる。

イ

イ (膽) 動 熊のイといつて、胃痛をしづめる薬は膽汁のはいつてゐる膽囊のことである。

イ (蘭) 植 單子葉類に屬する多年生植物で、沼や澤などに自生し莖の高さ一二尺であるが、これを水田に栽培するときは五尺にも達する。莖は緑色で圓く、直径一二分あり。基部から枝を生じて一株數百莖にもなる。これを織つて疊表や花莖をつくり、外國へも輸出する。また白色の髓をひきぬいて燈心をつくる。

イ (胃) 生 横隔膜の直ぐ下にある囊で全體は丈夫な筋肉より成り、内面に多くの褶皺がある。その食道につづく部を噴門、小腸に連る部を幽門といふ。胃は食物が這入つて來くと直ぐに運動を始めて食物と胃腺からでる胃液とを混ぜて、食物を軟かくして粥のやうにすると同時に、これを消毒し、且つ蛋白質をペプトンとなすのである。而してこれを小腸に送りて更に消化せしめる。

イエキ (胃液) 胃腺から出でる液で、主なる成分は水・胃液素・遊離鹽酸である。無色透明で酸性を帯び、蛋白質を消化し、細菌を殺す作用がある。

イエキソ (胃液素) 生 胃液の中にある一種の酵素で、ペプシンともいふ。鹽酸と一緒に蛋白質をペプトンに變ずる働きをする。

イエバト (家鳩) 動 ドバトの條を見よ。

イオー (硫黄) 礦 自然硫黄は火山地方から噴き出した亞硫酸瓦斯に硫化水素が作用して出來たものである。硫黄華は俗に湯の花と稱し、硫黄泉の沈澱物として生じたものである。我が國はイタリア・アメリカに次ぐ硫黄産地として世界に知られてゐる。

イカ (烏賊) 動 マイカ・スルメイカ・ヤリイカ・ホタルイカなどを總稱していふのである。マイカは形隋圓形で、長さ六七寸、體の兩側に鰭があり、これをもつて靜に海中

をおよぐ、皮膚は蒼白く、紫褐色の斑点がある。スルメイカは體が細長く、脚の吸盤は二列にならんでゐる。ホタルイカは小形で體に發光器があり、夜間光を發する。ヤリイカは體の後端が大さうとがり吸盤は四列にならんでゐる。烏賊はすべて速く運動する時は、頭の下にある漏斗管から急に水をふき出して後の方へおよぐものである。墨囊の中には墨汁があつて敵に追ひかけられると、これをふき出して水をにがし。體をくらす。脚は十本ある。

イガ (衣蛾) 動 衣類・毛織物・動物の標本などを食ふもので、翅は淡黒褐色、いたつて小形で翅をひろげても五分に及ばない。

イガイ (貽貝) 動 イノガヒともいはれる。肉は大さう美味なので知られてゐる。水のきれいな近海にすみ、殻は三四寸で、表面が黒く内面は眞珠色である。他の二枚貝とちがひ、足は小さくて移動することが少く、細い絲をたくさん出して岩石についてゐる。

イクワンソク (維管束) 植 植物の體内にあるスヂで、韌皮部と木質部とから成つてゐる。

る。葉脈の如きは莖の内にあつた維管束が、葉柄をとほつて葉身に入り、細く分れたものである。維管束は養分の通路となり、且體を丈夫にする用をなすものである。

イシガメ (水龜) 動 我が國各地の池や沼に棲み、蛙・小魚・蠕蟲などを食物としてゐる。背面にはいはゆる龜甲形の角質板があり、腹甲は黒い、五趾の間に蹼があつて水をおよぐ。數月の間少しも食物をとらないでもへを休つてゐる。俗にゼニガメといふのはこの幼いもので、甲の形のやゝ圓く尾の長いところから、別種のやうに思はれたのである。又ミノガメといふのは時々この甲に綠藻の着生することあるのをみあやまつたのである。

イシモチ 動 グチに同じ。同條を見よ。

イシワタ (石綿) 礦 蛇紋石などの變質して、白い纖維狀をなすものである。よく火に耐へるから綿や線とし、或は織つて防火衣をつくり、或は蒸氣管を包んで熱の放散を防ぎ、或は石絨紙に製して金庫や耐火家屋の壁にはるなど用途が多い。

イスカ (交喙) 動 松や樅の種子を食ふ。嘴は先端が鋭く、右から左にくひちがつて

て、果實の殻を剥く。に都合がよい雄は頭が赤く黒褐色をまじへて居るけれども、雌は灰褐色に黄色をまじへてゐる。幼鳥は暗緑色で黒い斑があり、嘴もくひちがつてはゐない。體は雀よりやゝ大きい。

イセン (胃腺) 生 胃の内面にあつて胃液を分泌する腺である。

イソギンチャク (菟葵着) 動 體は圓筒形で、多くは海底や岩礁に附着してゐる。上端に口があり、口の周圍に多くの觸手が生え、水中にあつては菊の花のやうにひろげてゐる。食物がこれにさはると直に縮んでこれを捕へて刺し殺すのである。體色は種類によつて様々である。アライソギンチャクのやうに淡青又は淡黄のもあり、ウメボシのやうに暗赤色のもある。サンゴやクラゲに近いものである。

イタチ (鼬鼠) 動 人家に近い山間。又は村落・市街等にも棲んでゐる。體の色は赤褐である。家禽・鼠・魚等を捕へてよく血を吸ふ、敵に追はれて窮するときは、悪臭を發して逃げ去る。最後尻といはれるのはこれである。

イタヤガイ (花蛤) 動 一名をシャクシガヒといふのは昔から杓子に用ひられてゐるからである。ホタテガヒに似てゐるが殻は楕圓形である。右の殻は大さう膨らみ左の殻は平たい。外面の隆起條は十三本で、ホタテガヒの條の半分より少い。

イチイ (一位、紫杉) 植 一名をアララギともいひ常緑の喬木で、内地の高山及び北海道の山地に自生する。葉は線状をなして尖り種子の半部は赤色肉質の假種皮に包まれてゐる。假種皮を食用とし、材を建築用・器具用とする。笏はこれで製したものである。

イチカク (位置覺) 生 主として筋肉・關節・腱などにある知覺神經によつて體の位置や姿勢を知る感覺である。

イチゴ (莓) 植 舶來のオランダイチゴは果實をとるために畑に作られるが他は山野に自生してゐる。即ちクサイイチゴは草本で原野にあり、四五月頃白色の花を開き、ナツシロイチゴは蔓性で地上を匍ひ、五六月頃淡い紫色の小花を開く。またキイチゴは四月、バライチゴは七月に開花し、共に灌木であつて山地にのみ産し、花の色は白く、果實は食用となる。すべてイチゴの花は梅鉢形で、花瓣と萼片は五枚づゝあり、雄蕊

と雌蕊とは多數ある。吾等の食用とする所は主として花托の肥大したもので、種子と思はれる所は子房の硬くなつたものである。

イチジク（無花果）植 東印度から傳來した落葉果樹である。花は倒卵形の花軸の内にあつて外にあらはれない。吾人が果實として食用に供する所は、この花軸と内部に於ける子房の熟したものである。

イチネンセイコン（一年生根）植 一年生植物の根である。

イチネンセイシヨクブツ（一年生植物）植 その生じた年内に枯れてしまふ植物である。

イチネンセイソホン（一年生草本）植 一年生根を有する草本で、キウリ・アカナスなどの類である。

イチヨイ（公孫樹）植 東洋の特産で庭樹として趣あるばかりでなく、學術上から見ると、顕花植物と隱花植物の連鎖となる位置にあつて、最も重要な植物である。米國に産するマンモス樹と共に、前世界に於て非常の隆盛をさはめたもので、これに似た

種類が世界の各地にあつただけで、追々絶滅して、今は日本と支那に於てのみしか見ることが出来ない。この植物の葉が秋季黄色に變るのは緑色素の分解によるものである。凡そ葉のうちに含まれてゐる葉緑体内の緑色素は葉緑質と葉黄質とが合成したものであるが、葉緑質は窒素、マグネシヤを含み、これらの元素が吸収せられ難い性質のものだから、莖や枝に送つて貯へてしまふ。そこで黄色を呈することになるのである。

イチヨールイ（公孫樹類）植 裸子植物に屬し、葉は扇形をなせる植物の類で、公孫樹科といふ一科をおく。

イトウオ 動 トゲウオの條を見よ。

イトバシヨイ 植 バシヨイの條を見よ。

イトミミズ 動 汚い水の流れる溝や小川の泥土の中に棲み、尾を上に出してたえず動かしてゐる。體は赤い糸のやうで、長さは一寸位、時期によつて大さう群集することがある。金魚や鯉の餌とするために採集せられる。時に苗代に群生して大害をなすこ

ともある。

イナ 動 ポラの條を見よ。

イナゴ (蠶蟲) 動 害蟲であつて、ことに幼蟲は稻の葉を食べて大害をする。體は黄緑で後肢が長く、跳躍ぶときは、肢と翅の縁と摩擦合ふので一種の音を出す。秋の末に畔のあたりを掘りて地下一二寸の所に卵を産みつける。

イヌ (犬) 動 犬はその種類頗る多く、變種は約二百餘もある。エスキモー犬の如く橈を引もの、スバニエル・セッター・ポインターのやうに獵に用ひられるもの、ブルドックの如く番犬に適するもの、狎の如く愛翫用のものなど、品種によつて體形は多少違つてゐる。總べて犬は性質が従順で馴れ易いので昔から愛養せられ、又嗅覺が鋭いから近來は探偵にまで使はれてゐる。和犬は維新後は追々少くなり、今は殆ど見ることが出来ない。

イヌワシ (狗鷲) 動 ワシの條を見よ。

イネ (稻) 植 イネとは生き根、すなはち生命の根源を意味するといふけれど、印度語

たるウル・ウルイ・ネバリ・ネルーなどの方言からウルシネとなり、追々訛つて來たものらしい。英語のライスは埃及語のアルス又はルスより轉じたものであらう。糯と稗の二種類があり、各々がまた幾多の品種を生じてゐる。

イネハムシ 動 ドロムシに同じ。同條を見よ。

イノガイ 動 イガイに同じ。同條を見よ。

イノシシ (野猪) 動 四肢短く全身暗褐色である。頭が短いので急に方向をかへることが出来ないで、走る時は一直線に突進する。兩顎の犬齒はよく發達して口外に出て外の方へ彎曲つてゐる。鼻は筒のやうに長くのびて土を掘ることが出来る。夜間出て蚯蚓などをほり、時には溪へ下つて蟹をとることもある。我が國では古來シシといつてゐた。

イビキ (鼾息) 生 口を開いて呼吸をするとき、吸氣が口の奥に垂れてゐる懸壺垂に觸れて一種の音聲を發するもので、睡眠中に多い。

イボ (疣) 生 皮膚の一部が殊に肥大したものである。

インクワシヨクブツ (隠花植物) 植 顕花植物に對し、花を開かず、種子を生ぜず、胞子を生じ、または分裂法・芽生法などによつて蕃殖する植物の總稱で、胞子植物とも云はれる。羊齒植物・蘚苔植物・菌藻植物の三つにわけける。

インゲンマメ (菜豆) 植 蔓性の一年生草本で各地に栽培せられ、五月ササゲともいはれてゐる。慶長年間に宇治黄檗山の開祖隱元禪師が支那から持つて來たのでこの名がある。最初は白色蔓性の一種だけであつたが、その後品種を増加したものであるといふ。

インコ (鸚哥) 動 オームの條を見よ。

イントー (咽頭) 生 前は口腔、上は鼻腔、下の前方は喉頭、後方は食道に續き、食物の通る路と空氣の通る路との交叉點である。飲食が通るときは軟口蓋で鼻腔への路を塞ぎ、會厭軟骨で喉頭の入口を閉ぢる。

インドゴムノキ 植 東印度原産の植物で、セアラゴムノキやバラゴムノキとは全く別な種類である。常綠喬木で高さ凡そ六尺、花や果實はイチジクによく似てゐる。これからゴムを採取すると大さう利益が多いといふことである。その方法は他のゴムノキと同じ。

イモリ (蝶螺又井守) 動 ミヅトカゲとも稱せられ、我が國の小川・池沼などに普通である。背は暗色で腹部が赤いのでアカバラともいはれる。四肢は短く、顎の下には横の襞がある。雄は脊が廣くて四角形をなし、雌は圓い。空氣を呼吸するために、時々水面に出でくる。食物は昆虫・蠕虫・小魚などである。兩棲類に屬する。

イルカ (海豚) 動 シヤチに似てゐるけれども體の長さは短かい。口吻は著しく尖り、脊鰭は後の方に曲つて居る。多數群をつくつて波間をおよぐ。背は藍を帯びた黒色で腹は白く我が國の近海にも澤山産する。

イワシ (鰯又鰯) 動 イワシの類は常に海の表面近いところを群がつて泳ぎまはるもので、その中、マイワシは體の長さ六七寸、背は蒼く腹が銀白色で體の兩側に五六箇の斑點がある。口は斜に上に向ひ、齒は殆んどない。大さうよわく、水をはなれると直ちに死する。我が國各地に産するが、千葉縣の九十九里濱は殊に名高い。ウルメイワ

シは形ちマイワシに似てゐるけれども、腹鱗は背鱗よりも後方にあるから、直ぐ區別が出来る。前二種よりも小さいものにシコと云ふのがある。それは大さが僅かに三四寸で口は大さう闊くして上顎は下顎よりも突き出てゐる。それでカタクチワシとも呼ばれてゐる。ゴマメと云ふのはシコを乾したものである。

イワタケ(石耳) 植 地衣の一種で、よく乾かし調理して食用に供する。體は葉狀で裏面の中央に短い柄があり好んで花崗岩に付き、深山の喬木帯の中に珍らしくない。多く群生し、直徑三四寸のものが普通であるけれども、七八寸に達することもある。新鮮なるものは表面は綠色を帯び、裏面は黒色の毛で被はれてゐるが、乾かせば大抵褐色にかはる。

イワツバメ(岩燕) 動 ツバメの條を見よ。

ウ

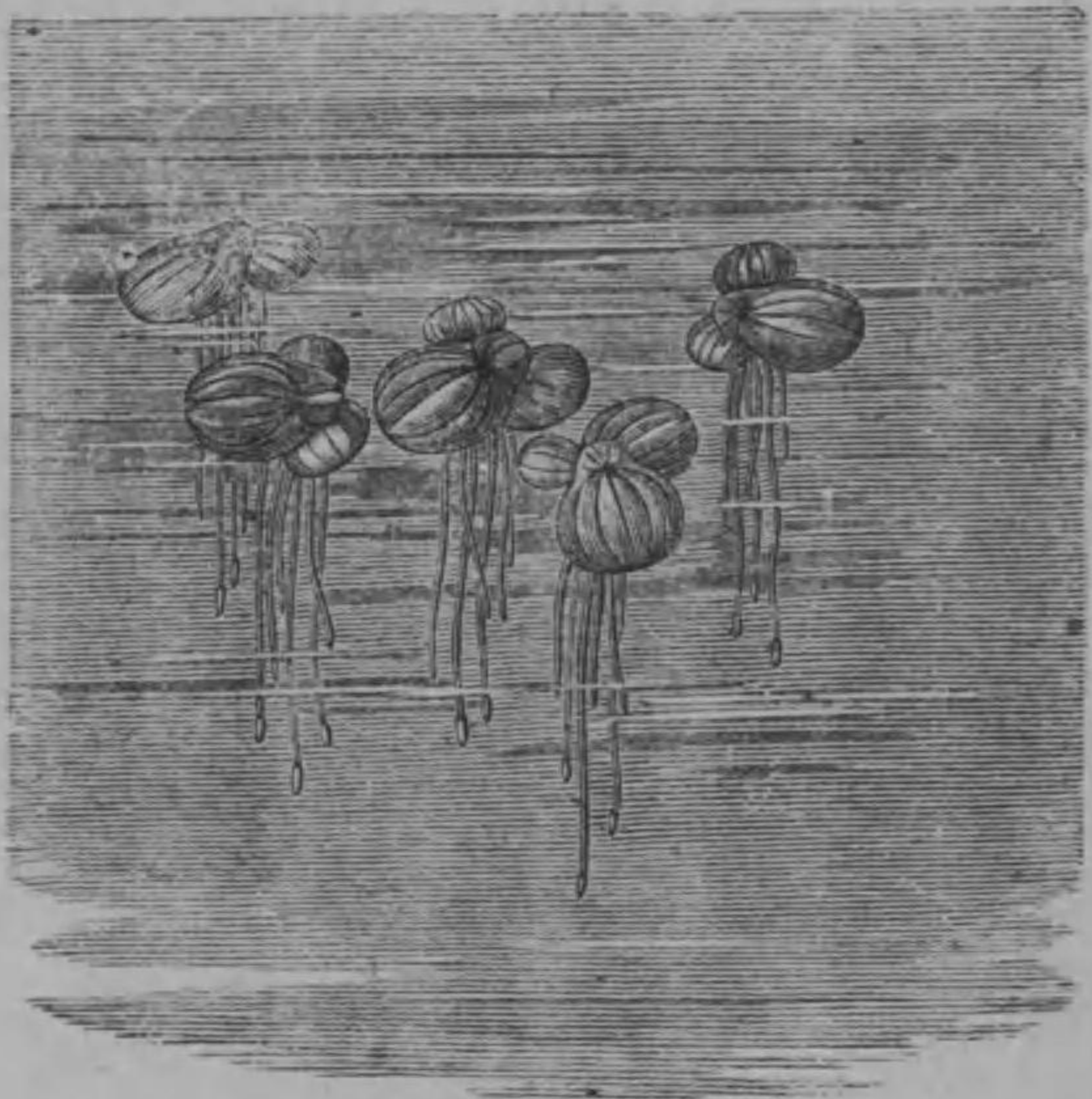
ウ(鵜) 動 雁・鴨・鶺鴒などはいづれも脚短く、體の後方につき、且つ趾の間に蹼あ

つて、櫂のやうにつかひ、よく水をおよぐ類である。鵜にいたつては一そうこれに都合よく出来てゐる。即ち脚になほ短く蹼は、前趾のみではなく、後趾と第二趾の間にもある。頸と體は長く、嘴の先端が少し曲つて鈎なりになつてゐる。水中をもぐつて魚類を捕へることが上手だから、飼ひならして鵜飼につかふ。岐阜縣で使用するのは主としてカハウで、普通に鵜と稱するのはウミウのことである。海鵜は全身殆んど黒く、成長したものは咽喉が白く。全長三尺に達する。河鵜もこれによく似てゐる。

ウーロンチヤ(烏龍茶) 植 茶の一種である。臺灣に産し、これから製した茶は普通の茶のやうな苦味も澁味もなく、芳香があつて味もよいので米國人は大さう賞用してゐる。砂糖・牛乳などを混ぜて飲む。

ウオノメ(鵝眼) 生 表皮細胞がよけいに形成せられて厚くなつたもので、イボよりかたい。

ウキクサ(浮萍) 植 水面に浮遊する植物で、一見葉のやうな體は實は平たい莖であつて、その裏は紅味を帯びてゐる。縁の凹んだところから枝を出し、枝の端に新體をつ



(ウキクサ)

(三二)

くつて盛に繁殖するので、水面にあるときは日光の透過を妨げて稻の發育を害するものである。根はその先きに根帽といふ囊を被つてよく保護せられてゐる。一種アヲウキクサは本種よりも小形であつて、裏は緑色である。

ウグイ (石斑魚) 動 我が國到る所の川

に棲む魚で、背は淡綠色に淡黒色の斑紋があり、腹は少し紅く、その下部は

白色である。體の長さ、一尺に達する。一にアカハラともいはれてをる。

ウグイス (鶯) 動 春告鳥・經讀鳥・花見鳥などといはれて、古くから詩歌によめこまれ

てゐる。體の上部は淡橄欖色で下部は灰色、眼の上に淡色の眉がある。我が國の特産で、いたる所に棲む。冬の初に山からいで春になつて美しく轉づるが夏秋にはまた山

にうつる。

ウサギウマ (驢馬) 動 耳が束のやうに長く頭の長さの半分程もあるからこの名があ

る。體は馬より小さいが割合に重い荷を運び、忍耐力があるので支那ではよくこれを飼つて置く。乳汁はその成分が人の乳汁に似てをるから歐羅巴ではこれを用ひて子供を育てるさうである。

ウシ (牛) 動 牛は利用多いので到る所に飼はれる。我が國の牛は體は小さいが痘苗用

にせられ、又但馬牛は肉が美味な所から名高い。ホルンスタイン・シエルシー・シヨートホルン等の外國種は、乳汁用・肉用として賞せられる。牛の體は馬より肥て大きく、頭には骨心ある二つの角を生じ、四肢は強健で中指と無名指との趾端で地を踏む。鹿・羊・駱駝等と同じく反芻する類にはいる。反芻といふのは、一度嚙下した食物を再び口に戻して、能く咀嚼することである。豚・猪・河馬等は蹄の二つあるところは同じだが反芻はしない。

ウシアブ (牛蛇) 動 黒褐色で長さ一寸に達する。胸背に黄色の毛を生じ、黒い縦線が

ある。夏日林の中に多くとんでゐる。雌は人や家畜の血を吸ふ。

ウツギ (溲疏) 植 山野に自生する落葉灌木で、五月頃白色五瓣の花をひらく。古來卵の花といはれて歌などによまれた植物である。葉は長楕圓形で先端がとがり、葉の面が粗澁してゐる。材を以て木釘をつくり、また生垣とするために植ゑられる。

ウヅラ (鶉) 動 體は小形で尾は短く、羽色が黄褐で白黒の條紋がある。伊太利地方では夏季に亞非利加からわたり、我が國では冬季西比利亞から來る。常に草原にゐて昆虫や種子等を食する。雞に近い鳥である。

ウナギ (鰻) 動 我が國の河川・近海などに産する。淡水に棲むものは雌で、雄は淡水と鹹水のまじつてゐる所に居る。産卵期になると雄も雌も三四百尋の深海へいつて卵をうむ。體の長さは三尺あまり、鱗は皮膚の下にかくれ、腹鰭はない。大概褐色で腹白く、夜出て小動物を食ふのである。體が圓筒状をなし、皮膚の粘つて滑なるところは泥鰻と同じい。

ウニ (海膽) 動 體形は薄く丸く、皮膚の骨片が互に結合して殻をつくり、殻の表面に多少無數の棘があつて、ちやうど栗の毬に似てゐる。管足は列をなしてならば、口は殻の下面にある。この卵巢を醃藏としたものは雲丹と稱せられる。雲丹は下の關・越前・北海道などから産する。海膽類は我が國到る所の海に棲み、底の岩の間や泥土の中に居つて小動物を捕へ食ふものである。

ウニコール (一角) 動 體の色は白又は淡黄色で、上頤に二箇の門歯があるが、牡は大抵その左の方がよく發達し、牙のやうに六七尺も長く前方につき出て居る。この牙は昔から一角といつて藥用に供したもので、白色で螺旋のやうに溝があり、強力な武器となる。體の長は一丈五尺より二丈に及びグリーンランド附近に多く棲んでゐる。

ウノハナ 植 ウツギに同じ。

ウバザメ 動 サメの條を見よ。

ウマ (馬) 動 牛にくらべて頭が長く鬣があり、中趾だけに蹄があつてこれで地を踏んでゐる。齒は大きくして草の類をすりくだくに適してゐる。毛色は種々あり。性質温順で勞役をいとはず用途の廣いことはよく知られてゐる。昔から世界到るところに

飼はれ變種が多い。その中でもアラビヤ馬は乗用として殊に有名である。日本の馬は西洋種より體格は少し劣つてゐるけれど脚は丈夫である。

ウマオイムシ (馬追蟲) 動 體は綠色をおびて小さい。雄は背の上が黄褐色で、その發音鏡は綠色楕圓形である。スイトともいはれてゐる。

ウミウ (海鵜) 動 ウの條を見よ。

ウミガメ (海龜) 動 この類はひろく暖かい海にすみ、四肢はひらたくて鰭のやうである。よく海中をおよぎ、卵を産む時の外陸上へのばらない。この中でアラウミガメは我が小笠原島・琉球などに産し、甲は綠色である。大きいものは五六尺に及ぶ。正覺坊ともいはれてゐる。瑠璃は背面の角質板が瓦をおいたやうにならび、上嘴は下嘴より長くのびてゐる。甲の長さ三尺あまり、背面は淡黒または黄褐色である。古來籠甲といつて貴重せられたものは、この龜の角質板から製したものである。

ウミスズメ (海雀) 動 夏季北海に棲む鳥である。頭と頸の前部は黒色であるが、冬季になるとみな白色にかはる。翼はわりあひに短く、脚は體の後方についてゐるためにあたかも直立したやうに見える。

ウミホーヅキ 動 テングニシと云ふ巻貝の卵の囊である。ナギナタホーヅキはアカニシの卵囊である。

ウミニリ (海百合) 動 トリノアシともいはれ、我が國では相模近海の二百尋ほどの海底に固くついてゐる。體は二尺程の長さの節ある柄で立つて、柄の各節の左右に小枝を生じ、羽形である。體の中央部からは十個の腕を出し、この腕は幾箇も枝さいてゐる。大昔は非常に繁殖したものである。棘皮動物に屬してゐる。

ウンカ (浮塵子) 動 ヨコバヒともいひ、稻やそのほかの農作物の害蟲である。ツマグロヨコバヒはその體が綠色で小さく、雄は前翅の端が黒く、雌のは透明である。年四回發生し、幼蟲の時代は稻の莖をさずつけて一番害をなす。この蟲が草葉の上にとまつてゐる時、人が近づくと忽ち横にはつてにげる。

ウンドーカク (運動覺) 生 筋肉は運動神經及知覺神經を有し、その他關節や腱にも知覺神經が分布してゐるから、これによつて體の運動の方向、範圍、及び大小強弱を知

ることが出来る。これを運動覺または筋肉覺といふ。運動覺は觸覺と合して物の硬軟・粗滑・輕重・大小などを判定する。

ウンモ (雲母) 鑛 キララともいひ、大きいものは白熱瓦斯燈のホヤ・煖爐の側壁・軍艦の窓などに用ひ、細かい物は襖や壁紙などの模様とする。六角の板のやうな結晶をなし、全體が紙を重ねたやうになつてゐて、大さう剝げ易い。薄片は透明または半透明で、弾力性に富む。銀白または淡綠色のを白雲母、黒褐色のを黒雲母といふ。黒雲母は分解すれば金色にかはる。砂の中に混合つて金色をして光る粒は大抵これである。

ウメケムシ 動 梅・桃・櫻などの害虫である。幼蟲は背が藍色で黄赤の縦條があり、暗色の毛が生えてゐる。蛾は雄は黄色雌は赤褐色で何れも前翅に濃い帶紋がある。

ウメノキゴケ 植 地衣の一種であつて、植物體は葉片狀、假根によつてウメ・マツ・サクラなどの樹の皮に著生する。上面は灰綠、下面は黒褐色で、全面に凸凹がある。その表面にまき散らしてゐる粉は粉狀體と稱するもので、風に吹かれて適當なるところに到ると忽ち發育し、新しいウメノキゴケを生ずるものである。

ウラジロ (裏白) 植 本邦の暖地静岡縣以西の各地に自生する常綠の羊齒類である。地下莖は横にひろがつて葉を生ずる。葉柄は長くて二三尺にも達し、その第一の枝は左右對生である。

ウリバイ (瓜守) 動 ウリムシともいふ。小さい甲蟲で瓜類の葉を食ふので有名である。體は濃い黄色で細長く、前胸部に横の溝があり、體長二分程の小さい甲蟲である。クロウリバイは黒藍色の光澤ある種類である。

ウリムシ 動 ウリバイに同じ。同條を見よ。

ウルシ (漆樹) 植 ハゼノキに似た植物であつて、樹皮を傷つけて漆汁を採り、果實を搾つて蠟を取り、その搾滓は馬の飼料とする。漆の主成分は漆酸で、これに觸ると漆瘡を生ずる人がある。かゝる時、ヒノキの鉋屑を多量に煮出した温湯で、瘡部を浸すとはやくなほるといふ。ヤマウルシはウルシと殆んど同じいが、葉の縁にぎざぎざがあり、果實に剛い毛があるので區別が出来る。

ウルメイワシ 動 イワシの條を見よ。



エ(荏) 植 種子から荏油をとり、豆腐・餅・魚類の油揚げをつくり、傘・雨衣・提灯などに塗り、燈油・器械油に使用せられる。一名をエゴマといふ。唇形科に属する。

エー(穎) 植 ホーの條を見よ。

エイ(鯨) 動 鯨類のやうに骨骼は軟骨質から出来てゐるが、體は大概扁たく、尾はほそ長い。胸鰭は大さう濶い。赤鯺は背面に劔狀の棘があつて、よく敵を刺し、シビレエヒは頭の兩側に發電器があつて、強い電流をおこして敵を防ぐ。いづれも海底にすんで、甲殻類や小魚などを食としてゐる。

エイセー(衛生) 生 心身を健康ならしむることである。

エゴマ 植 エに同じ。

エゾマツ(蝦夷松) 植 北海道・樺太に産し、よくこの木だけで林をつくつてゐる。葉の先きはトドマツのやうに二分することはない。長さは七八分幅は六七厘あつて二條の

白い線をあらはす。幹の直径三尺、高さ十二丈に及ぶ。松杉科植物である。

エダ(枝) 植 腋芽の發達したもので、時には針となつてゐることもある。

エダシヤクトリ(枝尺蠖) 動 有名なる桑の害虫で、幼蟲は樹枝と同じやうな色でつかまつてゐると殆んど見分けがつかぬ位である。蛾は灰褐色で、前翅後翅に黒い條がある。

エビ(蝦) 動 體は長くのび、腹は蟹のやうに折れかへらず、自由にまげたりのはしたりすることが出来る。尾はいたつて大形である。イセエビは祝の物として用ひられ、體は暗紫色である。クルマエビはイセエビと共に肉の美味なので食用にせられ、甲はうすく柔かで、觸角がことに長い。シバエビは小形で淺い海に産し、淡黄色で綠色の小斑点がある。

エンゲ(嚙下) 生 飲食物を口腔から胃に送ること即ち呑みこむことである。

エンシガン(遠視眼) 生 水晶體が薄いために近いところの物體の像は、網膜のずつと後方に出来るから、眼を通ざけて見なければならぬものである。凸眼鏡でこれを調節

する。

エンズイ (延髓) 生 大脳と脊髄とを接合せる部分で、呼吸・咳嗽・心臓や血管の運動・
發汗・咀嚼・嘔下・唾液胃液涙液の分泌・嘔吐などの諸中樞がある。

エンセイ (延性) 鱧 引き伸ばせば次第に伸びて線となる性質をいふ。

エラブウナギ (永良部鰻) 動 琉球の近海に棲み、支那海南洋にも産する。體は三尺、
長いのは五尺にも及ぶ。背は青緑、腹は黄褐、背面には黒褐色の斑紋がある。胴には一
様の細かい鱗があり、尾は縦にひらたい。毒蛇の一種であるけれども毒はさほどはげ
しくない。

オ

オオオニバス (大鬼蓮) 植 南米アマゾン河に産する水草であつて、莖も葉も全部に刺
を生じてゐる。葉は長い柄を以て水面にうかび、形が圓くその縁が上方へ曲つて盆形
となり、直径七尺餘もあつて、その上に子供を座らせること出来るといふ。花も大き

くて直径六寸より一尺二三寸程にもいたる。

オオカクマク (横隔膜) 生 胸と腹との境にある膜で、中央は腱質、周圍は筋肉質より
成り、播鉢を伏せたやうに胸部へはいつてゐる。之が收縮すれば平たくなつて胸腔が
ひろがる。

オオカミ (狼) 山地、深林等に棲み夜間には群をなして獸類を襲ひ、時には人類をも害
することがある。犬に似てこれより大きく瘦てをる。而して頸の周りに剛い毛が生え
て膨らんだやうに見える。毛は灰色の所へ黄褐を帯びて居る。露西亞・西比利亞など
に多い。昔から我が國で狼といつたのは豺であつて、狼とはちがふ。豺は毛
色は狼に似て白い色がまじり、狼より少し小さい。口は耳の邊まで裂け、常に山
に棲んで鳥や獸を食としてゐる。

オオギヨク (黄玉) 鑛 トパーズともいひ、我が國産の寶石の一である。無色透明また
は黄や淡い綠色などの色があり、ガラスのやうな光澤がある。水晶に似てゐるけれど
も、水晶より硬い。菱形の柱狀に結晶し、柱の面に縦條がある。破れ口はキット平ら

である。

オーコーモリ (大蝙蝠) 動 コーモリの條を見よ。

オーサンシヨウオ (鯢魚) 動 一名ハンザキともいはれ、世界中で産するのは我が國と支那の一部だけである。我が國では主として中國地方の溪流にすみ、本州の中部にも見ることがある。晝は岩石の隙間にかくれ、夜出て魚類や蛙を食ふ。體は黒褐・赤褐など種々の色があつて住む所の岩石の色に似てゐる。頭は扁たく、口はまるく大きい。上下兩顎には鋭い小形の齒がある。眼は頭の先方にあつて頗る小さく、四肢は短かい。皮膚からは白色の粘つた液汁を出し、その香が山椒に似て居る。體の長さ三尺あまり、全身に小さい疣があつて大さう醜い。此の種は現今世界に生存する兩棲類の中、一番大きいものとして知られて居る。

オータカ (大鷹又蒼鷹) 動 昔から鷹狩に用ゐられた鳥で、體の長さは一尺八寸内外である。體の上部は灰褐色、下部は白く灰褐の横斑がある。鷹狩には雌をつかふものである。

オーテツコー (黄鐵鑛) 鑛 鐵と硫黃との化合物であるが、これから鐵を採ることがむ

づかしいので、我が國では硫黃・硫酸・綠礬などを製するに用ひる。チヨット金のやうにまた黄銅鑛のやうにも見える。しかしどれよりも硬く、そして條痕は褐黑色である。銅や金と一緒に鑛脈の中にある外、いろ／＼の岩石のうちに含まれてゐる。陸中の尾去澤、羽後の阿仁、荒川などは産地として名高い。

オードーコー (黄銅鑛) 鑛 銅と鐵と硫黃の化合物で、ちよつと見ると金のやうであるが、金よりも軽く、條痕は綠黑色で、容易に硝酸に溶け、粉末にして燃せば硫黃の臭氣を發する。下野の足尾、羽後の阿仁、伊豫の別子、陸中の尾去澤ではこの鑛石から銅を製する。

オートムギ 植 カラスムギに同じ。

オーバコ (車前) 植 路傍に普通な草である。葉は叢り生じ、夏日葉の間から七八寸ばかりの花軸をのばし、淡紫色の花を穗状につける。葉を食用に供する。

オーハデワシ (大兀鷲) 動 コンドールともいふ。アンデス山の一萬數千尺の高い處に

すじ。體の長さ三尺程で翼をひろげると九尺にも及ぶ。空をとぶ鳥の中では一番大きい。頭部は小さく、嘴の頂には紫色の肉冠があり、頸には白い綿毛が襟巻をしたやうにある。體の色は黒い、食物は馬、牛等の屍肉であるが、時には山羊や鹿を捕へ去ることがある。巢はつくらないで卵を岩石の間に産む。

オーム (鸚鵡) 動 亞非利加の西部の森林に棲み、體は灰色、尾羽は深紅色、嘴は黄色である。人の言葉を擬るので飼ひならされる。上の嘴は短くして太く、鈎のやうに曲り、舌は肉質で厚くなつてゐる。啄木鳥などと同じ類であるが、果實・種子・嫩葉などを食ふ。オームとインコとはその名稱の用ひ方に區別はない。キバタン・オカメインコ大五色インコなどはいづれも美しい種類である。

オーワシ (大鷲) 動 ワシの條を見よ。

オキ (荻) 植 ススキによく似た種類であつて、莖の下部から出た葉は左右に重なり、斜に上に向ひ、長さ二尺、幅六七分ほどある。中央の主脈は表面に溝をなしてゐる。秋日一尺以上の花穂をのびし楕圓狀にひろがる。殻片には芒がなくして長い毛がある。

穎にも毛を密生する。

オキクムシ 動 アゲハノテフの幼蟲である。

オシ (啞) 生 生來のツンボで、言語を知らないものである。

オシドリ (鴛鴦) 動 我が國の南部及び支那に産する。雄は頭に毛冠あり、胸は濃い茶色、腹は白く、背は茶・紺・白などの色があり、肩には黄褐色の飾羽が直立してゐる。嘴が紅く脚は黄色で頗る美しい。雌は黒茶色で美しくない。池・沼・小河にすんで魚類などを食ふ。

オシロイバナ (紫茉莉) 植 莖の高さ二三尺で明らかな節があり、多く枝を分ち、夏秋の候に開花する。この種の花は花瓣を有することがなく、一見花瓣のやうなところは實は萼の發達したものであつて、萼と思はれるのは總苞と稱するものである。



(イセトツオ)

オツトセイ (臘肭獸) 動 黒褐色で鼠色の荒毛がある。體長は八尺で魚類や烏賊などを食ふ。我が國樺太の東岸の

海豹島は、此の蕃殖場で、常には潮流と共に遊ぎまはるが、夏になると蕃殖場へかへる。海豹には耳殻はないけれど、海驢と臘肭獸には短いのがある。なほ異ふ點は海豹の後肢は後方に向き、海驢や臘肭獸は側の方か前方に向いて居る。

オニバス (鬼蓮) 植 我が國各地の池や沼にあつて、形態は頗る大鬼蓮に似てゐる。葉は直徑二三尺より五六尺に達し、裏面が紫色をなし、葉脈が隆くふくれて皺を生じてゐる。夏日直徑一二寸程の紅紫色の花をひらく。

オバナ (尾花) ススキの穂をいふ。ススキの條を見よ。

オビクラゲ 動物 體は平たくして透明である。長く帯のやうにうかび、三四尺に達するものがある。口は中央部の縁邊にあつて、その兩側に一つづゝの短かい觸手がある。體の屈伸と、體の縁にそつてはえてゐる毛の運動によつて、海中をおよぐのである。水母の一種である。

オヒヨリ (山楡) 植 落葉喬木で高さ一丈二三尺、五月頃葉に先だちて花を生ずる。アツシノキともヤハズニレともいはれてゐる。北海道の土人はこの樹の皮から取つた織

維で布を織る所謂アツシ織と云ふものはこれである。

オボコ 動物 ポラの條を見よ。

オミナエシ (敗醬) 植 此の花を瓶に活け日を経ると、水がちやうど醬の腐敗つたやう

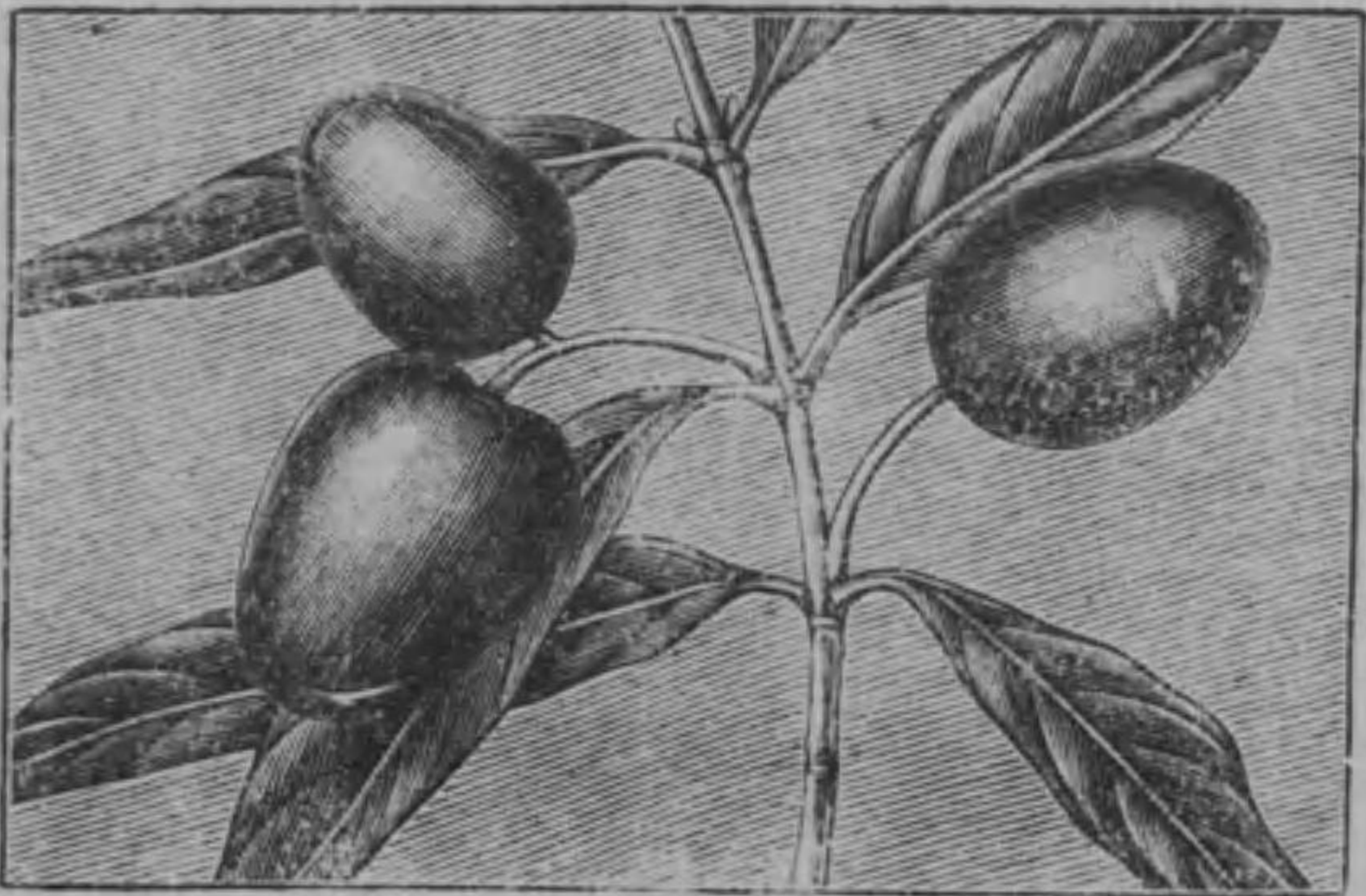
な臭がするといふのでかやうな漢名がついたさうである。秋の七草の一で、莖の高さが三四尺あり、葉は對生、下部は羽狀複葉であるけれども上部になるに従つて三葉または單葉となる。山野に多く自生し、八九月頃黄色の花をひらく。

(ア リ オ)

オランダイチゴ 植 イチゴの條を見よ。

オリブ 植 南部歐羅巴に産する常綠木で、幹は一丈五尺に達し、淡い緑色の葉を對生する。果實は鳩の卵ほどの大きさで、熟したものは青黒い。これ

から搾つた油は阿列布油又は橄欖油と稱せられ、上等のは食用又は薬用となり、下等



のは機械油や染織などの用に供せられる。

オレンジ 植 果實がその頂に臍のやうな突起をもつてゐるので臍蜜柑ともいはれてゐる。圓形または楕圓形、熟して黄赤色となり、風味がすこぶるよろしい。



カ(蚊) 動 人畜の血を吸ひ、時に病氣を廣める媒をするから有害である。溜水や雨水の中に卵をうむと、一二日で孵つてポーフラとなり、十一二日の後成蟲即ち蚊となる。この一種ハマダラカはマラリヤ蚊ともいひ、マラリヤ病の媒をするので名高い。普通の蚊とちがつて、翅に四つ五つの黒褐の紋があり、静止する時には體を斜にして腹を高くあげるのですぐ區別ができるのである。

カイウサギ(飼兎) 動 上唇は二つに裂け、前齒の中二本が殊によく發達し、後肢は長く前肢は短い。そして耳は長く目は黒又は赤である。蕃殖力がつよく、年に六回も兒を産み、種類が甚だ多く、醫學上の試験動物としてよく用ひられる。毛皮は種々の用に立つ。

立つ。

カイエン(海鹽) 鑛 ショクエン(食鹽)の條を見よ。

カイガラムシ(貝殼蟲) 動 貝殼蟲にはその種類がすこぶる多く。主なるものに桑貝殼蟲・葎貝殼蟲・梨貝殼蟲・蜜柑貝殼蟲などがある。大抵自分の體から出した汁で、貝殼のやうなものをつくつてその下に居るものである。

カイコ(家蠶) 動 廣く農家に飼はれ、幼蟲の口より出した絹絲は、我が國産の中でも第一のものである。桑の葉を食ひて成長し、繭をつくる。蛾は食物をとらない。

カイコノウジ(蠶蛆) 動 有名なる蠶の寄生蠅の幼蟲で、體は白くして大きい。卵は桑の葉と共に蠶の體中に入り、そこに發育して蠶をたふすものである。

カイツブリ(鷗鷀) 動 普通のものゝ體の上部が黒く、喉部が赤褐色で本邦南部に産する。水をもぐることが頗る上手で、小魚や小形の蟲などをとつて食ふ鳥である。ムグリともよばれてゐる。常に淡水に棲み、巢は水草の中につくる。古はこれをニホ(鴉)といつた。

カイメンドーブツ (海綿動物) 動物 體の上端に大きな孔があり、周りには小さな孔が澤山ある。これら大小の孔は互に内方にて相通じ、體の下端を以て海底または岩石などについてゐる。ユアマカイメン・ホツスガヒなどの類をいふ。一に有孔動物ともいはれてゐる。

カエデ又モミヂ (槭樹) 植 山地に自生する落葉喬木である。秋にいたつて紅葉するは葉内にアントチヤンと稱する紅色色素の生ずるによるもので、氣温の寒冷になるにつれて根の作用が衰へ、枝や葉に送られる水分が不足するため、葉内の葉緑素に變化を起して紅色色素を生ずるのである。葉はこれによつて内部の乾燥を減じ、水分を補ひ、壽命を長からしむることができる。

カカオ (加加阿) 植 熱帯アメリカの原産で、西印度諸島やエクアドルなどでは盛に培養してゐる。幹は高さ二丈、花は直ちに幹や枝から生じ、かたまつて咲く。果實は長さ五寸より八寸位に及び、外形やへチマの果實に似てゐる。果實の内部には五六十粒より百粒位までの種子がある。此の種子を炒つて粉末にしたもの、又は種皮を取り去

つたのを炒つて粉末にしたものをカカオといひ、これに牛乳・砂糖・少量のワニラをまぜてチョコレートを作る。

カキ (牡蠣) 動物 普通の二枚貝とちがつて、左の殻は下の方にあり、大きくふくれ、右の殻は平たく蓋となつてゐる。左殻を以て岩石や木材などに附いてゐる。肉は大さう美味である。

カキ (柿) 植 東洋にだけ産するもので種々の品種がある。果實の甘味あるのを甘柿、またはキザガキといひ、澁味のあるのを澁柿といふ。澁柿は湯ザハシ・樽柿・コロ柿などにして澁味を去つて食ふ。湯ザハシといふのは熟した果實を桶に入れ、熱湯を注ぎ、蒸をかけ、一夜ほどたつてたべるのである。樽柿とは酒氣のある樽の中へつめてよく蓋をして貯へ、一週間位の後食用にするもので、コロ柿とは果皮をとり竹の串にさして日に乾かし、表面に白い粉の生じた頃たべるのをいふ。果實はなほ澁を製造するのに用ひられ、材は堅くて器具を作るに使はれる。大和の御所柿、甲斐の百目柿などは昔から名高い。

カキツバタ (燕子花) 植 葉は平滑大形で、中央の主脈がないからアヤマやハナシヤウ
ブなどと區別し易い。花は秋まで咲き、萼片は楕圓形、頭が圓く下部がせまくて長柄
につづく。花瓣は篋形で先端が尖つてゐる。

ガク (萼) 植 花の一番外にあつて、或は雄蕊や雌蕊などをまもり、或は昆蟲をまねき
或は果實を保護するなどの作用がある。萼の一片を萼片といふ。

カクセンセキ (角閃石) 鑛 輝石によく似た鑛物だが、結晶はずつと長い。花崗岩や安
山岩のうちに含つてゐる。

カデロー (蜉蝣) 動 體は細長く、三箇の尾毛がある。翅は膜のやうで透明である。四
五月頃河邊や沼池にむらがる。夕方成蟲になり翌朝卵をうんで死んでしまふので昔か
ら壽命の短い例にひかれてゐる。

カコン (假根) 植 蘇苔類・海藻・地衣類などの他物に固著つく部分をいふ。

カササギ (鵲) 動 鳥より小さく、羽毛は緑黒色、肩・腹・臀は白。多くは松杉などの
喬木の頂に巢をつくる。鳥の如く動植物質を食ひ、時には他鳥の巢から雛や卵をか

すめることがある。

カサスデ (莖) 植 菅笠を作るに用ひられる。單子葉類に屬し、山野の水濕の地に自生
し、時として栽培せられることがある。高さ三尺ばかり、葉はやゝ硬く、幅四分ほど
ある。夏の土用頃に刈取つて乾し、葉を絲で縫ひ合せ、周縁と縦横に竹をそへて笠を
つくる。

カシ (櫛又榿) 植 暖地に自生する常緑闊葉樹で、材は大さう堅硬く、工藝用・薪炭用
に供せられる。シラカシ・ウラジロガシ・アカガシ・アラカシ・ツクバナガシなどの種類
があり、皆關東地方にも自生してゐる。生垣・庭樹・防風樹として植ゑておくものもあ
る。

カジカガエル (金襖子) 動 我が國山間の清流に棲んでゐる蛙である。雄は清い聲を出
して鳴くのでよく飼はれる。體は細長く、暗褐色で、背には小さい疣がある。腹は白
く、咽喉に多くの小さい黒點があり、脚には横紋がある。

カジメ (搗布) 植 二三尋の深さある岩礁の上に着き、ことに外洋に多く産する褐藻の

一種である。葉の基部が叉状に分れ、各片の周りに更に大小數枚の小葉片を出す。各片は短冊形で基部が狭く先きは圓いかまたは尖り、縁にはまばらにざざくがある。葉の面には無数の波形をした皺を生じてゐる。食用とし或は沃度灰の原料とする。

ガジマル 植 アコーの條を見よ。

カシユミール 動 ヤギの條を見よ。

カシワ (榲桲) 植 落葉喬木で山地に自生してゐるけれど、時として庭に植ゑられることもある。材を薪炭用・器具製造用とし、樹の皮は魚網を染めたり皮を鞣したりするに用ひる。

カズノコ 動 ニシンの條を見よ。

カゼ (寒胃) 生 風邪ともいふ。汗腺の分泌がやみ、クサメ、セキなどが出、咽喉、氣管・鼻腔などが犯されて、痰や鼻汁が多く出る病氣で、汗を出す薬を用ひて效がある。

カタクチイワシ 動 シコに同じ。イワシの條を見よ。

カタクリ (車前葉山慈姑) 植 我が國中部の山地及び北地に自生する百合科植物で、四月はじめ、一花莖をのばして下向の花をひらく。色は紫、徑は一寸ほどあり、花の各片はまき反へつてゐる。地下に鱗莖があり、こゝに多量の澱粉をふくみ食用にせられる。カタクリコ (片栗粉) といふのはこの澱粉のことで、純白・無味無臭である。しかし、普通カタクリコとして賣つてゐるのは多く馬鈴薯や甘藷の澱粉であつて、顕微鏡で見なければ眞偽の區別は出来ない。

カタツムリ (蝸牛) 動 陸に棲む貝中一番普通のものである。種類によつて右巻と左巻とあり、二對の觸角があつて長い方の先きに眼がある。腹面をつけ、こののびちみで這ひあるく。デندنムシ・マイマイツブリなどの名がある。

カタバミ (酢漿草) 植 路傍に普通な草本であつて、往々地上に横臥しになつてゐる。莖も葉も共に酸味があるのでスイモノグサといふ名もある。葉は晝の間は開いてゐるけれど、夜間は閉ぢる作用がある。これを葉の就眠運動といふ。就眠運動をする植物は他にいくらかもある。

カタル (加答兒) 生 粘膜が炎症をおこして生ずる病氣で、その部が腫れて赤く爛れ痒味や疼痛があり、水の様な液をもらす。

カチノキ 植 フシノキともいふ。ヌルデに同じ。

ガチヨ (鶯鳥) 動 羽毛は褐色又は白色で、嘴と脚は黄色である。體は肥えて大きく重さ三貫目に達するものがある。肉や卵を食用とし、羽毛は色々につかはれる。我が國に飼つてゐるのは、もと歐羅巴から輸入したものである。

カツオ (鰹) 動 我國に産する魚類の中で取高の一番多いものである。體は二尺に達し、背は蒼黒く腹は白い。兩側には四條から八條までの縦の線がある。多くは黒潮について群をなして遊ぎまはる。この魚で製した鰹節は百分中七十五の蛋白質を含み、重要な營養品である。

カツセキ (滑石) 鑛 蠟石の一種で眞珠のやうな光澤あり、觸れば蠟のやうな感じがある。色は白・淡緑・赤などがあつて、結晶することがない。印材とし、また石筆などをつくる。

カツソールイ (褐藻類) 植 褐色藻類ともいはれる。葉緑素の外になほ多くの褐色素を含み、褐色をあらはすもので、アラメ・コンブなどがこれに屬する。多くは綠色藻と紅色藻類との中間の深さの所に生ずる。

カツテツコ (褐鐵鑛) 鑛 結晶することがなく、塊状又は土状をなして産し、水に溶けると赤褐色に變ずる。俗にカナケといはれるのはこのことである。成分は含水酸化鐵である。美作の柵原・朝鮮の截寧・殷栗には澤山これを産し、製鐵の原料となる。

カナケ 鑛 カツテツコの條を見よ。

カナヘビ (蛇舅母) 動 本州・四國・九州に産する。體は褐色で尾が大さう長く、容易く切れるが忽ち再生する。蜥蜴に似て鱗はやゝ粗い。

カナリヤ (金絲雀) 動 原産地はカナリイ島・マデira島で、四百年ほど前に伊太利ではじめて飼はれ、今日では籠鳥として広く愛せられてゐる。野生のものは體の長さ四寸で脊は綠褐色、胸部は黄、翼や尾は黒色である。飼はれて居るものは通常黄色で、その中でも種類が一樣でない。

カニ (蟹) 動

(六〇)

頭と胸は全くくつついて闊い甲をつくり、腹は短小で甲の下に折れまがつてゐる。カニノフンドシといふのはこれである。蟹は第一對の脚の變形したもので、脱離しても再び生ずる。種類が頗る多く、海に棲むものではタカアシガニのやうに兩方の蟹をひろげると一丈餘に及ぶものもあり、ヒシガニのやうに甲から鋭い棘が生えて菱形をなすものもあり、平家蟹のやうに甲が人の顔に似たものもある。河にすむものにはモクズガニのやうに蟹に軟かな毛の生えてゐるのやベンケイガニのやうに小さくて甲の赤いのやさまざまである。

カネタタキ 動

鳴聲がチンチンと聞えるので名づけられたものである。體は赤褐色で翅はごく短かいコホロギである。

カバ (河馬) 動

アフリカの南部及東部の河や湖に棲み、象に次ぐ大きい獸である。體の長さは一丈四尺に及び、十分成長したものは千貫目の重さがあるといふ。皮膚は淡褐色で、頭はきはめて大きく、口も廣い。食物は主に草類であるが、犬齒が大きくして三尺に達し、前齒も強いので、敵を攻撃するにはこれをつかふ。その力の強いこと

は土人の獨木舟を一度にかみ砕くといはれてゐるので知られる。偶蹄類に屬する。

カブラバチ (蕪菁蜂) 動

幼蟲は灰綠色で三本の黒條があり、カブラ類の葉を食つて害をなす。成蟲は全體赤黄色で、翅は透明や、灰黒である。體長が二分程の小蜂である。

カボチャ (南瓜) 植

タウナスまたはポーブラともいはれる。花は昆蟲の媒によつて實を結ぶけれども、この花の開く時、雨が長く降り續くと、昆蟲も訪ねることが稀であり、且つ花の形からして雨の害をうけやすいものであるから、かういふ時は人工授粉を行ふがよろしい。人工授粉は結實を確かにし、果實の成長を速くし取高を一定せしめる利益がある。

ガマ (香蒲) 植

濕地に自生する單子葉植物で、葉は細長くして、二列に重つて著き、内面は凹んでゐる。高さが三四尺で色は淡緑である。雄花は莖の頂上に、雌花はその下部に著く。雌花は圓柱狀に膨大して褐色を帯び、表面は天鵝絨のやうである。

カマキリ (螳螂) 動

全體が綠色又は褐色で、胸が長く腹がふくれ、前肢は鎌のやうな形をし、小蟲を捕つて食ふから、農家には大さう有益な昆蟲である。

カミキリムシ (天牛) 動 種類が大さう多く、何れもみな害蟲である。成蟲は幹をいため、幼蟲は材を傷つける。鐵砲蟲といふのはこの幼蟲の名である。

カミソリガイ 動 マテに同じ。同條を見よ。

ガムシ (牙蟲) 動 ゲンゴラウによく似た甲蟲で、同じく水中にすむ。ゲンゴラウよりは稍大きく、水面に来て静止るときは體を水平におく性がある。體は黒色である。

カン (稗) 植 ムギ・イネ・スゲなどの莖のやうに中空または中實で、高い節のある莖を特にいふのである。

ガンエン (岩鹽) 鑛 ショクエン (食鹽) の條を見よ。

カンガル 動 濠太刺利亞に棲む獸類で、その腹に育兒囊をもつて居るので有名である。此の類はすべて胎内にある時、母體から十分の營養を取ることが出来ないで、不完全なありさまで早く生まれ、腹の囊に入れられて、こゝで長い乳房をふくんで十分發育するのである。兒は自由に歩行して食物を探すやうになつても、危険な時やものに驚くときは、直に母體の袋の中に遁げこむ。カンガルには幾種もある。大カン

ガル 一と稱せられるものは體長が一丈餘もあつて二間半も一躍にする。草食性である。

ガンキユー (眼球) 生 眼球は三層の膜より成り、一番外側のもは鞏膜と角膜である。鞏膜は白色不透明で所謂白眼と稱せられる。角膜は鞏膜の前方にありて光線の入るところに當り、無色透明で大さう隆起してゐる。鞏膜の内面に黒い色素を有する脈絡膜がある。脈絡膜は血管に富みて眼球の營養作用を營む。角膜の後には虹彩と稱するものがあつて、その中央にある小孔を瞳孔といふ。瞳孔は虹彩のうちに含まれる筋纖維の作用によつて光線が強ければ縮小し、弱ければ大きくなる。虹彩は又その内に色素を含んでゐる、脈絡膜の内面には網膜がある。網膜は視神經が全面に分布してゐて光線に感ずる重要部である、視神經の入つてゐるところは盲點といつて少しも光線には感ぜぬが、眼底の略中心に當る凹んだ所は黄斑と稱して、一番視覺の鋭いところである。眼球の内部、虹彩の後方には碁石のやうな形の水晶體といふものがあり、透明で弾力があつてよく光線を屈折する。水晶體と角膜との間には水様液が充ち、水晶體

と網膜との間には透明な半流動體の硝子體がある。これらは何れも光線を屈折するものである。

ガンセキ (岩石) 鑛 一種または數種の鑛物が集つて地殻をこしらへてゐるものをいふ。産出の状態から分けて塊狀岩、層狀岩の二種とし、出來方からわけて火成岩、水成岩、變成岩の三とする。



(肝臓 膽嚢 十二指腸)

カンゾー (肝臓) 生 横隔膜の直ぐ下にあつて大部分は右にかたよつてゐる。いろくの腺のうちで一番大きい腺である。こゝから出る消化液は膽汁である。肝臓はたゞ膽汁を出すばかりでなく、血のうちの糖分を一時貯へる作用がある。

カンゾーヂストマ 動 人類・猫などの肝臓に寄生する蟲で、體の長さ五六分まで口吸盤と腹吸盤とをもつてゐるので二口蟲とよぶこともある。幼蟲は淡水産の魚の筋肉の中にかくれ、その宿主と共に食はれて人體に入るのである。

肝蛭に近いものである。

カンテツ (肝蛭) 動 體は平たくて木の葉のやうな形をし、長さ八九分まで前の端が頸のやうになつてゐる。口と腹と見られる所とに一箇づゝの吸盤を有し、牛・羊・山羊などの肝臓に寄生する。卵は楕圓形で小さく、糞便と共に水中に出て孵つてからモノアラガヒの中へはいりて、發育し、更に水中に出て草の葉につき、獸類に食はれて體內にはいるのである。ヂストマの一種で、蠕形動物に屬する。

カンネーシヨン 植 ナデシコの條を見よ。

カンビヨ 植 ユフガホの條を見よ。

カンユ (肝油) 動 タラの條を見よ。

カンランセキ (橄欖石) 鑛 玄武岩または他の火山岩の主なる成分をなし、或は橄欖石となつて産する。黄綠色または暗綠色を呈し、條痕は白色で玻璃光澤がある。分解すれば蛇紋石となる。この綠色透明で光澤の強いものを貴橄欖石といひ飾玉とせられる。

カメ (龜) 動 體は扁たく、丈夫な甲を被り、口には齒がなく、鳥類と同じやうに嘴を造つてゐる。四肢は水中に棲むものは、趾の間に蹼があるか又は肢が櫂の形をして居る。甲は背甲と腹甲とから出来て居て、頭・尾・四肢を出入する孔がある。イシガメ・スツボン・ウミガメなどはその普通な種類である。

カメムシ 動 クサガメに同じ。同條を見よ。

カメレオン 動 主として亞弗利加に棲むが、セイロン島や西班牙にも産し。種類が多い。體の長さは五六寸から一尺に及び、舌は伸ばす時は五寸にも達する。尾と肢とで樹の枝にとりつき、長い舌を口外に出し、昆蟲をひつつけて食べる。體の色は通常灰黒色であるけれども棲む所によつて綠色・赤黄色・青白色等の色にかはる、保護色のめづらしき例である。

カモシカ (羚羊) 動 本邦の深山に棲み、アヲシシと呼ばれて居る。體の長さは三尺ばかりで、毛は灰褐、四肢は細く尾は短い。角は五寸程で、頭の前方から出て、色は黒く少しく後方に曲つてゐる。外國に住むものには牛ほどの大きさのものもある。

カモドキバチ 動 有名な桑のエダシャクトリに寄生してこれを殺す蜂である。體長二分ばかり、赤褐色を帯びてゐる。

カモノハシ (鴨嘴獸) 動 口に齒がなく、口吻が延びて扁たく、鴨の嘴のやうである。體の長さは一尺五六寸、暗褐色で眼は小さく、河のほとりに穴をほつて棲む。哺乳類の中で一番下等な種類である。而して鳥のやうに卵を産み、牝はこれをあたゝめる。卵は色が白く雀の卵よりやゝ大きい。濠太刺利亞に産し、夜出て水中を遊ぎ、小動物を捕へて食ふ。

カモメ (鷗) 動 本邦諸處の海岸に普通な鳥である。雄は體長一尺五寸位で、雌はそれより小さい。體の上面は灰色、下面及び尾は純白で脚は灰色である。巢は岩上又は樹上につくり、常に魚類・蟲類・海上に浮ぶ屍肉などを食ふ。

カラクンチヨ (吐綬雞) 動 シチメンテウに同じ。

カラス (烏) 動 嘴と脚は強く羽毛は時節によつてかはることなく、雌雄のちがひもない。我が國に普通なのは嘴太烏と嘴細烏とである。野鼠・かたつむり・蟬の類から、

屍肉・果實にいたるまで殆んど食はないものはない。

ガラス(硝子) 鑛 石英の粒・粉末・硅藻土などを原料とし、これに炭酸曹達・炭酸加里・石灰・酸化鉛などの一種または二種を加へ、高熱で溶かし、液状となしたもので、窓硝子・壘・洋燈などをつくるには曹達をまぜた曹達硝子を用ひ、理器械や食器などの製造には加里のはいつた加里硝子一名ボヘミヤ硝子を用ひ、レンズや裝飾品を製するに鉛のまじつた鉛硝子一名フリント硝子を用ひる。

カラスガイ(淡貝) 動 我が國各地の川や湖沼に生ずる二枚貝である。よく成長したものは長さ一尺以上になることがある。殻は楕圓形で表面が黒く、内面は眞珠色で少し紅い。卵は鰓の中で發育して幼蟲となる。

カラスミ 動 ポラの條を見よ。

カラスムギ(燕麥) 植 マガラス麥又はオート麥ともいふ。高さ五尺ほどになり、外形は大麥に似てゐる。現今北部歐洲ではこれを常食とし、また挽き割つたものをオートミールといひ、これで粥をつくつて食ふ。主なる用途としては家畜ことに馬や犢牛の飼料になることである。

カラフトラクヨーシヨ(樺太落葉松) 植 ギイマツまたはシコタンマツと呼ぶ。ギイマツとは千島や樺太のアイヌ人がギイといふにより、シコタンマツとは千島色丹島などに産するによつて附いた名稱である。果實の中軸に毛があり、葉に白い線のあることなどが落葉松と異つてゐる。

カラマツ(落葉松) 植 葉は四五月頃に開き、二三十個づゝ束になつて茶筌狀に生じてゐる。秋になつて枯れ落ちるから落葉松といはれる。火山岩質の乾いた土地を好むやうである。

カラムシ(苧麻) 植 マヲともいふ。原野に自生する草本で莖の高さ四五尺もある。苧を製し、これを紡いで絲とし、織つて布とする。越後上布・明石縮・晒布などはその有名なものである。その他レース・窓掛・敷布・半巾などをも製する。またその纖維は強靱であるから綱または繩の原料とする。福島・山形の地方では年に一回收穫するけれども、臺灣や沖繩地方では二三回が普通である。

ガランチヨー 動 ベリカンに同じ。同條を見よ。

カリガネ(雁) 動 形は鴨類に似て頸は一そう長く、體長は二尺四寸に及び、上部は茶褐色で、胸に黒い斑紋があり、嘴と脚とは黄色である。西比利亞や北歐羅巴に棲んで、我が國へは秋に来て春に去る鳥である。

カルイシ(輕石) 鑛 岩漿が空氣中または水中に噴き出して急に固つたもので、その中に含まれた瓦斯體を出したために多孔質となつたのである。灰白色を呈し、軽くしてよく水に浮び一名浮石とも稱せられる。手足の垢落しや器物の磨用に供する。

カレイ(鰈) 動 形状・習性は大さうヒラメに似てゐる。たゞカレイの類は口がヒラメより小さく、多くは兩眼は體の右側にある。ヒラメやカレイの類は、その幼魚はうまれて三四十日の間は、形が普通の魚とちがはないが、後にだんく一眼が體の他の側へかたよつてしまふのである、種類によつてはヒラメであつて兩眼が右側にあり、カレイであつて左側にあるものもある。

カワウ(河鵜) 動 ウの條を見よ。

カワウソ(水獺) 動 體長が二尺餘で冬は毛が赤褐色、夏は黒色の毛を生ずる。水邊に穴をつくつて棲み、夜間に水中にはいつて魚類をとる。趾の間に蹼がある。尾の長くて大きいのは、およぐに便利な爲である。

カワグモ 動 アメンボに同じ。同條を見よ。

カワセミ(魚狗) 動 體の長さ六寸位、嘴長く、尾みじかく背は暗青色で翼は淺黄である。水邊にすみ、水面に近い枝などにとまつてゐて、魚の浮び出るのを待つてこれを捕へるから害鳥である。

カワニナ(河貝子) 動 川や沼などにすんでをる黒い巻貝である。殻の長さ一寸ばかり。殻の口は卵形である。

カワラバト(河原鳩又野鳩) 動 體は暗黒色、咽喉が緑紫色で、背の下部が白い。我が國の各地の海岸に群をなして棲んでゐる。我が國のドバトはこれを飼つてつくつた變種である。

キ

キアンコー (輝安鑛) 鑛 多くは柱状の美しい結晶をなしてゐるが纖維状のものもある。鉛灰色を帯び、條痕は同色で火にはごく熔け易い。成分は硫化アンチモニーで、アンチモニーの唯一の原鑛である。伊豫の市の川はその美晶を産したので世界に知られて居る。

キイチゴ (懸鉤子) 植 イチゴの條を見よ。

キウリ (胡瓜) 植 東印度の原産で、我が國では生果を鹽漬したり酢を和せたりして食ふが、歐羅巴では大てい酢漬とし、また油・胡椒などをつけて生で食ふさうである。生果を採つて瓶の中へ入れておくと、數日の後にはとけて液汁となる。この水は火傷などによく利くといふことである。

キカンランセキ (貴橄欖石) 鑛 カンランセキの條を見よ。

キギンコー (輝銀鑛) 鑛 羽後の院内・但馬の生野などはこの産地として名高い。銀と

硫黄の化合物で灰色又は黒色を呈し、硫銀鑛とも呼ばれてゐる。銀鑛はこの外なほ數種あるけれども、銀を含む割合は輝銀鑛が一番多い。

キキョー (桔梗) 植 我が國固有なる植物で、多く人家に栽培せられてゐる。花はいはゆる桔梗色であるが、中に白色のや白と紫とまじつたのものもある。秋の七草の中では一番花の形の大きなものである。

キク (菊) 植 現今本邦に培養せられてゐる菊は、昔支那から傳はつたものである。けれどもその植物學上の原種は、昔から本邦にも自然に生えてゐるノヂギクである。ノヂギクは四國や九州に普通な白い花の野菊であつて、今日人々の賞観してゐる大輪菊は大抵これから出たといふことである。英國などでは近頃菊の培養が大いに流行し、殊に大輪の菊花には直徑一尺位のものも少くはないさうで、その造菊法の發達は殆ど我が國を追ひこさうとしてゐる。

キクワン (氣管) 生 喉頭についた長い管で、體の中央に位し、左右の氣管支に分れて肺臓に入る。即ち喉頭より肺臓に至る空氣の通路である。

キコン (氣根) 植 氣生根とも稱し地上莖から出て、一部または全部が空氣中にある根をいふ。タコノキ・タウモロコシなどの大氣中にある根はこれに屬する。

キジ (雉) 動 我が國本州の山地に棲み、昆蟲・蝸牛・穀類の種子・嫩葉などを食ふ。羽毛は雄は綠色で光澤がつよく、雌は茶褐色である。翼は短いからとぶ力は弱いけれども、脚が太くて走ることは大さう速い。春、枯草をあつめ巢を地上につくつて卵を産む。

キジバト (雉鳩) 動 ヤマバトともいふ。カワラバトとちがひ山地に棲み、冬になつて食をたづねて平原にくる。背の上に黒と灰白の羽毛が鱗のやうになつてゐる。好んで松杉などの果實をくふ。

キス (鱧) 動 近海の砂底に棲んでゐる魚である。體は細長くして圓く、鱗は薄くして小さい。背は淡い黄色で、腹は銀白色の所へ少しく黄味がある。尾鰭ははさみきつたやうになつてゐて、體の長さは六七寸である。

キスイエンコー (輝水鉛鑛) 鑛 硫黄と水鉛との化合物で、飛彈・甲斐・越後などに産し

形も色も光澤も石墨に似、紙の上で摩すれば灰色の痕をととめる。その薄片は彎曲り易い性がある。モリブデンを採り、または青色の繪具を製する。

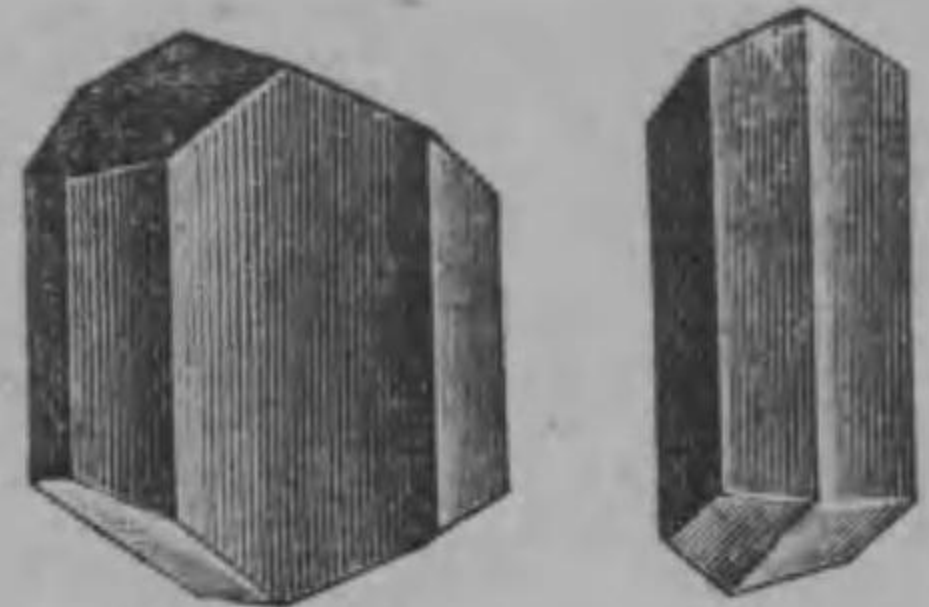
キセイコン (寄生根) 植 寄生植物たるヤドリギやネナシカヅラなどの根で、吸根と稱することもあつて他の植物から養分を吸ひとる用をなす。

キセキ (輝石) 鑛 いろ／＼の岩石例へば小松堅石などのうちに含つてゐる。通常は八角の柱狀の結晶をなし、灰が／＼つた綠色または黒色を帯びてゐる。一寸見た所では、角閃石に似てゐるけれども、形が短いから區別することが出来る。

キタンバクセキ (貴蛋白石) 鑛 タンバクセキの條を見よ。

キチヨ (黄蝶) 動 モンシロテフに近い種類で翅は黄色である。夏生れるものは前翅の端が黒いが、春生れるものは殆ど全部黄色である。

キツツキ (啄木鳥) 動 背が黒く雄の頭の赤いのをアカゲラといひ、綠色のものをアラゲラといふ。この類にはそのほか猶種類が多い。樹の幹を硬いまつすぐな嘴でた



(石輝) (石閃角)

きまはり、音によつて中に蟲がゐるかぬかを知り、穴をあけたり、蟲の出るのを待つたりしてこれを捕へる。趾は前後に二本づゝあつて木にとまつて身體を支へるに都合がよい。この類は保護鳥である。

キツネ (狐) 動 我が國固有の動物で、淡路・對島・沖繩諸島の外は、到る所の山林にすんでゐる。土中に穴をほつて潜伏して居て、時々人家へ來ては家禽・作物を荒して害をなすことがある。尾が長く、體の長さは二尺位で肩の邊は赤褐、腹部は灰白色である。性質はごく臆病である。我が國の迷信の中で、狐に關したのが随分多いのは、人のよく知る所である。

キナ (規那) 植 熱帶亞米利加原産の常緑樹であつて、樹皮を規那皮といひ、この皮から規那鹽を採る。規那鹽はマラリヤ病の特効薬である。近頃規那皮やその中に含まる、キニンなどの鹽類を採るために、熱帶の諸島に移植せられて居る。

キノズミ 動 リス (栗鼠) に同じ。同條を見よ。

キビス (踵) 生 カガトともいふ。足の後の端の突き出た部分である。

キミカゲソ 植 タニユリに同じ。

キン (金) 鑛 山金と稱するものは岩石の中に含まれ、砂金と稱せられるものは砂と混合つて河にある。臺灣の金瓜石、佐渡の相川は山金の産地、北海道の枝幸、臺灣の瑞芳は砂金の産地として有名である。

ギン (銀) 鑛 樹の枝状または毛髮状をして自然に産し、硫黄と化合して輝銀鑛となつて諸國の銀山から出る。銀時計などの黒色に變るのは、皮膚から出す汗の中に含まれてゐる硫黄が、銀に作用したためである。

キンギヨ (金魚) 動 鮒を飼つて作つた變種で、今より四百年あまり前、明國から輸入せられたものである。體は甚だしくふくらみ、背鰭がなく、臀鰭は左右對をなしてゐる。和金・丸子・獅子頭・琉金・出目金など變種が多い。

キンタイ (錦鶏) 動 稍雉に似た鳥で原産地は支那である。頭には黄金色に紅味を帯びた毛冠がある。頸の羽毛は自由に起立させることが出来る。而してこゝには橙色に天鵞絨のやうな黒條がある。脊は黄金色、腹は深紅色、尾は栗色に黒い斑があつて長

く、頗る美しい鳥である。しかし雌は體が赤褐色で黒斑があり尾も短かい。

キノコ (光參) 動 我が國の樺太や北海道沿岸の海底などに棲んで、その形はナマコに似て體の長さが四五寸で肉質の突起がなく、管足の列のみは五條ほど腹と背とにある。灰褐色であつて、口の周圍には樹の枝のやうに分れた十本の觸手を生じてゐる。主に藻類を食ふ。これを乾かしたものを光參といふのである。

キンシ (菌絲) 植 菌類の實體で、白い絲のやうな形をなしてゐる。

キンシガン (近視眼) 生 水晶體がよけいに凸出してゐるために、遠方から來る物體の像は網膜の前方にむすび、従つて近い所にある物の外は明かに視られぬものである。四眼鏡を用ひてこれを調節する。

キンシヨ (焮衝) 生 身體の一部分に熱を起すことである。

キンソーシヨクブツ (菌藻植物) 植 隱花植物の一つであつて、體には全く莖と葉の區別がなく、維管束をもつてゐない植物の總稱である。これを二大別して菌類と藻類とする。



(肉筋)

キンニク (筋肉) 生 骨についてゐて、その伸縮によつてゐるの運動をさせるもので、全身には四百餘個もある。筋の中部は赤色で柔かく肥え太り、無數の筋纖維が列んで集つてゐるが、この部を筋腹または筋肚といひ、筋が收縮するのはこゝだけである。筋腹の兩端は白色の丈夫な紐となつて骨についてゐる。これを腱といふ。筋には吾等の意のままに運動するものと、意の如く運動せぬものとある。前者を随意筋、後者を不随意筋といふ。随意筋は身體の表面各部にあり、不随意筋は胃腸や血管などの周りをこしらへて居る。

キンニクカク (筋肉覺) 生 ウンドーカクの條を見よ。

キンルイ (菌類) 植 體は一般に菌絲より成り、葉綠素をもつてゐない。他の有機物に寄生する植物を云ふ。菌藻植物の一つである。

キユーカクキ (嗅覺器) 生 鼻の條を見よ。

ギョーギョーシ 動 ヨシキリ (葦雀) の別名なり。

ギョークワイガン (凝灰石) 鑛 火山灰が水底に積つて出来たもので、質が軟く風化し易いけれども、火熱に耐ふる性がある。石垣・敷石・砥石などに多く使用せられる。色は普通に灰色または淡褐色である。

ギョーボク (喬木) 植 木質多年生莖で、主なる幹が明かであつて長大になるものをいふ。

ギョーチユ (蟻蟲) 動 人類の直腸に寄生し、糞便を食つて生活してゐる。體は白色筒状で、蛔蟲に似てゐるが大さう小さい。雌は長さ三四分、雄はその半に達しない。

ギョーヨミドリ 動 ウグヒス (鶯) の別名なり。

ギョク (玉) 鑛 昔から玉といつて、印材やその他裝飾品などに用ひられたものは、輝石や角閃石の變質したものである。

ギョクズイ (玉髓) 鑛 白・緑・紅・褐などの色があり、葡萄状又は腎臟状をなし、岩石の空洞などにあらはれてゐる。石英の一種で瑪瑙と共に裝飾品などをつくる。

ギョクテキセキ (玉滴石) 鑛 タンバクセキの條を見よ。

キョクヒドーブツ (棘皮動物) 動 海膽・海星・沙嚙・海百合などの類であつて、管足といふものによつて運動する。海中に棲んで動物質を食ふ。

キヨルイ (魚類) 動 魚類は脊椎動物の中で一番下級にあるもので、一生鰓を以て呼吸し、水中に棲んで居る。大抵は脊柱の下に鰓といふ氣囊をもち、之を縮めたり膨らましたりして浮沈をする。體は鱗を被り、四肢は鰭にかはり、尾鰭と共に游泳の用に供せられる。深海にすむ魚類の中には發光器をもつてゐるものがある。現今地球上に棲んでゐる魚類は二萬種もあつて、我が國の近海に産するものでも千二百種位ある。

キリ (桐) 植 落葉喬木であつて五月頃に紫色の唇形花を開く。葉は對生で掌状をなし、葉の面に粘氣のある毛を密生してゐる。幹は三四丈にも及び、材は輕くて濕氣を透さないから箆筒や箱類などを作るに用ひられてゐる。奥羽及び九州地方に産するものは、ことに質が宜しい。

キリギリス (蝻) 動 體は綠色で觸角が長く、後肢は跳躍ふために非常に發達してゐる。雄の前翅には透明な發音鏡といふものがあり、これをすり合せて音を發する。

キリン (麒麟) 動 ジラフと稱せられて居る。陸上の動物中で一番丈の高いもので二丈に及ぶものがある。これがためジラフアカシャといふ大好の高い樹の嫩芽まで食ふことが出来る。眼・耳・鼻はよく發達し、舌は長くて巻き込むに都合がよい。地上の食物をとるには前肢を左右に開き、首をたれてひろふ。熱帶亞非利加に産し、小群をなし、て森林に近い野原に棲んでゐる。

ク

クイナ (水雞又秧雞) 動 體は褐色で背に黒斑があつて、頸と胸は蒼灰色で、腹には黒い條がある。鳴聲が物をたたく音に似てゐる。泳ぐことが上手で、水中を潜ることも出来る。我が國では到る所の沼地や水邊に見られる鳥である。食物は昆蟲・蠕蟲・軟體動物などである。

グイマツ 植 カラフトラクヨシヨリの條を見よ。

クカンコツ (軀幹骨) 生 脊柱・胸骨・肋骨・舌骨がこれに屬してゐる。脊柱は背の中央

部にあつて椎骨と稱する骨が三十三個上下に相重つて出来てゐる。胸骨は胸の正中にあつて劍の形をなし、上の方は鎖骨に接し、兩側は肋軟骨によつて肋骨に結合する。肋骨は左右十二對あつて何れも細長く弓形に曲り、前の方は一番下の二對の外は肋軟骨によつて胸骨につゞき、後の端は脊柱に接してゐる。舌骨は咽喉の上にある小さい骨で、舌の筋肉のついて居るところである。

クギ (莖) 植 地上に向つて生長する部である。普通に葉を側生し、向日性をもつてゐる。生存する場所によつて地上莖・地下莖・水莖等に分ち、又生存期の長い短いによりて一年生莖・二年生莖・多年生莖等に分ち、質の硬い軟いによつて木本莖・草本莖などにわける。各の條を見よ。

クサイチゴ 植 イチゴの條を見よ。

クサカデロー (草蜻蛉) 動 體が緑色で、極めて薄い翅をもつてゐる。夏卵を樹の葉・柱・天井などに産む卵は細い細の端につき、丁度花の雄蕊のやうに見える。昔から優曇華といつてゐる。幼蟲は二三日の後かへり、蚜蟲を食つて發育する。

クサガメ (椿象) 動 一にカメムシまたはホーともいはれる。蟬と一緒に有吻類に属してゐる昆虫である。稲や野菜類についてその液を吸ひ、農家に害をあたへるもので、これに觸はると死んだ風をして地上におち、悪臭を發する。種類が甚だ多い。ホホヅキと云ふ植物の名はこの蟲がつくから起つたのである。

クサヒバリ 動 體は暗黒色で肢に黒い紋があり、觸角が大さう長い。コホロギの中で一番小さい種類である。

クサメ (噴嚏) 生 深く空氣を吸ひこんで、鼻又は口から急に空氣を吐き出す一種の深呼吸である。

クジヤク (孔雀) 動 印度及セーロンなどの山林にすみ群をなしてゐる。食物は昆虫。種子等で、時には農作物を荒すことがある。夜はひくい木の枝の上に眠り晝出て餌をあさる。雄は尾の上を被ふてゐる羽が非常に長く伸び、先端に美しい蛇の目なりの斑紋がある。時々これを扇形にひろげる。これは普通の孔雀の尾といはれてゐるが、實際の尾はこの長い羽の下にあつて、ひろげる時の助をするのである。

クジヤクセキ (孔雀石) 礦 赤銅礦などが變質したもので、青銅綠色を帯び光澤が美しいので裝飾品を製する。質が脆く、條痕は淡綠色である。阿仁鑛山の名高い。

クズ (葛) 植 秋の七草の一に數へられる植物で、山野に自生し紅い紫色の蛾形花をひらき、莢を結ぶ、莖の長さ二三丈、葉は、大なる三つの小葉より成り、莖も葉も共に褐色の毛茸を被つてゐる。根を掘つてこれを搗きくだき、水に浸して晒し、葛粉を取る。蔓は編んで器具をつくり、纖維は紡いで葛布を織る。

クスノキ (樟) 植 我が國の四國・九州・臺灣及び南清地方に産する常緑木であつて、幹の高さは數丈にも及ぶ。葉は卵形で兩端が尖り、革質で光澤が強い。六月頃黄白色小形の花をひらき、十月頃黒い豌豆大の果實を結ぶ、樟腦はこの樹からとつた一種の固形揮發油で、薬用・防蟲用、及びセルロイド・火薬・化粧品などの製造原料となり用途がすこぶる廣い。歐米では近頃或は樟樹の培養を試み、或は人造樟腦を發見するなどすこぶるつとめてゐる。

クチ (口) コーコーに同じ。

グチ (石首魚) 動 イシモチともよばれる。體は縦に扁く、灰綠色である。頭に白い石のやうなものがついてゐるからこの名がついたのであらう。これは耳の骨である。我が國の近海の底にすんで、小動物を食ふ。

クヂラ (鯨) 動 この類は常に海中にすんでゐる獸である。けれども體形は反つて魚類に似てゐる。前肢は鰭のやうになつて後肢は殆んどない。尾は横にひるがりこれを上下に動かして泳ぐ。魚類とちがつて絶えず水中にゐることが出来ないから、三四十分位に水面へ出て空氣を呼吸する。このときに呼吸の中にある水蒸氣は海面の冷氣にあつて凝結りて水烟となり高く水柱が立つたやうに見えるのである。皮膚は厚くて六七寸もあり毛を生じない。皮下の脂肪層は二尺餘に及ぶので體温がよく保たれる。兒は生れるとすぐ母について泳ぐ。サカマタ・セミクヂラ・海豚等は皆この類である。

クツワムシ (聒聒兒) 動 雄は體の長さが一寸位でキリギリスに似てゐるが、前翅が大さう廣く、背の上は黄色である。「ガチャ、ガチャ」といふ鳴聲をする。

クヌギ (櫟) 植 ナラと同じ類であるが、質のよい薪炭を得られるから、山林に仕立

る。果實は球形でドングリと云はれ、殻斗に包まれてゐる。その縁には棘狀になつた鱗片がある。池田炭・佐倉炭などは何れもこの材を焼いたもので、炭の小口に菊形の割目のあるのは、菊炭といつて賞用せられる。

クビ (頸) 生 頭と胴のつなぎめである、脊椎動物以外は多くはこれを有たない。

クマ (熊) 動 我が國に産するものは日本熊と稱せられる。毛は黒く咽喉に半月なりの白斑があるから月ノ輪熊ともいはれる。耳と目が小さくて可愛らしいが、本州では第一の猛獸である。體は肥大し、四肢は短かくして太く、全蹠を地につけて歩き、趾には長い爪があつて樹にもよぢ又穴をもほる。本州中部の山地にすみ、冬は穴の中に冬眠する。膽嚢は藥用として有名である。

クマタカ 動 本州の山地にすみ、鷲に似て少しくやせ、脚には趾のもとまで羽毛があるけれども、尾羽には鷹のやうに横斑がある。後頭に冠狀の羽毛をもつてゐる。

クマネズミ 動 ネズミの條を見よ。

クモルイ (蜘蛛類) 動 クモ・ダニ・サソリの類を總稱する。頭と胸とが一つになつて、

此の所に四對の肢があり、頭には觸角なく、口器の一部が伸びて其の代りをしてゐる。

クラゲ(水母)動 クラゲ類には種類が多い。ミヅクラゲは形がやゝ傘なりで、直径が一尺に達するものがある。透明で少しく青味があり、頂に淡紅い所があるので大さう美しい。口は傘の下に開き、口の周圍には四個の腕があり、傘の縁からは多くの觸絲を垂れてゐる。これらは敵の體を刺して毒を注入するもので、この類の唯一の武器である。卵はかへるとすぐ水母にならないで、一旦圓筒状の小さい蟲となり、この小蟲から水母を生ずる。タコクラゲは傘の縁に觸絲がなく、下面からは八個の腕が出てゐる。淡黄褐色で前種と同じ大きさである。サンゴ・イソギンチャクと共に腔腸動物に入つてゐる。

クリ(栗)植 山地に自生する落葉喬木で幹の高さが四五丈に及び、丹波栗と稱するものは果實が大きく味がよろしい。果皮や澁皮をむき、種々に調理して食ふ。カチグりは果實の小形なものを貯へておいて、年始やその他祝の儀式に用ひる。材は土臺・溝

板など濕り氣の多い所に使用せられ、また種々の器具をも作られる。

クルブシ(踝)生 スネと足の界にある内外の突起で、内方は脛骨、外方は腓骨の下端である。

クロベ 植 ネズコに同じ。

クロボキン(黒奴菌)植 麥の穂に寄生して果實を黒い塊りに變ぜしめる菌類で、大麥につくものにはハダカクロボ・カタクロボの二種があり、何れも種子についてゐた胞子が種子の發芽の際に麥の體の内に侵入して育ち、麥が花穂を形づくる頃になると、その中へはいり、内部にひるがつて所謂クロボ病を起さしめるものである。種子を消毒する目的はこれらの胞子を殺すにあるのである。

クロマツ(黒松)植 樹の皮が黒いからこの名稱がある。主に海岸地方によく發育する。アカマツよりは長大になり、葉も太く硬く濃い綠色をおびてゐる。近來アイマツと云つてクロマツとアカマツの中間種をつくり、造林に用ひる。

クワ(桑)植 山地に自生する落葉喬木であるけれども、葉を以て蠶を飼養するので畑

につくる。葉は互生し、卵形で縁にぎざざ／＼があり、分裂するものとせぬものがある。品種が甚だ多く、挿木・採木・播種などによつて蕃殖をはかる。桑には葉澁病・萎縮病・凍害・天牛の害などがあるから、適宜豫防の法を講じなければならぬ。

クワガイ (花蓋) 植 萼と花冠とがその形や色が等しくて、區別することが出来ない時にはこれを總じて花蓋といひ、外方のを外花蓋、内方のを内花蓋と稱する。

クワクワン (花冠) 植 萼の内部にあつて花の一番美しい部分である。その一片を花瓣といひ、花瓣の一つ一つがはなれてゐるものを離瓣花冠といひ、多少合着してゐるものを合瓣花冠といふ。花瓣は花冠の種類によつて同形同大のものもあり、不揃ひのものもある。

クワコー (花梗) 植 花軸から出た小さい枝で、花を支へるものである。花梗が更に分れてゐるときは、その小さい枝を小花梗といふ。

クワコーガン (花崗岩) 鑛 深成岩であつて攝津の御影地方から多く産するから御影石の名がある。主に石英・長石・雲母の三成分より成り、光澤が強く、風雨に堪へるから

石材に適してゐる。

クワジツ (果實) 植 子房または子房と合着した部分の成熟したもので、果皮と種子の二部から出来てゐる。果皮は外果皮・中果皮・内果皮の三層があつて、この別が明かなものと明かでないものとある。

クワセイガン (火成岩) 鑛 地球の内部にあつて熔けた岩漿が次第に熱を失つて、遂に凝固つたものである。火成岩のうち地中で凝固つたものを深成岩といひ、地面または地面に近い所へ噴き出して凝固つたものを火山岩又は噴出岩といふ。深成岩には花崗岩などがある。火山岩には安山岩や玄武岩などが屬してゐる。

クワセキ (化石) 鑛 水成岩の中には、その岩石が出来た時代に生活してゐた生物の遺體またはその痕を含むことがある。これを化石といふ。天狗の爪と稱せられるものは鮫の齒の化石で、下野の鹽原に出るイモイシは貝の化石で、又美濃の赤坂から産する鮫石はフズリナといふ下等動物の化石を含む石灰岩である。

クワタク (花托) 植 萼・花冠・雄蕊・雌蕊の四部をつけてゐる場所で、花梗がこれを支へ

てゐる。

クワヂク (花軸) 植 花のついてゐる莖又は枝の一部をいふ。花莖とも稱せられる。

クワツコー (郭公) 動 杜鵑によく似て去來の時節も同じであるが、杜鵑よりやゝ大きく、目赤く縁は黄色である。我が國では頬白の巢に産卵する。鳴聲はカツコーと聞える。

クワツヨージユ (闊葉樹) 植 カシ・モミヂなどのやうに幅が広い葉を生ずる樹木を云ふ。

クワツバイキン (闊背筋) 生 背中の下方にある大筋で、背中を洗ふ時などには多くの筋が收縮して、手を體に近づけ、背面に向はせるのである。

クワヒ (花被) 植 萼と花冠とを總じて花被といふ。

クワンセツ (關節) 生 骨と骨とが連結つて、おもに運動をつかさどる所を關節といふ。關節部は運動の際に骨と骨との摩擦や衝突を避ける爲に軟骨があつて關節面を掩ひ、なほ周りには丈夫な靱帯がある。關節面と靱帯の内面には滑液膜と名づくる粘膜

があり、絶えず滑液と稱する油のやうな液を出して關節の運動を自在ならしめてゐる。

クワンボク (灌木) 植 主幹が明かでないか、または地に近い部分から多く枝を生じて長大にならない木本をいふ。



クイガン (珪岩) 鑛 ごく細かい石英の粒の集つたもので、互に壓しつぶされたために粒を認めがたいものをいふ。砂岩の一種で、色は白・灰・赤などがあり、純粹のものは細粒として硝子製造の原料とする。

クイソー (珪藻) 植 ケイソールの條を見よ。

クイソード (珪藻土) 植 御土とも稱し、昔の珪藻の殻が堆積んで出来たもので、常に白色又は黄褐色をなし、土層となつてゐるものをいふ。我が國では甲斐の身延山及び北海道などに多く産する。ダイナマイト製造の原料・硝子製造・その他金屬などを磨く

に用ゐられる。

クイソールイ (珪藻類) 植 大さう微小な藻類で種類も多く、形状もさまざまである。単一の細胞から成り、その細胞膜には珪酸を多く含んでゐる。海藻の一種であるけれども淡水にも産する。珪藻の死骸は水庭に沈積して珪藻土をつくる。

クイトー (鶏冠) 植 莖は高さ三尺位で葉は互生して楕圓形をなし、秋日鶏冠状の花軸の上に多くの小形の花を生ずる。この花は永くその色澤の失せないので賞愛せられる。花軸の紐のやうになつてゐるのをヒモグイトウ、葉に紅白・黄などの斑紋のあるのをハグイトウ、花軸の圓錐形のをスギモリグイトウ、球形のをタマガイトウと稱する。

クカビ 植 カビの一種で、柿や梨などの腐敗したものや、餅・麵麩などの外面に白い毛を生じたやうに見えるのはこのカビの寄生したためである。この白い毛は孢子柄といふ直立菌絲であつて、その頂は次第に膨らんで、球形の囊となり、そのうちに暗褐色の稜ある孢子を藏する。

クシ (罌粟) 植 原産地は小亞細亞及波斯であるが今は印度支那にも産する。半熟の果實の中にある乳様の液をとり之を乾かして阿片とする。阿片の主なる成分はモルヒネであつて、極量を用ひすこせば死に到る程の毒をもつてゐる。種子よりは油を製する。

クツエキ (血液) 生 普通に血といふ。血球と血漿とから成り、血球には白血球と赤血球の二種がある。白血球は無色で赤血球にくらべて数が甚だ少く、自ら活動して或は血液内にはいつた細菌を殺し、或は組織の損傷んだ所の癒着くのを助ける働きがある。赤血球は小さい圓い板のやうな形をなし、内に色素と稱する色素を含んで黄色である。血漿は無色透明の液でいろ／＼の養分を溶し含んでゐる。血液は人の體の目方の十三分の一の分量だけあるものである。

クツエキジュンクワン (血液循環) 生 心臟の收縮によりて血液が體をめぐることである。今心臟の右房が開けば、すでに酸素を組織に與へ炭酸を受けて暗赤色になつた静脈血が流れこんで来る。次に血液は右房の收縮によつて右室に入り、更に右室が收縮すれば肺動脈を流れて肺臓に達する。こゝで炭酸を放ちて酸素をうけ、鮮紅色なる動

脈血となる。動脈血は左房の開いたときに、肺静脈を通じてかへつて来る。而して左房が縮んだときに左室に移り、左室が縮んで大動脈へ送り出されて全身をめぐると。この收縮は左右が一緒に行はれてゐるのである。而して血液が全身をめぐるとを大循環または體循環、肺臓をめぐるとを小循環または肺循環といふ。

タツカクキン（結核菌）植 少しく彎曲つた細い桿状の細菌で纖毛がない。又運動することもない。この細菌は結核病の病原をなす。寄生の場所によりて肺結核・腸結核・喉頭結核などの病名がある。

タツクワン（血管）生 血液の循環する路である。心臓の内の血液を送り出す管を動脈・心臓の内に導き入れる管を静脈といふ。血管は心臓を遠ざかるにつれて次第に分岐れて樹の枝状になる。動脈と静脈とつながる所は大さうほそく恰も網のやうになつてゐる。これを毛細血管といふ。大動脈・大静脈と稱するものはいづれもその一番大きいものである。

タツクワンセン（血管腺）生 消化腺や汗腺などは導管を備へてゐて、こゝで出來た液を體の内に出すけれども、吾々の體内には又導管のない腺があつて、腺内に出來た液は直ぐ血管のうちへ吸ひ取られる。これを血管腺といふ。甲状腺・副腎・脾臓などはこれである。

タツシキソ（血色素）生 赤血球の中に含まれて、少量の鐵分を有し、容易に酸素と化合し、また酸素と分離する性質がある。これによつて血液が肺臓内を通るときに酸化血色素となり、又血が組織をめぐると際酸素を與ふることが出来るのである。

タツシヨ（結晶）鑛 四個以上の平面に圍れた鑛物の形で、鑛物によりて一定してゐる。

タツシヨヘンガン（結晶片岩）鑛 變成岩であつて、性質からいへば火成岩と水成岩の中間にあるものである。これには雲母片岩・石墨片岩・綠泥片岩・滑石片岩などの種類がある。何れも石英と他の鑛物とが薄い層をなして、互に重なり合つてゐる。それでこの類は薄く剝がれる性質があり、片岩といふ名がついたのである。

タツセイ（血清）生 血を體外で凝らせると、始めは唯赤い塊であるが、次第にその

表へ淡い黄色の液が滲出てくる。これを血清といふ。血清療法については別冊動物と人生を見よ。

タンクワシヨクブツ (顯花植物) 植 總て花を開き、果實を結び、種子を生じ、これによつて蕃殖する植物を云ふ。これを被子植物・裸子植物の二門に大別する。

デンゲ 植 レングサウに同じ。

デンゴロー (龍蟲) 動 水中に棲む普通の昆蟲である。體は扁たく楕圓形で、上面は黒褐色で綠色の光澤がある。後肢は水中をおよぐために鰭のやうになつてゐる。ガムシに似てゐるが觸角が細長くしてガムシのやうに棍棒のやうではない。幼蟲も成蟲も水中の小魚を食ふ。

デンセードーブツ (原生動物) 動 何れも一つの細胞といふものからできてゐて、顯微鏡の力をからなければ見られない程の小さい動物である。海産のものもあり、淡水産のものもある。夜間海面に浮んで光りを發する夜光蟲、池や溝にある落葉の上をはつてゐるアメーバ、人體の赤血球に寄生してマラリヤ熱をおこさせるマラリヤ病原蟲、

同じく睡眠病をおこす原因となるトリバノゾーマなどは、皆この類にはいるのである。

デンノシヨコ 植 フーロソ一の條を見よ。

ゲンブガン (玄武岩) 鑛 玄武岩の主なる成分は斜長石・輝石・橄欖石などで、安山岩より色黒く質が緻密である。火山岩の一で大きな塊をなして産するけれども時に柱状をなすことがある。但馬の玄武洞はこの岩石より成り、昔から名勝の一として著名である。

タヤキ (樺) 植 我が國固有の落葉喬木で、高さは十四五丈に達し、山地に自生してゐる。材を船艦・橋梁その他の建築用または器具用に供する。

堤先生オタラ (螻蛄) 動 體長が一寸五分位で濃い褐色をしてゐる。晝は地下に小さいトンネルを穿つてすみ、夜は出て稻・麥・葱などを食ふ。後翅は前翅より大きく、前翅は短くして太く丁度モグラの前肢に似てゐるので、よく地を掘ることが出来るのである。



コーカクリイ (甲殻類) 動 蝦・蟹などはこの類である。甲殻と稱する外骨格があつて、頭部には二對の觸角があり、鰓を以て呼吸する。

コーカンシンケイタイ (交感神経系) 生 胸腹腔の背側にあたり、脊柱の左右に並んでゐる澤山の神経節と、これを上下に連ねてゐる神経とから成り、胃や心臓などの作用をつかさどつて居る。又悲いときに涙のでるのも、恥しいときに顔の赤くなるのも、この神経系の働きである。

コーキン (合金) 鑛 二種または二種以上の金屬を熔かして混ぜたものである。金屬によつては合金の出來ぬものもあり、また合金しなければ用途の少ないものもある。主なる合金をあげると、青銅一名カラカネは銅と錫の合金で、その混ぜ合せ方によつて砲銅・鏡銅・鐘銅・像銅などの名がある。真鍮は銅と亜鉛、洋銀は銅と亜鉛とニッケル、赤銅は銅と金と銀、四分一は銅と銀、白銅は銅とニッケル、白銀は鉛と錫、アルミ銅は銅とアルミニウム、活字金は鉛と錫とアンチモニーの合金である。

コーギョク (剛玉) 鑛 通常六角の柱状に結晶し、酸にも熱にも犯されることはない。無色透明又は種々の色を帯び、金剛石に次で硬い鑛物である。その紅いものはルビー

(紅玉) と稱し、東印度バルマの産は有名である。それから青色のものはサファイア (青玉) と稱し、東印度錫蘭島の産は著名である。共に寶石として貴ばれてゐる。

コーコー (口腔) 生 俗に口といふ。上下の顎の間で、前は上下の唇、左右は頬、天井は口蓋となり、後は咽頭につゞき、内には舌と齒を生じ、食物を咀嚼み、また言語を發する器官となる。

コージ (麴) 植 コージカビの條を見よ。

コージカビ (麴菌) 植 菌類に屬する一種で、網のやうに分れて錯綜つた菌絲から胞子柄を立て、その頂が球形に膨れ、その表面にまた無數の小さい胞子柄をつけ、そのさきで連鎖状の胞子を生ずる。胞子は普通は黄綠色、時として黄褐色である。コージカビの胞子を蒸米の上に發育せしめたものが麴であつて、その外面の白色不透明なの

は菌絲のついてゐるためである。また麴が花を著けたといふのは胞子の出来たことである。菌絲は自分の營養を取るために、酵素を分泌して米粒を消化する。酵素の主なものはジアスターゼ・マルトラーゼ・インベルターゼ・オキシターゼ・トリプシンなどである。麴と米とを混ぜて甘酒を造るのはジアスターゼが米の澱粉を砂糖に變化する性を利用したのである。

コージツセイ(向日性) 植物が日光の來る方に向つて成長する性をいふ。莖はこの性を有してゐる。

コージンバラ(長春花) 植 バラの條を見よ。

コージョーセン(甲状腺) 生 喉頭の兩側にある一對の腺で、若しもこの腺を切りとるならば、暫くして骨の發達がやみ、毛髪は脱け皮膚は腫れ營養は不良となる。

コスイセイ(向水性) 植 水分の多い方へ向ふ性質で、根に於てあらはれる。

ゴセイユーズイ(合生雄蕊) 植 ソラマメのやうに數個の雄蕊が多少合一して一體になつてゐるものを云ふ。

コーソ(酵素) 植 酵素は蛋白質に似た化合物で、生物體の原形質によつて作らるゝものである。このものはよく水に溶け、又酒精にあへば沈澱し、強き熱によりて變質する性がある。酵素には色々の種類があつて、釀母菌のもつてゐる造酒酵素は糖分を酒精と炭酸とに分解し、大麥の發芽した種子に含んでゐる製飴素は澱粉を麥芽糖(即ち飴)と糊精とに變化し、麴菌に含んでゐる製葡萄酒素は、澱粉や糊精などを葡萄酒に變ぜしめるが如きは、其の著しい例である。林檎や梨の果實の皮を剥いておくときは、その果肉が褐色に變る。これも亦、その中に含んでゐる一種の酸化酵素の作用によるのである。

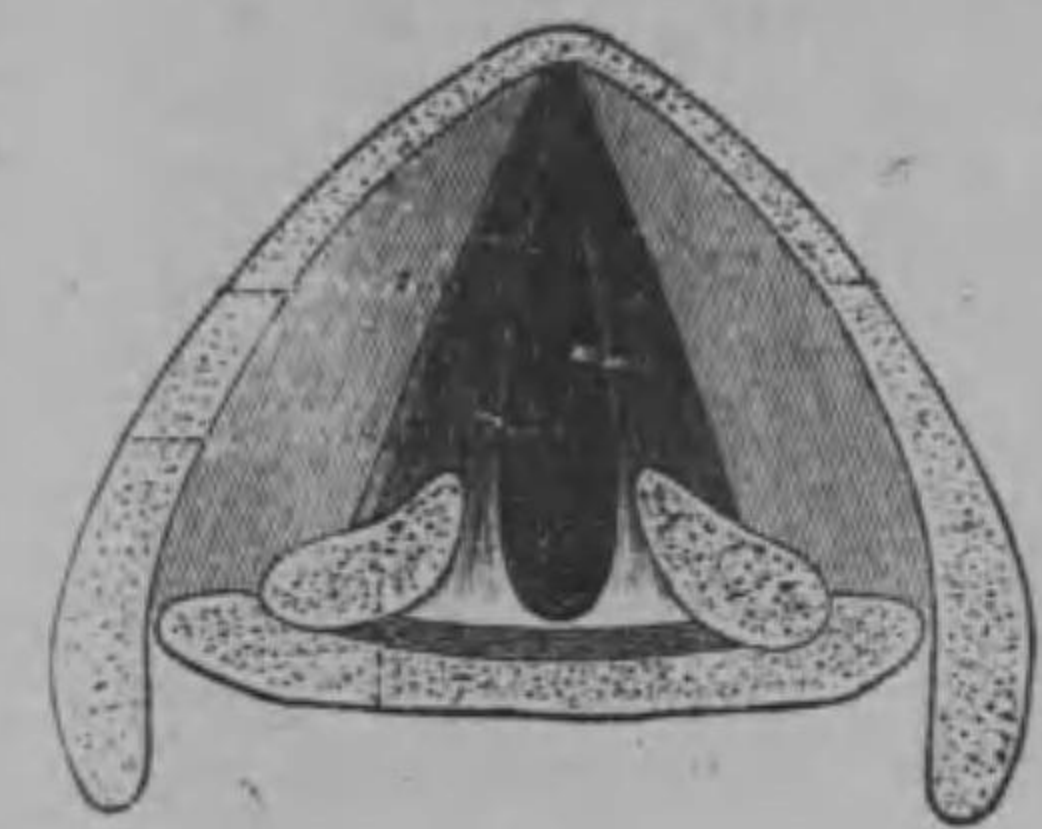
コーソールイ(紅藻類) 植 紅色藻類ともいひ、アマノリ・テングサなどのやうに、體に紅色素を含んで紅色を呈する海藻を總稱する。大抵海の深いところに生ずるものである。

コータク(光澤) 鑛 鑛物の表面から反射する光線で一種のツヤである。大別して金屬光澤・非金屬光澤の二とする。金屬光澤は金屬に普通なる光澤である。それから非金

屬光澤はこれを更に五に分ける。水晶の光澤の如きを玻璃光澤、雲母の光澤を、眞珠光澤、琥珀の光澤の如きを脂肪光澤、石綿の光澤の如きを絹絲光澤、金剛石の光澤の如きを金剛光澤といふ。

コーチセイ(向地性)植 地中に向つて、成長する性で、根に於て之を見られる。

コーチヨードプツ(腔腸動物)動 クラゲ・インギンチャク・サンゴの類を總稱していふ。體はいづれも囊なりで、外・中・内の三層がある。外層には他の動物に毒な有機酸をふくんでゐる場所があつて、攻撃や防禦の武器とする。



(面斷平水の頭喉)

コード(硬度)鑛 鑛物の硬さをいふ。硬度をはかるには、或る鑛物數種を取りこれを標準にしてほかの鑛物とくらべるのである。これを硬度計といふ。モース氏硬度計は一度滑石、二度石膏、三度方解石、四度螢石、五度磷灰石、六度正長石、七度水晶、八度黄玉、九度鋼玉、十度金剛石である。

コート(喉頭)生 咽頭から氣管に行く空氣の通り路で、

軟骨と筋肉とから成り、發聲器官として大切なところである。

コーノトリ(鶴)動 鶴類にくらべて後趾がよく發達し、鼻の孔は嘴の基部にある。全身が純白で脚は赤く、魚類・蛙・蛇等を食ふ。樹や岩などの上に巢をかまへる。

コーヒー(珈琲)植 東部亞非利加・亞刺比亞等に自生してゐる常綠木で、高さは二丈餘もある。この種子を煮つて製したものが日常飲料にせられる珈琲であり。珈琲の成分はコフェインといふもので、適當に飲用すれば精神を爽快ならしむる効があり、醫療にもよく用ひられる。現今ブラジル國では一番多く栽培して居つて、その産額は世界第一である。

コープツ(鑛物)鑛 天然に地殻のうちに存する無機物をいふ。但し石油のやうなものは有機物だけれども、便宜上鑛物と見做してをる。

コープツカイ(鑛物界)鑛 鑛物・岩石・化石などの總稱である。

ゴーベンクワルイ(合瓣花類)植 離瓣花類に對するもので、雙子葉植物のうちで合瓣花冠を有つてゐる植物を總稱する。キク・シツ・キリ・ユウガホ・ツ、ジ・アサガホなど

の類は皆この中にはいる。

コロボキン (酵母菌) 植 ジョロモキンの條を見よ。

コシミヤク (鑛脈) 鑛 岩石の罅隙に鑛物が長く蔓をなして存在するものをいふ。

コイモリ (蝙蝠) 動 哺乳類の中で空中を飛びまはるのは此の類だけである。前肢の指が延びて指の間に薄い膜をはり、丁度洋傘の様にひろげたり畳んだりする。この膜が後肢の間にもひろがりてよく飛翔けることが出来るのである。それで昔は鳥の仲間に入れられてあつた。晝は人家の檐端、洞穴等にかくれ、夕方から出て餌をあさる。我が國に普通なのは「カワホリ」一名「アブラムシ」で昆蟲を食ふけれども、大蝙蝠といふ種類は熱帯地方に棲んで果實を食ふものである。これは兩翅をひろげると五尺に及ぶものがある。

コイヤマキ (金松) 植 松杉科に屬し、葉は肉が厚く軟かで先きが僅にへこみ、表も裏も真中に二個の針葉が癒着して生じたもので、全長が二寸より四寸にいたり、幅は一分ばかりあり。十五乃至四十の葉が茶筌狀に短い枝に着いてゐる。本州中部の山地に

生じ、樹形が風雅なため庭園などによく植ゑられる。乾燥した土地に適し樹の皮はマキハダとする。

コリヨロ (高粱) 植 單子葉類、禾本科の植物である。印度・支那ことに滿洲には盛んに栽培せられ、我が國ではモロコシ或はタウキビ (蜀黍) と稱する。その粘氣のあるのを糯、ないのを粳といひ、穂の彎曲つて垂れてゐるのを雁首蜀黍、莖に甘味の多く含まれてゐるのを支那蘆粟といふ。これから砂糖をとる。種子は飯にも炊き、團子や餅もつくり、支那では酒を醸す。

コイロギ (蟋蟀) 動 體は黒褐色で雌は雄より大きく而して産卵管がある。雄は前翅をすり合せて美しい音を發せしめる。種類が大さう多い。

コアユ 動 アユ (鮎) の一種である。琵琶湖に産し、普通の鮎と違ひ、海へ出るこゝがなく、終生淡水にのみ棲んでゐる。大さ普通の鮎よりも小さい。

コイ (鯉) 動 成長したものは體の長さが三尺餘に及び、主として植物質の食物をとる上顎の兩側と口の後角に各一本の觸鬚がある。背は蒼黒く腹は淡黄色である。

鱗は圓形で側線の上には三十二枚から三十九枚をかぞへられる。緋鯉、サラサなどは何れも變種で美しい色を有つてゐる。

ゴイサギ 動 サギの條を見よ。

コイシ (礫) 鑛 岩石が碎けて小豆粒よりも大きい粒になつたものをいふ。

コエ (聲) 生 呼吸のために聲帯が振動して發するもので、聲帯の張り方の度合のちがふによりて音聲に高低の差が生ずる。男女十五六歳に達すると、聲帯が長さで厚さを増し、これが濁つた低い聲が出るやうになる。俗にこれをコエガハリといつてゐる。

コオイムシ 動 タガメに似た昆虫だがその體はずつと小さく、常に背の上に多くの卵を負うて水を泳ぐのでこの名がある。

コオニタビラコ 植 オニタビラコやヤブタビラコなどと同じく菊科に屬してゐる。春の七草のタビラコはこの草であらうとの説がある。田畝や路傍などに自生し、根から出た葉は二三寸ばかり、光澤があつて毛はない。春四五寸位の花梗を抽いでこれに小さい黄色の頭状花をつくる。食用に供することが出来る。タビラコの條を参考せよ。

コガネムシ (金龜子) 動 體は綠色で美しい光澤があり。種々の植物の葉を食ふ。害虫である。その幼蟲はヂムシといつて作物の根をあらす。

コキユー (呼吸) 生 酸素を得るために行ふ作用で大人では一分間に十八回が普通である。呼吸を行ふ時には胸腔が交々ひろがったり縮んだりする。胸腔が擴がれば空氣は肺臓に入り、縮まれば出る。入るのを吸氣、または吸息、出るのを呼氣或は呼息とよぶ。

コキユーキ (呼吸器) 生 呼吸の作用を營むに必要な器官で、肺臓・氣管・喉頭・鼻腔などを云ふ。

コキユーサヨ (呼吸作用) 動・植 動物や植物が。絶えず酸素を吸ひこんで炭酸瓦斯を呼き出す作用を云ふものである。植物に於てはその生活體はすべてこの作用をいとなみ、ことに種子の發芽の際や花蕾のほころびる時は一番盛である。

ゴキヨ (植) ハハコに同じ。

コクエン (黒鉛) 鑛 セキボク (石墨) の條を見よ。

コクタン (黒檀又烏木) 植 幹は高さが三丈に及び、葉は互生し、淡い黄色の合瓣花を

1.40.
15
1.25

開く。材は堅く美しいので器具の料として賞用せられる。果實は赤黄色で球形または卵形をなして食用となる。東印度や馬來半島に産する常緑木であるが、柿樹に近いものである。



(石曜黒)

コクヨーセキ (黒曜石) 鑛 火山から噴出した岩漿が急に冷えて出来たもので、十勝石とも稱せられ、断口は貝殻のやうである。色は黒または灰で、全部玻璃質をなし大さう緻密である。

ゴクワン (五官) 生 視・聴・味・嗅・觸の五感覺で、これに筋肉覺を加へて六官といふこともある。

ココヤシ (古々椰子) 植 單子葉類棕櫚科の植物であつて、通常單に椰子といはれてゐる。熱帶亞細亞で一番普通に栽培せられ、印度・馬來地方ではこの大森林を見ること出来る。莖は直立して枝を分つことなく七八十尺にいたる。葉は大形の羽狀複葉であつて幹の上部に密生してゐる。椰子は熱帶地方では一番重要な樹木で、材は建築の

用にたち、樹液からは酒を醸し、葉は屋根を葺き、果實の纖維では網、胚乳からは油を得られ、ことに果實の内部の汁液は土人の大切な飲料である。

コサギ 動 シラサギに同じ。同條を見よ。

コシアカツバメ (腰赤燕) 動 ツバメの條を見よ。

コチ (鯛) 動 海底に棲んでゐる魚である。それは體色はその土質によつて色々であるが、大概、背は黄褐で少しく綠色をふくみ、背鰭は淡青色で、淡黒い小斑點が多く、腹は白い。體の長さは一尺餘に及び、頭は扁く口は闊く、兩顎には細かい齒がある。

コチドリ (小千鳥) 動 本邦の南部にすみ、河や海の沿岸に群をなしてゐる。體の長さ四寸ばかりの小鳥で、腋下と腹は白く、頸の前面と尾の端には暗色の帯がある。軟體動物や昆蟲を食ひ、性質は活潑である。本種はコバステドリ、ミヤコドリなどと共に千鳥類である。

コツバン (骨盤) 生 左右一對の無名骨と薦骨とでつくられ、脊柱の基となり、且つ腹腔内の諸器官をいれてこれを保護してゐる。骨盤の形は女の方が男より廣い。

コドー (鼓動) 生 心臟の尖端はその收縮する毎に胸を搏つために一種の音を發する。俗に動悸といふのはこれである。

コノハチヨー (木の葉蝶) 動 我が國では琉球より南に居り殊に臺灣に多い。翅が大さう美しく、たゞむ時は裏が枯葉のやうに見える。この蝶が頭を倒さにして枝にとまると、殆んどありかじ判らない。極めて完全な保護色である。

コノハヅク (鴟鵂) 動 鴟に似てゐる。頭の兩側に耳のやうな形をした羽毛があるの で、ミミヅクの名が出たのである。ミミヅクの類は不消化物たる毛・羽毛・骨などを餌 囊のなかで一塊に丸め、口から吐き出す習性をもつてゐる。鳶・ノスリ・ミミヅク・ フクロフなどは保護鳥である。

コハク (琥珀) 礦 前世界の針葉樹の樹脂が地中に於て變成したもので、これを摩すると樹脂のやうな臭があり、且つ電氣を生ずる。破れ口は介殼狀で中に昆蟲や樹皮などを含むことがある。色は黄・赤・褐などさまざまである。

コバンイタタギ (小判鮫) 動 頭に楕圓形の吸盤をもつてゐる魚である。この魚はこれを以て船底・海龜・鮫などに吸ひ附いて諸所に運ばれ、これらの動物の食ひ残りや、船からすてられた残飯を食ふ。一旦吸ひ着いた時は決して離れることがなく、人が全力を盡しても引き離すことが出来ないといふ。一名を小判鮫と呼ばれるのはことに鮫の體に着くからであらう。

コバンザメ 動 コバンイタタギに同じ。同條を見よ。

コブシ (辛夷) 植 山地に自生し、幹の高さは二丈に達する落葉喬木である。三四月頃葉の開くに先だち、大きい白い花を生じ芳香を發する。その蕾の開かうとするやうすが、ちやうど小兒の拳に似てゐるので此の名があるともいひ、或は果實が熟して少し屈曲した形が拳のやうだから名づけられたとも稱して居る。

コブラ 動 印度産のものは淡褐色、亞弗利加産のものは緑色の蛇の一種である。體の長さは五六尺であるけれどもはげしい毒があつて、これに噛まれた犬は、三分間で運動ができなくなり、一時間たぬ中に死ぬといふ。敵を攻撃するときは頸の部分をひろげて立ち、地上から直立したやうな姿勢をとる。首に眼鏡なりの斑があるから、メ

ガネヘビともいはれる。臺灣にもこの一種を産する。

ゴボウ(牛蒡) 植 畑に栽培する植物で、春蒔きは冬、秋蒔きは翌年の夏のはじめに根をほつて食ふ。葉は大きく闊く、その裏が白い。莖の高さは四五尺に達し、淡い紫色の花を開く。

コマツイシ(小松石) 鑛 安山岩の一種である。アンザンガンの條を見よ。

コマネズミ(動) 南京鼠ともいはれる。ネズミの條を見よ。

ゴマメ 動 イワシの條を見よ。

ゴムノキ(護謨樹) 植 弾性ゴムを採取する植物で、バラゴム樹・セアラゴム樹・インドゴム樹など數種がある。

コンゴシヤ(金剛砂) 鑛 河内金剛山より出るのでこの名がある。ザクロイシの條を見よ。

コンゴセキ(金剛石) 鑛 殆ど純粹の炭素で、寶石の王として昔から有名である。純粹のものは無色透明であるが、黒金剛石のやうに黒い不透明のものもある。多くは八

面體の小さい結晶をなし、鑛物のうちで一番硬いものである。光澤が非常に強く、或る種類は之を日光にさらしてから暗い所へ置くと美しい燐光を放つ。裝飾品は琢つて種々の面をつくり一層光輝を増させるのである。

コンチユールイ(昆蟲類) 動 體は頭・胸・腹の三部にわかれ、頭には一對の觸角・眼・口があり、胸には大抵四枚の翅と六本の肢とがある。卵から成蟲になるまでには、幼蟲の時代と蛹の時代とをとほるもので、種類によつては、幼蟲が次第に成長して成蟲となるものもある。カミキリムシ・アゲハノテフ・カ・バッタなどはこの類である。

コンニヤクイモ(蒟蒻) 植 單子葉類に屬する宿根草本で地下の球状をなせる莖を洗つて皮を剥ぎ、うすくさり、よく乾かして臼で搗き、粉にしたものをコンニヤク粉といひ、コンニヤクを製造するに用ひる。サトイモに近いものである。

コンブ(昆布) 植 褐藻の一種であつて、種類が甚だ多い。マコンブと稱するものはコンブの中で一番幅の広いもので、我が國の特産である。函館・室蘭などの親潮に洗はれる海岸で、四尋から二十四五尋位のところに限つて産する。根は樹の枝のやうに分

れ莖は稍平たく短くて三寸内外である。葉は披針形で長さ八九尺幅八九寸が普通であるけれども、時としては長さ一丈八九尺、幅一尺四五寸のものもある。中央部は甚だしく肥厚し幅の三分の一を占めてゐる。この部を中帶部といふ。游走子は中帶部の下方にある子囊の中に生じ、十一月頃に囊から出て、三月頃から小形の藻類となつてあらはれ八九月になれば七八尺以上に成長しミヅコンブとなる。ミヅコンブは肉が薄く淡褐色で柔かい。ミヅコンブは冬の初めになれば、葉は基部から上は枯れて脱落し、残りの部分は翌年三四月頃から生長をはじめて固有の大きさになる。これを本昆布といひ、採つて市場に賣り出す。

コンリユーバクテリア (根瘤細菌) 植 荳科植物の根にある球瘤内に生活して居る。この細菌は空氣中の窒素を吸収して窒素化合物とし、荳科植物に與へる。豆類を栽培するにあたり肥料の要らないのはこの爲めである。

コメツガ (米母) 植 ツガの條を見よ。

コヤスガイ (子安貝) 動 巻貝類に屬する。種類が多い。いづれも海底に棲んで肉食をし

てゐる。大きいものは貝殻の長さ二三寸に及ぶことがある。幼い貝は螺線もあり。殻口も大きい。成長するにつれ、外套膜が次第に擴つて、貝殻をつゝみ、これから更に厚い殻を造り出して螺線をかすのである。色は黒褐・白・褐など種々ある。貨幣貝はこの一種で西アフリカには貨幣に代用せられるので名高い。

コルクガシ 植 コルクノキに同じ。

コルクガシワ 植 コルクノキに同じ。

コルククヌギ 植 アベマキに同じ。

コルクノキ 植 コルクガシ又はコルクガシハともいふ。地中海沿岸に自生する常緑樹であつて、樹皮が厚く、外面に深い溝があり、表皮下にあるコルク層は柔軟で弾性に富み、液體や氣體を透さず、熱の不良導體であるから、これを栓子に用ひる。樹皮は老成すると自然に剝げ落ちるから、未だそのはげ落ないうちに取りはなすのである。この時内皮に傷さへつけなければ、再び生長してコルクを生ずる。樹皮は熱湯で煮たり、薬品で洗つたりしてから壓して平板となす。イタリア・フランスなどの國々でこれを

産する。

コレラキン(虎列刺菌) 植 コレラ病の原をなす細菌であつて、僅かに縦に彎曲した半月状である。一つ一つ分離した生活をし、一端にある鞭毛の作用によつて活潑に運動する。胞子は未だ発見せられない。



(イ サ)

サ

サイ(犀) 動 亞細亞産のものは印度犀と呼ばれ、鼻の上の一つ又は二つの角がある。これは犀角として昔から名高いもので、牛や鹿の角とちがひ、數多の毛の膠着いたのである。體が黒く、長さは一丈五尺高さは七尺もあり、皮膚が厚く皺が所々にある。亞弗利加にも産するが、體が黄褐色で皺は淺い。共に嫩芽・幼根・多肉の植物などを食ふ。各肢に三つの蹄をもつてゐる。

サイキンルイ(細菌類) 植 バクテリア類に同じ。

サイセイ(再生) 動 動物が其の失くした體の部分を再び生ずることをいふ。例へばトカゲの尾の切れたのが再び伸びてもとの通りになる如きである。

サイボ(細胞) 動・植 生物の體を形づくる甚だ微細の囊狀體で、顯微鏡の力をからなければ見ることが出来ない。下等生物には一個の細胞から出來てゐるものもあるが、高等生物は多くの細胞が色々に集つて成るものである。その一番外にある膜を細胞膜といひ、原形質から生じたものである。原形質は細胞膜の内にある。半流動狀の物質で、一番大切な部分である。炭素・酸素・水素・窒素・硫黄・磷・鐵などの原素から成り、生物の生命の存する所といはれてゐる。原形質の中には核と稱する小體がある。古い細胞の原形質には空胞が出來て、こゝに細胞液があることがある。細胞がその數を増すのは分裂によるのである。

サガン(砂岩) 礦 砂が流水のために運ばれて海の底に沈みつもつて、凝つた岩である。建築材又は砥石に供せられてをる。吾々が刃物を磨くに用ひる荒砥は即ちこの岩

である。

サギ(鷺) 動 白鷺・ゴイサギ・アヲサギなど品種が多い。常に水邊をあるいて魚類や昆虫を食ふ。巢は樹上や葦間につくる。晝はかくれ、夜になると鳴きながら飛んで出る。白鷺はコサギともいひ體が純白、ゴイサギはセグロゴイともよび、體の上部が黒く下部が白い。アヲサギは全身が淡青色である。鷺の類はみな頭部に細長い冠羽を有ち、簑毛といつて頭や肩や胸や背に長い總のやうな毛を生ずる。簑毛は婦人帽の裝飾として外國へ輸出せられ甚だ高價である。

サクサン(柞蠶) 動 クヌギやナラの葉を食ひ、地方によつてはこれを飼養する。ヤママユに似た大きい蛾で、褐色の繭をつくる。

サクサンバクテリア(醋酸細菌) 植 醋を作る細菌であつて、酒精を變化して醋酸を生ぜしめる働きがある。

サクラガイ(櫻貝) 動 その貝殻がうすくて紅く、櫻の花びらのやうに見えるので大さう美しい。飾につかはれる。二枚貝の一種である。

ザクロ(安石榴) 植 庭園に栽培せられる落葉灌木で、枝のさきは大抵刺のやうになつてゐる。花は六七月頃咲き眞紅で大さう美しい。果實は丸く、熟すると赤い黄色となり、裂けて種子を露出す。食用にせられる所はその外種皮である。観賞用のものには二三種類がある。

ザクロイシ(柘榴石) 礦 多くは粒狀の結晶をなし、不透明である。これを粉にしたものは金剛砂と稱し、物を磨くに用ひらる。この一種の貴柘榴石は美しい紅色を帯び、寶石として貴ばれる。

サケ(鮭) 動 我が國では北海道に一番多く産し、北越地方や常陸あたりにもとれる。體の長さは三尺もあり、背は藍灰色で腹は白い。常に海に棲むけれども、卵を産む時に期なると大群をつくつて川へ上つて来る。卵は大抵川の上流の小石のある浅い所に生み、一尾で四千粒を數へられる。近頃人工で卵を孵すことを實行して、その滅滅を防いでゐる。

サザエ(蝶螺) 動 拳狀の巻貝で、外面は暗青色、成長するにつれて管狀の突起を生ず

る。我が近海の岩間にすみ海藻などを食ふ。殻の口が大きくまるく、蓋は大さうかた

い。
ササグマ 動 アナグマに同じ。

サザナミ (長尾鶏) 動 我が國の特産で土佐國に産する鶏の一種である。尾の長さは一丈六七尺より二丈五尺に達する。世界に類のないものである。

サザンクワ (茶梅) 植 ツバキに似て花も葉も小さい。四國・九州の地方では幹の高さ三四丈、周囲三尺に至るものがある。秋の末に白・紅・淡紅などの花を開く。カタシ油といふのはこの種子から取つたものである。

サソリ (蠍) 動 黒褐色で腹には明かな節があつて、その末端に毒液を出す鉤がある。口部の顎鬚は延びて螯となつてゐる。晝間は石下・穴などに隠れ夜間出て食物をとる。蟲類などを捕へ食ふには、先づ螯ではさみ、尾を背の上によけて鉤でさしこらす。人若しこの蟲にさされる時は、激しい痛を感じる。支那・朝鮮・臺灣などに産する。動物學上ではクモ類に近いものである。

サツマイモ (甘藷) 植 根の一部肥大して紡錘狀の塊根となり養分を貯へる器官に變つたといはれてゐるが、近頃莖であることを證明した學者もある。薯は馬鈴薯と同じく、食用となり、飴や酒を造り、澱粉製造の原料ともなる。原産地はアメリカであつて、徳川時代にかの名高い青木昆陽によつて大いに我が國に廣められたものである。

サテツ (砂鐵) 礦 磁鐵礦を含んでゐる岩石が崩壊れて鐵礦が砂のやうになり、水のために押し流されたもので、河砂などの中に多く混交つてゐる。

サトウキビ (甘蔗) 植 熱帶亞細亞原産の植物で玉蜀黍によく似てゐる。髓心は汁液が多く、糖分を含んでゐるので、これを搾り取つて砂糖を製造する。すなはち莖を刈取りこれを壓しつぶして搾る。初めに出來たのを白下糖といひ、これより蜜をとりはなしたのを白糖といふ。普通生莖百貫目から白下糖六貫乃至十貫、白下糖十貫から白糖三四貫目を得られる。キューバは世界第一の甘蔗糖の産地で、瓜哇・布哇などこれに次ぐ産地である。

サトウダイコン (甜菜) 植 藜科に屬する植物であつて、かの大根とは全く別種である。

地中海沿岸の原産で、獨逸・佛蘭西では盛に栽培してゐる。莖の高さは二三尺あつて葉は卵形で花は黄緑色小形、根は紡錘形である。根より砂糖を製出する。

サナダムシ (條蟲) 動 人類や種々の脊椎動物に寄生するもので、體は扁たい片節のよりあつまりである。形が眞田紐に似て長いのは數丈もある。體の先端には頭部にあたる所があつて、鉤又は吸盤をもつてゐる。條蟲はこれを以て宿主の腸に附着して體の全面から宿主の腸内の養分を吸ひ取り、節を段々生じて成長する。これらの片節は時々宿主の糞便と共に外に出で、その中にある卵が或は水中に入り、或は草の葉におちたのを、種々の動物が食ふと、その胃の中にはいつて殻はやぶれ、幼蟲となつて筋肉の中にかくれる。それを更に人類が食ふに及んで、直に腸へ來て吸著するのである。人類に寄生する條蟲には、無鉤條蟲といつて頭がわりあひにくびれず、吸盤が四つあるものと、有鉤條蟲といつて頭に多くの鉤のあるのと、裂頭條蟲といつて頭部の吸著く所が溝のやうになつてゐるのと三種ある。蠕形動物に屬してゐる。

サバ (鯖) 動 我が國到る所の海に産する魚である。體は紡錘形で、上部は青緑色、こ

れに暗緑色の波條が三十ばかりもある。側面は少し黄色で腹は銀白である。

サファイア 鑛 コーギョク (鋼玉) の條を見よ。

サマツダケ (松花蕈) 植 マツダケの條を見よ。



(ゴンサカア)

サンゴ (珊瑚) 動 澤山の珊瑚蟲が集つて樹枝のやうな群體をつくつてゐる。各蟲體はイソギンチャクに似て圓筒状で、一端に口を開き、その周圍に八本の觸手がある。色はアカサンゴは皮肉部は橙色、中の骨格は濃紅で骨

骼の中心が白く、モモイロサンゴは皮肉部が紅く、中の骨格が淡紅で中心は白い。シロサンゴは皮肉部も骨格も皆白い。細工に用ゐられるのは骨格であつて、その中でモモイロサンゴの一番大きく木目が鮮かなので貴ばれる。珊瑚は我が國では主として九州の南部・土佐・紀伊などの海の五十尋から二百尋位なところに産する。
サンゴシヨ (珊瑚礁) 動 石灰珊瑚といつて骨軸の粗い珊瑚類の遺體が積つて出來たものである。石灰珊瑚はアカサンゴやモモイロサンゴなどのやうに深い海底には棲ま

ない。而して觸手の數も多し。

サントーハクキン (三頭膊筋) 生 上膊の後方にあつて、收縮すれば前膊を伸ばす。

サンマ (秋刀魚) 動 體は長く延びて刀の如く、鱗は薄くて剥げ易く、嘴は先端が尖り、は顎は上顎より長い。背は青く腹は銀白色である。遠洋に棲む魚で、秋より冬にかけて産卵のために近海に來る。

サンリョーキン (三稜筋) 生 三角筋とも云はれ、肩の角にあつて三角形をなす。これが收縮して上肢をあげさせる。

サメ (鮫) 動 鮫類は又鱈ともいはれる。口は體の下面にあつて鋭い齒が列び、體は紡錘狀で、尾は長くして力が強く、その先端は少し上の方に曲つてゐる。子を生むものと卵生のものとある。卵生のものは卵の周りに強い革のやうな袋を被り、紐のやうなものでしつかりと海の底の岩石や海藻にからみついてゐる。體の長さはホシザメのやうに三尺位なものもあれば、ウバザメのやうに三丈に及ぶものもある。形の奇妙なものにはヲナガザメといつて、尾の上部が五尺も伸びて、體の半分もあるものや、ノコギリザメと

いつて、頭の前端が伸びて、扁たくなり、その兩側に鋸のやうな突起のあるものや、シユモクザメといつて、頭が撞木のやうになつてゐるものなど色々ある。

サル (猿) 動 哺乳類の中で一番よく人に似た獸である。而して四肢は共に手の用をなし、扁い爪を具へてゐる。世界に産する猿類は、凡そ二百種餘もあつて、そのうちにはシャウジャウのやうに尾をもつてゐないものもあり、ヲナガザルのやうに尾の長さ長いものもあり、クモザルのやうに長い尾を樹の枝に巻きつけることの出来るものもあり、又テングザルのやうに高い鼻をもつてゐるものもある。而して我邦の猿は動物學上では日本猿といふ種類であつて、本邦に固有なる猿である。

サルオガセ (松蘿) 植 主として高山に生ずる地衣で、植物體は細い絲に似樹の皮に叢がり着いて四五尺も垂れてゐる。外部は脆い皮層となり、中心には強靱な菌絲の纖維があるから牽引かれても容易に切れなす。

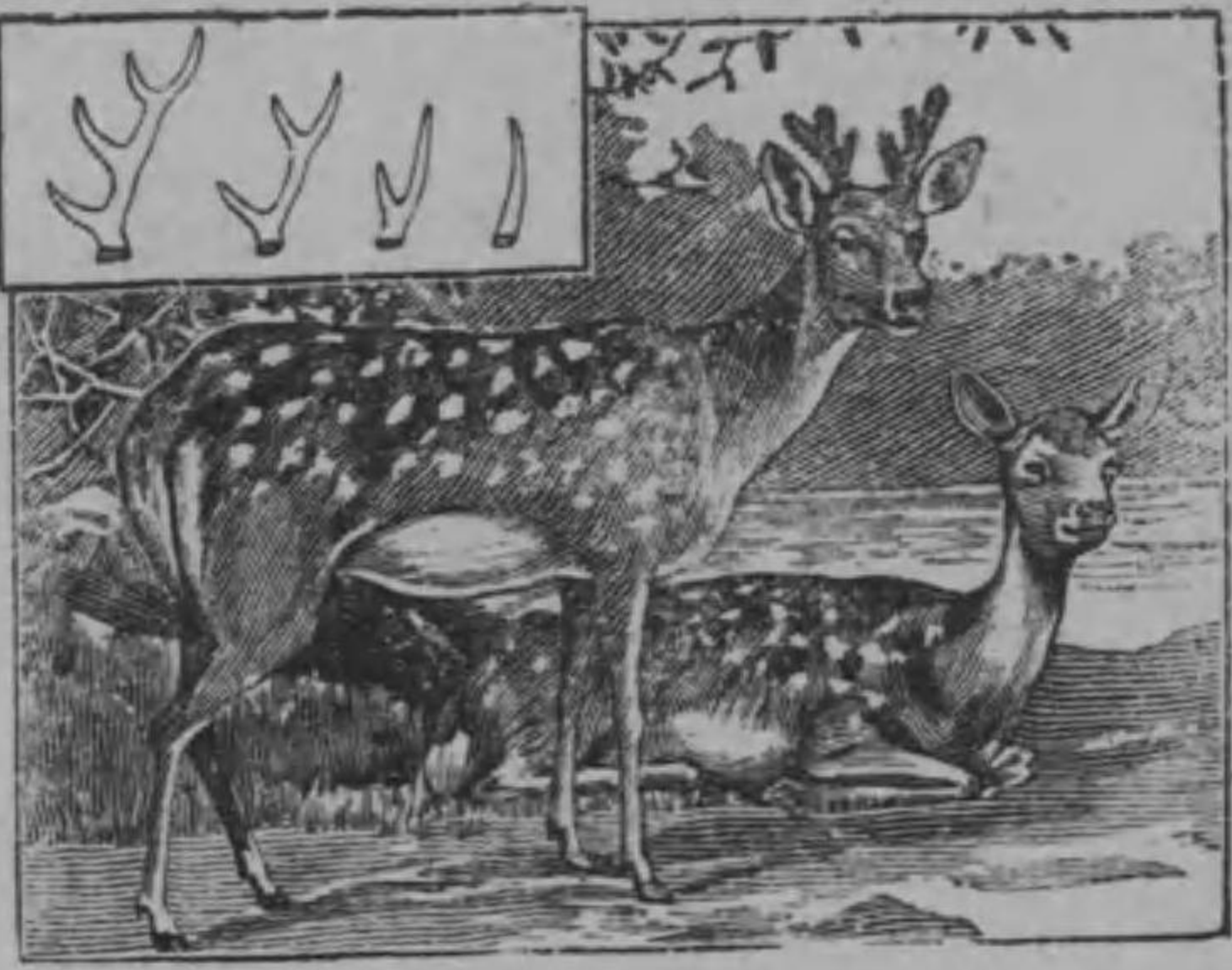
サルハムシ 動 小さい美しい甲蟲であつて、全體が黒綠色で圓い。ダイコン・カブなどの葉を食ふ害虫である。

サワラ (花柏) 植 ヒノキと同じく松杉科に屬し、葉は質が薄く、先きが鋭く尖つて外に向ひ、莖と離れてゐる。樹の皮は杉に似て灰褐色を帯び、縦に裂けて剥げおちる。材は軽く柔かで建築材木として貴ばれる。然しヒノキよりも少しく劣つて居る。



シイタケ (椎茸) 植 菌傘は上面が黒褐色、下面が白色で全體肉質である。シヒノキ。コナラ・クヌギ・クリ・シラカシなどの枯れた幹に生ずる。これを人工でつくるには二三の方法があるけれども、大抵これらの樹を伐り、刻目をつけ日當りのよい乾いた所へならべ枝をかぶせておく。此の時胞子を水に混ぜてまき散らし、約十九ヶ月もたつたころ、かぶせた枝を取り去り、日がけの風通のよい所へたてかけ、寒さや氷雪の害をうけないやうに圍をつける。春になつてこれを取り除けば、椎茸は暖氣と共に發生し成長するのである。

シイノキ (柯樹) 植 暖地に適する常緑樹で殼斗科に屬する。材は薪炭用・器具用とせられ、皮附の生木は椎茸を栽培するに用ひ、果實は炊つてその中の種子を食ふ。



(カ シ)

シカ (鹿) 動 九州・四國・北海道の山地に棲んで、山毛櫨・櫛等の果實や雑木の嫩芽などを食ふ。冬毛は褐色で、夏毛には白い斑を有して居る。牡は角をいたゞいて大さう優雅しい。此の角は牛の角とちがひ、全部骨質で毎年生えかはる。

シガキン (志賀菌) 植 セキリキンに同じ。

シカクキ (視覚器) 生 眼球及其の附屬器より成る。

シキムシ 動 體は暗黄色で長さが三分もある。栗の

害蟲であつて、六七月頃栗の果實に孔をあけ、長い口吻で卵ををさめる。卵はやがて果實の中に孵つて、これをたべて成長する。

シキヨニューズイ (四強雄蓋) 植 離生雄蓋の一種で、雄蓋の数が六本あつて、その中四本はながくて二本は短かいものをいふ。十字科植物は皆斯やうな雄蓋をもつてゐる

る。

シクコンソーホン (宿根草本) 植 タネンセーソーホンの條を見よ。

シクワ (雌花) 植 一つの花の中に雄蕊を缺いてゐるものをいふ。

シゲキ (刺戟) 生 感覺又は運動をおこさしめる原因をいふ。例へば熱い・冷い・明るく・暗い・痛い・痒いなどの如きである。

シコ 動 イワシの條を見よ。

シコロソ (視紅素) 生 眼球の内部なる網膜に含める色素である。この色素は光線にあつて忽ち變質すること、丁度寫眞の乾板に塗られた藥品に似てをる。さてこの視紅素の變質は視神經の末梢を刺戟し、視神經がこれを腦に傳へて始めて視覺が起るのである。

シコタンマツ 植 カラフトラクヨーシヨリの條を見よ。

シコツ (肢骨) 生 四肢をなす骨の總稱で、これを上肢骨と下肢骨とに分ける。上肢骨は肩帶・上膊・前膊・手の四部・左右三十二對の骨より成り、下肢骨は腰帶・大腿・下腿・足

の四部・左右三十一對の骨から出來てゐる。

ジコツ (耳骨) 生 耳小骨・耳中骨なども稱せられる。ミミ (耳) の條を見よ。

シシ (獅子) 動 アシアの西部、及びアフリカに棲み、産地によつて多少その形態や色がちがふが、大抵その棲んでゐる地方の土色と似てゐる。牡の頭や頸には長い毛がある。牝は牡より稍小さい、夜出て猪猪・シラフ・牛駱駝等を攻撃する。體長は六尺で目は六十貫に達するものもある。昔より百獸の王と稱せられてゐる。

シジミ (蜆) 動 殻は心臟形で表面が黒く、内面が紫色である。長さは八九分で多くは淡水に棲んでゐる。種類は澤山あつて、ナリヒラシジミ (東京)・セタシジミ (京都)等は主なるものである。

シジューカラ (四十雀) 動 背は青味が、つた灰色で腹と頬とは白く、頭と咽喉とは黒い。よくさへづる。食物は主として昆蟲である。

シズイ (雌蕊) 植 花の真中にあつて、その頂を柱頭といひ、基部の膨れた所を子房といふ。子房と柱頭との間の柄を花柱といふ。又、單一の雌蕊から成るものを單雌蕊

二個以上の雌蕊から成るものを複雌蕊と稱する。

シソ(紫蘇) 植 畑に栽培せられ一年生草本で、莖にも葉にも芳香がある。花には紫色と白色との二種があり、葉の縮んで表裏共に紫色なのをチリメンシソ、緑色なのをアヲシソといひ、表が緑色で裏が紫色なのをカタメンシソといふ。この葉を梅干のうちへ入れて紅くなるのは、葉内に含める花色素が梅の實の酸にあつて紅くなるためである。

シタ(舌) 生 口腔の底にあつてその根は舌骨に附着き、運動が大さう自在で食物を嚙んだり、呑みこんだりすることをたすける。表面は粘膜で被はれ、その中に味覚器があつて味ひを感じ、口腔の形をかへて言語を發する用をなし、また觸覺をもつかさどる。

シダシヨクブツ(羊齒植物) 植 莖や葉の區別が明瞭した丈夫な維管束を有する隱花植物で、石松類・木賊類・蕨類・羊齒類の四つにわけてある。

シタン(紫檀) 植 東印度の原産で、荳科に屬する常綠樹である。幹は直立して六丈に達し、心材に朱紅色または紫色で質が甚だ堅く且つ重い。器具につくり、また染料に供せられる。近時は臺灣の蓮葉桐や、栗材などの染めたのを以て、この擬物を造つてゐる。

シダルイ(羊齒類) 植 羊齒植物の一つで、葉及び莖はよく發達し、子嚢は葉の裏または縁に群がり生ずる。ワサビ・センマイ・マルハチなどはこの類にはいる。

シチメンチヨ(七面鳥又吐綬雞) 動 もと北米の原産で森林に棲み、昆蟲・蛙・蜥蜴・草本、果實などを食ふ。小形の頭と頸の半分は露出で青く頸には赤い肉瘤がある。これは自由にふくらましたり、また藍色にかへたりすることが出来る。翼は黄褐色で青味があり、尾は短い、雞の類である。

シチローネズミ(七郎鼠) 動 ネズミの條を見よ。

シテツコー(磁鐵礦) 礦 陸中の釜石より多く産し、鐵黑色を帯び、條痕も同色で七分の鐵をふくみ、磁性が極めて強い。支那大冶鐵山はこの礦石を多く産する。

シトローキン(四頭股筋) 生 股の前にある筋肉で、この筋が收縮すれば腰が屈るか又

は膝が伸びる。

シノー(子囊)植 胞子を容れてをる子囊をいふ。

シノブ(海州骨碎補)植 初夏新葉を生じた時、莖を種々の形に巻いて簷下につるして涼を呼ぶので名を知られてゐる。深山の樹の幹などに著生してゐる羊齒類である。

シビレエイ 動 エイの條を見よ。

シブイチ(四分一) 鱧 ゴーキンの條を見よ。



(マウマシ)

シマウマ(斑馬) 動 亞非利加に産する。黄をふびた白色の地に、規則正しい黒の横斑條があつて甚だ美しい。驢馬よりも大きい性質は似て居る。毛色の美しいのと肉の味がよいためとで、土人や猛獸にかはれて近來數が減つたさうである。

シマヘビ(縞蛇) 動 形はアラダイシヤウに似てゐるが、褐色で、背に四條の黒線がある。

シミ(衣魚) 動 體は長くして扁たく、銀色の細かい鱗を被り、翅を有たない。尾には體と略同じ長さの毛が三本ある。日光を嫌ひ、暗い所に居て書物や衣類・紙などを食ふ。下等の昆蟲である。

シンキンルイ(真菌類) 植 菌類の一族で、高等の類をふくむ。マツダケ・シヒダケなど、普通に蕈と稱せられてゐるものである。

シンタイ(神経) 生 神経細胞から出た長い突起即ち神経纖維の集りをいふ。これには運動神経と知覚神経との二種がある。運動神経は脳又は脊髓から筋・腺への命令を傳へ、知覚神経は外界からの刺戟を脳・脊髓に傳へて感覺をおこさしめる。

シンタイタイト(神経系統) 生 脳・脊髓神経系と交感神経系との總稱である。

シンタイチユース(神経中枢) 生 脳髓・脊髓・交感神経節をいふ。何れもこれより多くの神経を出し、獨立して命令を發し得るところである。

シンジ(心耳) 生 房に同じ。シンゾーの條を見よ。

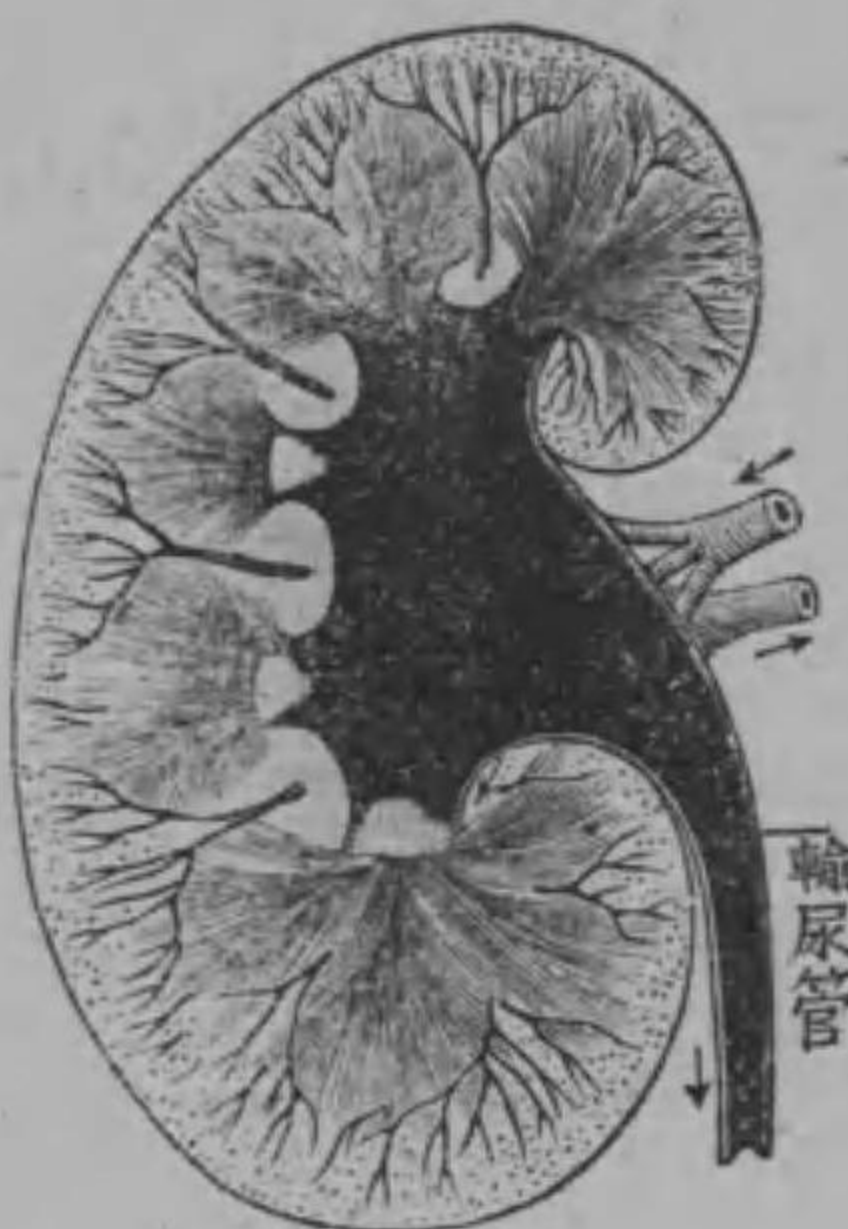
シンシヤ(辰砂) 礦 濃い紅色の礦物で條痕も同色である。これを木炭の上に熱すれば

氣體となつて悉く發散する。水銀を製出する唯一の礦物である。

シンジュガイ(眞珠貝) 動 一名をアコヤガヒともいふ。良い眞珠を産するので、各地に養はれる。海水の清く澄む静かな底の岩などについてゐる。殻は方形で二三寸、右の方が小さい。表面は暗褐色に蒼味があり、薄片が鱗のやうに厚く重なつてゐる。内部は美しい眞珠光澤である。眞珠は砂粒や寄生蟲などがはいつた時、外套膜から出す眞珠質が、これを包んで生じたものであつて、近頃人工で澤山の眞珠をつくらせてゐる。

シンゾー(心臟) 生 左右の肺臓の間にある拳ほどの大きさの囊で、頗る丈夫な筋肉から出来てゐる。その外面は全く心囊といふのよい膜で包まれ、内部は縦に二つにしきられ、各半部はまた瓣膜によつて上下に分たれ、上をすべて房、下をすべて室といふ房は静脈管を迎へる所で、左房には肺から歸る血液を導く肺静脈、右房には全身から歸る血液を運ぶ大静脈が連つてゐる。室は動脈管を出す所で、左室には全身に行く血液を通ずる大動脈、右室からは肺に行く血液をはこぶ肺動脈が出てゐる。房と室との

境は右心では三尖瓣といふ三枚の瓣膜、左心では二尖瓣と稱する二枚の瓣膜がある。また大動脈や肺動脈への出口には半月瓣と稱する。三枚の半月形の瓣膜がならんでゐて、血液が逆流するを防いでゐる。かくて心臟はその筋肉の規則正しい伸縮と、瓣膜の助けによつて丁度ポンプのやうな作用をし、絶えず血液を循環せしめてゐる。



(面斷縦の臓腎)

シンゾー(腎臓) 生 横隔膜のやゝ下の方の脊骨の兩側にあつて、蠶豆のやうな形をした一對の器官で、内房の一番凹んでゐる場所を腎門と名づけ、こゝから大きな動脈と静脈が出入する。輸尿管と稱する長い管もこゝに起り、脊柱の兩側に沿うて下つて骨盤の内に入り、膀胱の後を斜に貫いてゐる。腎臓は細尿管と稱するごく細かな管が無數に集つたものである。細尿管は幾度か迂曲つて腎臓の外面に近い所にあるマルピギ氏囊に終り、一方は次第に集つて大きな管となり腎盂に開く。腎盂はほゞ漏斗形の腔所で、輸尿管に通じ、腎臓内にできた尿が集まつて輸尿管にうつる所である。

不用物を含んだ血液が腎動脈から腎臓の内へはいる。腎動脈は次第にわかれて、遂に腎の外側に近い處に於てマルビギ氏囊のうちに這入つてをる。次に囊内から出た血管は更に細尿管の周りを圍んで毛細血管となつて居る。そこで尿はマルビギ氏囊が血液の中から濾してとつた水分と、細尿管が血液の中から吸ひとつた老廢物とが合したものである。

ジンゾーセキ (人造石) 鑛 火山岩や砂や礫などをセメント又はビツチで固めたものを云ふ。

ジンタイ (靱帶) 生 丈夫で伸縮しない膜で、骨と骨とが繋る時に相離れないやうにするためのものである。

シンチユー (眞鍮) 鑛 ゴーキンの條を見よ。

シンヨージユ (針葉樹) 植 闊葉樹にくらべて、葉はせまく、スギ・マツなどの如く針状または線状の葉を生ずる樹木である。

ジヤガタライモ (馬鈴薯) 植 地下莖の先端は肥大して薯となつてゐる。吾等の食用と

する所はこゝで、これを塊莖といふ。この塊莖は葉の腋から出た芽の變態と見なすことが出来る。こゝには澤山の澱粉が含まれてゐるから、常食の補ともなり、味噌・醬油の原料ともなり、また澱粉製造にも使用せられる。もと南米智利國の原産で、三百年餘り前に歐羅巴に傳はり、我が國へはその後和蘭人が傳へたさうである。今は各國で盛に栽培してゐる。

シヤクシガイ 動 イタヤガヒに同じ。同條を見よ。

シヤクナゲ (石南) 植 この類はツツジと同じ種類に屬するけれども、葉は一般に大きくて厚く、裏面には褐色の細かい毛が生えて居るから、一見して區別が出来る。大抵高山に自生し、淡い紅色の美しい花を開く。觀賞用としてよく庭園に植ゑられてゐる。

シヤクヤク (芍藥) 植 庭園に培養せられる多年生草本で、莖の高さは一二尺に達する。葉は複葉で、春のはじめに出る新芽は赤い紫色である。六月頃莖の頂に大きい美花を着け、色は紅または白である。根を乾して藥用に供する。ヤマシヤクヤクは山地に自生し、花も葉も芍藥に似てゐるが一體に小さくて美しくなす。

シヤクリ (吃逆) 生 横隔膜が不随意に收縮するため、急に吸氣が起りて會厭軟骨や聲帯を振動するによつて一種の音聲を生ずるものである。



(麝香鹿)

シヤコージカ (麝香鹿) 動 中央亞細亞の高山地に居り、我が國では樺太に棲んでゐる。毛は大概灰褐色で長い。牝牡共に角がなく、たゞ牡は上顎から二本の鋭い牙がはえ、また腹部の後方に麝香を分泌する小さい囊がある。薬用の麝香はこの囊を取り出して乾燥したものである。體の長さは三尺にすぎない。

シヤジクモ (車軸藻) 植 淡水に産する藻類で、細胞膜に硅酸をふくんでゐて、中々硬い。外形は大さう

スギナに似てゐる。

シヤチ 動 逆戟鯨ともよばれる。世界中到る所に産し、時々河に上つて來ることもある。性質は狂暴で小群をなして他の鯨類をおそひてこれを殺すことがある。體の長さは

は二丈餘で、齒は鋭く脊鰭は真直に立つてゐる。

シヤミセングサ 植 ナツナに同じ。

シヤモ (軍鶏) 動 ニハトリの條を見よ。

シヤモンセキ (蛇紋石) 礦 輝石や角閃石などが分解して生じたもので、色は暗緑・黄緑などあつて、黒い斑が美しい。蠟のやうな光澤を有し、磨けば大さう美しくなるので石燈籠、石碑の類をつくるに用ひる。

シユーイシユ (雌雄異株) 植 イテフなどのやうに雌花と雄花を別々の株に生ずるものをいふ。雌雄別株に同じ。

シユードーシユ (雌雄同株) 植 マツ・クリなどのやうに雌花と雄花とが同一の株に生ずるものを云ふ。

ジユーニシチヨーチユー (十二指腸蟲) 動 黄白色または紅味をおびた圓柱形の蟲で、體の長さは五分ばかりある。人類の十二指腸に寄生して、血液を吸ふため、寄生された人の身體は大さう衰弱するものである。卵は糞便と共に體外にいで幼蟲となつて皮

膚又は口からまた人體に入る。蠕形動物に屬し、蛔蟲などに近いものである。

シユーミンウンドー (就眠運動) 植 ネムノキ・カタバミなどの葉、タンボポ・フクジュサウなどの花のやうに、晝間は開いてゐるが夜間に閉ぢ合はるのをいふのである、これを又、睡眠運動ともいふ。併しこれ等の植物は夜間に於て眠るのではなく、たゞ日光の刺戟によりて起る一種の運動にすぎないのである。

シユーマクユーズイ (聚葯雄蕊) 植 キクのやうに葯だけが合著してゐる雄蕊を云ふ。また合葯雄蕊とも呼ばれてゐる。

シユコン (主根) 植 莖の基部から直ぐに出た根をいひ、その特に發達したものを直根と云ふ。

シユシ (種子) 植 胚珠の成熟したもので、種皮と種核との二部から出來てゐる。種皮は種子の外部にあつて、これを保護するものである。種核は種皮の内にあつて、胚ばかりから成るものと、胚と胚乳とから成るものとある。種皮の上に更にこれに似たものを被つてゐる時はこれを假種皮といふ。

ジユフン (授粉) 植 被子植物では柱頭に、裸子植物では胚珠に花粉をつけることである。自己の花粉をつけるのを自花授粉、他花の花粉をつけることを他花授粉と稱する。授粉の媒をなすものは、鳥・昆蟲・風・水などである。

ジユンクワンキ (循環器) 生 心臓と血管とを併せていふ。淋巴系をもこの中に入れることがある。

ジユンサイ (蓴) 植 古い池沼に生じ、葉は楕圓形で楯状をしてゐる。根は水底にあつて莖と、葉の裏とには無色透明の粘液がついて居つて大さう滑である。春莖や葉の嫩いものを採つて食用とする。夏日葉腋から花梗をのばして紫紅色の花を開く。一名をヌナワといふ。

シユモクザメ (撞木鮫) 動 サメの條を見よ。

シユロ (椶櫚) 植 シユロは我が琉球・臺灣などの暖地に生ずる常緑喬木で、長さ三四丈に達する。幹は全部褐植をした長い剛い毛で包まれ、葉は大形で掌状に分れ、長い葉柄をもつて幹の頂に群り生じてゐる。材は床柱または小器具につくり、剛毛は繩。

蓆・刷毛・箒靴拭などにする。

シヨール(子葉) 植 ハイの條を見よ。

シヨールガ(生薑) 植 普通に栽培するもので香辛料としてよく用ひられる。根莖は肥大し、肉質で黄色をおび、ほゞ竹の地下莖に似、主としてこれによつて蕃殖する。生薑の原産地は南方亞細亞であらうといふことである。

シヨールクワ(消化) 生 食物を液體のありさまに變ずることをいふ。

シヨールクワエキ(消化液) 生 消化の作用をなす液で、唾液・胃液・腸液・胆汁を云ふ。

シヨールクワキ(消化器) 生 消化器とも云ひ、消化管と消化腺を總稱する。

シヨールクワクワン(消化管) 生 口から始まつて、咽頭・食道・胃・腸を経て肛門に終る長い管で、食物はこの管の内を通つて消化され且つ吸収されるのである。

シヨールクワセン(消化腺) 生 消化液を分泌す場所で、唾腺・胃腺・腸腺は消化管にあつて、脾臓・肝臓は別に離れてある。

シヨールクワバクテリア(硝化、バクテリア) 植 地中に繁殖する細菌で、アンモニア化合物を變じて、植物に吸収せられ易い硝酸化合物とし、その生育を助けるものである。

この硝化作用は二種のバクテリアの連續作用によつて行はれるものである。即ち先づ亞硝酸バクテリアがアンモニア化合物を亞硝酸化合物とし、硝酸バクテリアは更にその亞硝酸化合物を硝酸化合物とする。いづれも酸化作用である。

シヨールコン(條痕) 鑛 鑛物の粉の色をいふ。條痕を見るには條痕板と稱する素燒の白い板を用ひる。

シヨールサンサヨール(蒸散作用) 植 ハツサンサヨール(發散作用)の條を見よ。

シヨールジュキン(頼頼筋) 生 コメカミの動くのはこの筋の伸縮によるもので、下顎を上にあげる作用をする。

シヨールジュンクワン(小循環) 生 ケツエキジュンクワン(血液循環)の條を見よ。

シヨールセキ(硝石) 鑛 加里硝石・曹達硝石の二種がある。後者は南米智利に多く産するから智利硝石とも稱せられる。硝石を製するには古い家の床下の土を採り、水をまぜ

て土中の硝石分を溶かし、液だけを熱して結晶させ、或は水の洩れない地に糞尿・鳥獸の死體・灰などを撒き、空氣に曝して硝石を生ぜしめた後、前と同法によつて製する。火薬や硝酸の製造に用ひられ、醫藥ともせられる。普通に硝石といふのは加里硝石のことである。

シヨーチヨ (小腸) 生 消化及び吸収の行はれる一番大切な場所、内面には夥しい横皺と天鵞絨のやうな絨毛があり、絨毛の間に多くの腸腺が開いてゐて腸液を出す。腸の上方の胃に連つた曲りめは十二指腸である。胃のうちで粥状になつた食物はこゝへ来て臍液・胆汁をうけ、更に腸液を受けて次第に消化し、蠕動によつて送り下げられて行くうちに血管や乳糜管の中へ吸収せられる。而して不消化物は大腸へ送られる。

シヨートーサヨ (蒸騰作用) 植 ハッサンサヨ (發散作用) の條を見よ。



(石乳鐘)

シヨニユーセキ (鐘乳石) 鑛 石灰石を溶解した水が、岩石の隙間から滴り落つる際、水が乾くために

方解石が結晶して、次第に大きくなつたので、細長い乳房のやうな形をなしてゐる。これを取つてその折れ口を磨いて見ると、木理のやうなスヂが見える。

シヨノー (小腦) 生 大腦の後下部に接して横皺を有し、左右半球に分れてゐる。實質は大腦と同じものから成り、運動作用の調整をする所である。

シヨハクリ (松柏類) 植 裸子植物に屬してゐる、蘇鐵や公孫樹の類に似た。葉が針狀又は鱗狀をなしてゐるものをいふ。中に一位科、松杉科の二科がある。

シヨモキン (釀母菌) 植 出芽法により或は體內に二乃至八個の胞子を生じて繁殖する菌類で、釀母菌または糖菌ともいはれる。體は一個の細胞から成り、球形または楕圓形である。培養液の中に釀母菌を盛んに發生せしめた後に調べて見ると、液面は薄い膜で被はれてゐる。これはこの菌の結合したもので、前の形とは大さう異り、悉く圓柱形をなし、互に連結して分岐した絲狀に變つてゐる。これによつて釀母菌も亦カビの類と同じくもとは絲狀菌であつたのが、營養液の中にその體を浸すやうになつて次第に簡單となり、つひに單細胞となつたものと考へることが出来る。釀母菌の種類

には清酒釀母菌・麥酒釀母菌・葡萄酒釀母菌などがある。

シヨロユ (醬油) 蛋白質に富み、芳香物質をも含む重要な調味品である。先づ麴黴によつて大麥や大豆中の澱粉その他を變化せしめてモトを造り、これに醬油釀母菌・サルシナ (細菌の一種) などを増殖せしめ、その醱酵作用によつて製出せられるものである。

シヨリヨクジユ (常緑樹) 植 秋になつても落葉せず、そのまゝ越年するもので、多くは翌春に新しい葉を生じた時はじめて古葉を落すのである。常磐木ともいふ。



(ローヨシ)

シヨロロ (松露) 植 砂地の山林などに普通に生ずる食用菌で、球形であるけれどやゝ上下に扁たくなつてゐる。若いものは色が白くて米松露と呼ばれ、熟したものは褐黄色で栗松露と稱せられる。表面が滑かで内部は海綿状をなし、下面の中央から根のやうに菌糸を出して地中の部と連絡をしてゐる。松露は春季に一番盛んに産するけれども秋冬の時節にも生ずることがある、冬季

産はことに寒松露といつて味がよい。

シヨクエン (食鹽) 礦 岩鹽と海鹽との別がある。岩鹽の純粹のものはスゴロクのサイのやうな結晶をなし、水に溶け易くて鹹味が強い。獨逸のスタツスフルト、米國のミシガンなどは世界に有名な産地でことに獨逸の産は無色透明であつて、品質が宜しい。我が國には未だ發見せられない。海鹽は鹽田法又は天日製鹽法により、海水を蒸發せしめて得たもので、平均海水百分から二五分を採ることが出来る。食鹽は日常の用の外鹽酸や炭酸ソーダや漂白粉の製造原料として重要なものである。

シヨクドー (食道) 生 咽頭から胃に達する管で、縦横の筋肉より成り、食物を呑みこんだときはその部分が擴がり、交々二つの筋肉が收縮してこれを下へ送るものである。

シヨクブツカイ (植物界) 植 動物界に對する生物の二大分類である。植物界をわけて顯花植物・隱花植物の二部とする。

シヨツカク (觸覺) 生 ヒフカンカクの條を見よ。

シヨロゲモ (絡新婦) 動 脚が長く、黄と黒とのだんだらで大さう美しい。雄の體の長さは二分位で、雌は五六分位ある。胸背は灰色で腹は黄色に灰黒などの斑紋があつて、網は車輪狀でよく粘る。蜘蛛はその中央に居て小蟲などのかゝるのを待つのである。

シラカンバ (白樺) 植 北海道その他本州の高山に自生する落葉喬木で、幹の高さは七八丈に達する。樹皮は白色であつて、層をなして重なつてゐるから、紙のやうに薄く剥げる性質がある。葉はほゞ三角形で先頭が尖つてゐる。材は種々の器具を造り、葉は黄色の染料とし、樹皮は松明または火繩に造る。

シラクモキン (白癬菌) 植 小兒の頭部に普通に見るシラクモはこの菌の寄生によつて起る病である。この菌の胞子は完全な皮膚の表面から侵入し、毛囊の中か周りに時として毛幹の中にも發芽する。患部は黄白色で徑一寸内外の斑紋をなし、圓狀又は盃狀の小さい殻が集まつて恰も蜂の巢の一片に似てゐる。各小殻ははぜた豆ほどあつて、真中に毛を抱いてゐる。

シラサギ (白鷺) 動 サギの條を見よ。

シラビソ 植 シラベに同じ。

シラベ (白檜) 植 シラビソともいふ松杉科に屬する植物で、葉は平たく、針形をなし、上面の中央に凹みがある。先端も少し凹んでツカに似てゐる。本種は我が國寒帯林の代表樹であつて、本州中央山脈の五千尺以上の所には殆んど産しない所はない。幹の高さは七丈に達し直徑が二尺もある。枝が水平車輪狀につき、樹皮が灰白色だから直ぐに目につく。

シラミ (蝨) 動 アタマジラミ・キモノジラミ・ケジラミなどがある。腹は胸より幅が廣く、口は蚤と同じく血液を吸ふやうに出來てゐる。アタマジラミはキモノジラミよりも小さく、腹の兩側にある切れこみは、キモノジラミの方が淺い。アタマジラミは五十倍の石炭酸に洗へば卵と共に死んで了う。キモノジラミは硫黄華を薄い布の袋に入れて衣服の腋下に縫ひつけて置けば宜しい。

シロアリ (白蟻) 動 木材ことに建築物を食害して之を倒すによつて恐れられてゐる。形

は普通の蟻に似てゐるが、腹と胸とのくびれがない。觸角は眞直ぐで蟻のやうに折れてゐない。口から酸液を出し、材の内部ををかすもので、暗い所に社會生活をしてゐる。習性は蟻と同じい。

シロクマ (白熊又北極熊) 動 四時水や雪で鎖されて居る北極地方に棲むもので、體は大きく一丈もある。全身銀白色の長い毛で被はれ、雪と同じいので敵を攻めるにも身を衛るにも宜しい。陸上の歩行は遅緩い方だが水中は頗るよく泳ぎ、鮭や海豹を追うて洋中に出ることがある。

シロメ (白鱈) 鱈 ゴーキンの條を見よ。

シロヤマブキ 植 ヤマブキの條を見よ。

ス

スーヅツセイ (趨日性) 植 日光に向ふ性である。向日性と異つてゐる點は、主に下等生物にあらはれ、體の全部を日光に向はせるにある。

スイエキ (睥液) 生 無色透明で鹹味があり、その中に三種の酸酵素を含み、澱粉を砂糖に變ずるほか、蛋白質を消化してペプトンとなし、且つ脂肪に乳化する作用がある。而してこれは消化液のうちで一番大切なものである。

スイギン (水銀) 鑛 通常の温度に於ては液體であるが、攝氏氷點下四十度に至ると固體となり、三百五十度以上に熱すると氣體となる。用途の廣い金屬で、或は工業用、或は藥用、或は理化學用に供せられる。天然に産することは少く、大抵は辰砂から製造する。

スイギユ (水牛) 普通の牛に似てゐるが、角は頭の後方から出、弓のやうに彎曲つて三尺に及ぶものがある。好んで水中に居り、泥を體に塗りつけて昆蟲の害をふせぐ。我が臺灣にもこれを産する。

スイクワ (西瓜) 植 原産地は南部アフリカで、寛永年間にポルトガル人がこれを我が國に傳へ、今日では各地方に作られてゐる。近頃輸入せられた米國種は形が稍々長く肉の色が淡紅くて味が大きう甘い。果實の熟したものは大てい果柄に近い所の卷鬚が

枯れて居り、前端が窪み、また指で壓せば容易く窪む傾きがあり、手で打てばにぞつた音がするから未熟のものと區別することが出来る。

スイガイ (水莖) 植 水中にある莖でヒシの莖の類を云ふ。

スイコン (水根) 植 水中に沈んでゐる根をいふ、ヒシ・ウキクサなどの根はこれである。

スイシヨ (水晶) 鑛 石英の無色透明なるものをいふ水晶にはその外、煙水晶・紫水晶・草入水晶・水入水晶などがある。この中で草入水晶といふのは、水晶の中に電氣石や陽起石が纖維状をなして含まれてゐるもので、水入水晶といふのは、水または瓦斯を含んでゐるものである。古來寶石の一にかぞへられ磨いて玉・レンズなどを造る。

スイセイガン (水成岩) 鑛 地上の岩石が崩れて細くなりて海や河に沈積し、または古代の動植物の死骸が沈積して凝つたものである。水成岩は火成岩と異つて常に層状をなし、時に動植物の化石を含んでゐる。石灰岩・砂岩・礫岩などはこれに屬する。

スイゾ (臍臟) 生 胃の直下にある。白茶色をした長い腺で、一條の細い管を出して

十二指腸に連り臍液を送る。

スイミンウンド (睡眠運動) 植 シュロミンウンド (就眠運動) の條を見よ。

スイミンビヨ (睡眠病) 生 アフリカの熱帯地方に流行する病氣である。この病はツエツエバへと名ける蠅が人體を刺して病毒を廣める媒をせるによつて起るものである。而してこの病毒はトリバノゾーマと云ふ原蟲である。

ズイムシ (螟蟲) 動 イネノズイムシはズイムシの中で一番知られてゐるもので、稲作に大害を與へるものである。一年に二回發生するものを二化螟蟲、三回發生するものを三化螟蟲といふ。幼蟲は稻の髓を食害する。蛾は前翅が灰黄で後翅が白い。翅をひろげると八九分に達する。

ズギ (杉) 植 我が國特産の針葉樹であつて、一番大きく育つ。北または北東に面する山腹・谷間などで。土が深くて濕氣のある所にはことによく成長する。

ズキナ (問荊) 植 木賊類に屬し、綠色を呈する部分は殆ど枝ばかりの地上莖である。シクシはその花ともいふべきもので、頂に筆の頭のやうな穂を著けてゐる。これを

子囊穗といふ。ツクシのハカマと稱せられるものは、鱗状をなせる葉が莖を包んでゐるのである。

ステートダラ (佐渡鱒) 動 朝鮮ではメンタイといふ。體の長さが一尺五寸位で鱒に似て細小である。灰白色で側面には黒色の斑紋が縦にならんでゐる。腹は鱒のやうに膨れてゐない。越後・佐渡に多く産する。

スズ (錫) 鑛 錫は性質が大さう軟で火に熔け易く、容易に鑄を生ずることなく、展性に富んでゐるから、種々の器具を作り、煙草の包紙や罐の口被などに使用し、また鐵板の表面にめつきしてその鑄を防ぐ。所謂ブリキと稱するものである。天然に産することなく常に錫石から製煉する。

スズイシ (錫石) 鑛 成分は酸化錫であつて、黒色から褐色を呈し、條痕は無色または淡い黄色を帯びてゐる。錫石を含んだ岩石、即ち主に花崗岩・斑岩などが崩壊れて、錫石が流水のために河床などに運ばれたものを流錫といひ、美濃の苗木地方に産する。錫石の主なる産地は薩摩の谿山、豊後の木浦などである。

ススキ (薄) 植 多年生の草である。春地下莖から新芽を出し、秋花を著ける。葉は五分ほどあつて大さう長い。小穂に芒があり、また下部に白い毛を生ずるので、花穂は全く白く見える。この穂を尾花といふ。秋の七草の一である。

スズキ (鱸) 動 近海魚であつて夏は河にのぼることがある。我が國には出雲の松江が産地として一番名高い。體の長さは三尺位で、背は淡蒼く腹は白い。一二寸位な幼魚をフツコ、五六寸位のをセイゴ、一尺以上に成長したのをスズキといふ。

スズシロ 植 ダイコンの古名である。

スズムシ (金鐘兒) 動 黒色で、形は西瓜の種子に似てゐる。雄は頭の頂に四箇の黄褐紋が横にならんでゐる。「リリン」、「リリン」といふ美しい鳴聲をたてる。

スズメバチ 動 ヤマバチに同じ。同條を見よ。

スズメ (雀) 動 人家に近く棲み、屋根裏などに巢をつくる。秋・冬の候に盛に穀類を食ふので、農家には大害を與へるが、春・夏の頃は主に害虫を食ふから有益である。本邦は元より亞細亞大陸・歐羅巴にも産し、一番普通な鳥である。

ススリナキ (綴泣) 生 澤山の短い吸息に次ぎて、長い呼息をするものをいふ。

スズラン 植 タニユリに同じ。

スツボン (鼈) 動 その肉が美味なため珍量せられる。イシガメと同じく普通我が國の川に住んでゐる。背甲は圓くてオリブ色をなし、腹甲は白く、嘴は石龜に比べると頗る長し。

スナ (砂) 鑛 岩石が碎けて小豆粒よりも小さい粒になつたものをいふ。

スマシ (紫花地丁) 植 タンポ、と共に春の野をかざる草で、種類が甚だ多い。この類の花には距といふものがあつて、雄蕊の基にある蜜腺から出る蜜を貯へておく。これは花瓣の一枚が特に大きくなつて囊となつたものである。種子には肉質の部分があつて、蟻はこの部を好んで食するから、種子が散ると蟻はこれを食べるために、彼處此處に持ち運ぶので、種子の散布上大さう好都合である。

セ

セアラゴムノキ 植 バラゴムノキと同じ類であるけれども、原産地はブラジルで、バ

ラゴムよりはやく低い。ブラジルでは盛んに栽培せられてゐるけれども、馬來半島には未だ之を試みない。ゴム採取の法はバラゴムノキに於けるものと同じい。

セイタイ (聲帯) 生 喉頭のうちにあつて、甲状軟骨の内面から盃狀軟骨に連つてゐる一對の靱帯である。聲帯は粘膜に包まれてゐて弾性に富んでゐる。音聲は強い呼氣がこれを振動せしめるによりて發するのである。

セイモン (聲門) 生 兩聲帯の間隙で空氣の通る路である。聲の出ない時は聲帯が弛んでV字形をしてゐるが、聲を發するときは聲帯が張つて聲門が狭くなる。

セイリガク (生理學) 生 體の生活してゐる有様を調べる學問である。又體內諸氣管の作用を調べる學問であると云つてもよろしい。

セイゴ 動 スッキの條を見よ。

セキ (咳嗽) 生 深い吸氣の後で、急に烈しい呼氣を行ふもので、この時聲帯が振動して大聲を發するのである。氣管や咽頭などにはいつた物を出す時などにもおこる。

セキエイ (石英) 鑛 砂粒の中に混合つてガラスの様な先澤を放ち、乳白色で不透明なものは多く石英で、ガラスよりは大きく硬く、雨風に曝されても質は變らない。これを粉末にしたものはガラス製造の重要な原料にせられる。水晶・玉髓・瑪瑙・燧石・碧玉などは皆石英の種類である。

セキエイソメンガン (石英粗面岩) 鑛 主なる成分は石英・長石・黒雲母・角閃石などで、白・灰または淡い褐色などを呈してをる。この岩石の一種で波形の模様のあるはれたものがある。これはその噴き出したときに流動したことを示すもので一名流紋岩といふ。建築材または砥石などに用ひられてをる。

セキシヨールイ (石松類) 植 羊齒植物の一つで、ヒカゲノカヅラなどがこれに屬する。この類の植物は前世界にあつては頗る蕃殖し、莖幹の大きなものも多くあつた。鱗木封印木などは即ちこの類である。

セキズイ (脊髓) 生 延髓の下部から起り、第一腰椎に及び、脊椎管の内を充し、外面は腦脊髄膜で包まれてゐる。延髓と同じく外部は白質、内部は灰白質、その前部を前角、後部を後角といひ、前角より出る神経を前根又は運動根後、角より出る神経を後根又は知覺根と稱する。

セキズイシンケイ (脊髓神經) 生 脊髓神經は脊髓より出る前根・後根の一緒になつたもので三十一對ある。皮膚や筋肉に分布し、腦神經の司どる部分以外の作用を司どつてゐる。

セキタン (石炭) 鑛 古代に繁茂した植物が地中に埋れ、永い年月の間に次第に變質して炭素分のみ残つて出来たものである。炭素を含む分量の多い少いと、燃える時の火力と、色澤とによつて、無煙炭・黒炭・褐炭・泥炭の四種にわける。無煙炭は最も質の宜しいもので、朝鮮の平壤炭や滿洲の烟臺炭・本溪湖炭などはこれである。石炭は地層の中にはさまざま層をなして存在するがこれを炭層といひ、炭層を含む土地を炭田、炭層まで地面から開いた坑を坑道といふ。石炭は燃料として用ひられる外、石炭瓦斯・骸炭などを製し、コールタール・アニリン染料・石炭酸などの副産物を得られる。

セキチク (石竹) 植 ナデシコの條を見よ。

セキツイドーブツ (脊椎動物) 動物 體は左右同形で、脊柱を有つて居る動物の總稱である。之を哺乳類・鳥類・爬虫類・兩棲類・魚類の五綱にわけける。

セキテツコー (赤鐵鑛) 鑛 赤褐色或は黒色を帯び、條痕は赤色である。成分は第二酸化鐵で、鐵鑛の中では重要なものの一である。陸中の仙人、越後の赤谷は主な産地である。

セキドーコー (赤銅鑛) 鑛 塊状または樹枝状をなして産し、色は赤い。而して條痕も同じである。自然銅または黃銅鑛の酸化したもので、木炭上に熱すると黒くなり、遂に銅をのこす。

セキボク (石黒又黒鉛) 鑛 純粹なものは炭素ばかりから成り、鉛黒色または鐵黒色で金屬の光澤があり、手に觸れると滑な感じがする。粘土を加へて鉛筆をつくり、金物に塗りにて錆を防ぎ、器械の心軸に塗つて摩擦を減ずるなど用途が多い。

セキユ (石油) 鑛 地中から汲みとつたまゝのものは原油といひて濃い褐色である。これを華氏百二十度乃至百五十度に熱し、發散した氣體を冷却したものは揮發油といひ、よく脂肪を溶かす性があつて、石油發動機などに使用せられる。原油を百五十度以上三百度に熱し、蒸餾したものは燈油といひ、日常燈用に供するものである。原油から揮發油や燈油を蒸餾した殘の液體を重油といひ、暗綠色または黒色である。重油はそのまゝ燃料とし或はこれより更に機械油・ワセリン・パラフィンを製出する。原油から上に述べたやうにいろいろのものを採つた滓をピッチといふ。ピッチは煉炭製造用に供せられる。

セキリキン (赤痢菌) 植 志賀博士が獨逸留學中にこれを發見したので志賀菌とも呼ばれる。體の全面に纖毛があり、桿状で運動性がなく、大さうチブス菌に似てゐる。

セキレイ (鶺鴒) 動物 體は小さく雀位である。後肢の爪が大さう長く、常に地上、殊に好んで水邊に棲んでゐる。尾は長くして之を上下に動かす性がある。空中を飛ぶ時は常に波状に上下する。種類が大さう多い。

セツクワイガン (石灰岩) 鑛 水成岩の一種で炭酸カルシウムより成り、これに酸を注ぐと泡立つて炭酸瓦斯を發して溶ける。あまり硬くないから小刀で傷けることが出

來る。一般に石灰岩は海中に棲んでゐた有孔蟲や海百合・珊瑚などの死骸が積つて出來たもので、石灰岩のうちこれ等の動物の化石を含んでゐることがあるのはこのためである。大理石も石灰岩の一種であるが、これは石灰岩が岩漿の高い熱にあひて變質したものである。美しいものは裝飾用その他は焼いて石灰をつくる。

セツコー（石膏） 鑛 菱形又は矢羽形の結晶をなし、或は粒状や纖維状になつて産する。純粹のものは無色透明であるけれども、白・黄・灰などの色を帯びたものもある。熱すれば水を失ひて白い粉となりよく水を吸収する。それでこの性質を利用して石膏模型などを製するに用ひられる。が之所謂巴里石膏である。

セツソクドーブツ（節足動物） 動物 體が多く環節から出來てゐて、大抵、頭・胸・腹の三部にわけられるが、中には頭と胸が一つになつたり、胸と腹が判然區別がでさなかつたり、或は三部みな一つになつてゐたりするものがある。皮膚は體から出す石灰質などのために大さう堅くなり、外骨格とまでいはれてゐる。昆蟲類・蜘蛛類・多足類・甲殻類の四つにわけてある。

ゼニガメ（錢龜） 動物 イシガメの條を見よ。

ゼニゴケ（地錢） 植物 蘚苔類で、莖や葉の區別が明かでない植物體を葉狀體といふ。ゼニゴケは平たい紐狀の葉狀體であつて、二分岐法によつて枝を出し、長さは二三寸から六七寸に伸び、幅は大抵六七分位ある。濕り氣のある土地の表面を被うてゐる。

セミ（蟬） 動物 體は肥大し、頭は短かくして闊く、雄は腹の兩側に發音器があつて、夏木立の間について高く鳴く。卵は解へると地中に入り、三四年の後成虫となるのである。ヒグラシもこの一種で、夕方に「カナカナ」「カナカナ」と鳴くのである。

セミクダラ（脊美鯨又脊乾鯨） 動物 鯨類の中で一番大きいもので、腹が白く脊が黒い。我が國では南海・西海・朝鮮海等に棲み體の長さは七八丈位、頭はその三分の一位である。鯨鬚はこの種のもので殊に質が良い。

セン（腺） 生 體内から一種の液を分泌する場所をいふ。唾腺・胃腺など多くある。
センアエンコー（閃亜鉛鑛） 鑛 硫黄と亜鉛の化合物で、色は黄・褐・黒などあつて、松脂又は金剛石に似た光澤がある。この鑛石から亜鉛をとることは大さうむづかしかつ

たので、我が國ではこれまで鑛石のまゝ獨逸へ輸出してあつたが、今日では電解法によつて容易く製煉することが出来るやうになつたから、鑛石は少しも輸出せず、各地で盛んにこれを製煉してゐる。我が國での産地は羽後の阿仁、飛彈の神岡などである。

セニソ (纖維素) 生 血が體の外へ出たために、血漿の一部が變質して出來たもので、あつて大さう細い纖維状をなしてゐる。血が傷口へ出て凝るのは一に纖維素が出來るためである。



(素 維 織)

ゼンケイドーブツ (蠕形動物) 動 左右相同じい形を有つてゐる下等動物の總稱で、二枚貝に似たものや、平たくて木の葉のやうなものや圓筒状のものや、また體が多く環節から出來てゐるものや、紐のやうなものや、その他種々ある。ミミズ・ヒル・サナダムシ・蛔蟲などは皆この類に入る。

ゼンゴ 動 マアジの條を見よ。

センザンコー (穿山甲) 動 獸類に屬するけれども體の外面に角質の大きな鱗が瓦をふせたやうに列んでゐる。體の長さは二尺程で、敵に襲はれるとこの體を毬のやうに縮め、頭を尾で隠してその害を防ぐ。四肢には各五本の趾があつてこれに強い爪を有し、これで土を掘り白蟻などを嘗め食ふのである。口には齒がないので大形のもの食ふわけにはゆかない。我が國では臺灣に産する。

センタイシヨクブツ (蘇苔植物) 植 隱花植物の一つで、羊齒植物のやうに莖や葉の區別が明瞭でなく、維管束も大さう不完全である。蘇類と苔類の二つに大別する。

ゼンマイ (薇) 植 多年生の羊齒類で莖は短く、葉は多數叢生してゐる。高さは一二尺。葉は二回羽状をなし、若葉はやはり渦卷状である。これを包んでゐる褐色の綿毛は、風雨や蟲などの害を防ぐため、綿毛を去つたものを乾燥して食用にする。

センルイ (蘇類) 植 スギゴケ・ミヅゴケなどの類を總稱する。蘇苔植物の一種である。セリ (芹) 植 水邊に生ずる植物で、莖は直立するものと匍匐ふものとある。葉は二回羽状複葉で白色の小さい花を開く。嫩い葉や莖を食用とするに一種の芳香があり、味

が淡白である。春の七草の一に數へられてゐる。



ゾー(象) 動 現全世界の陸上に棲む動物の中で最も大きい類で、高さが一丈二尺に達するものがある。頭が大きく、長大なる牙と鼻とを有ち、四肢が太くして圓柱の如く、趾には短い蹄がある。鼻は大さう長く嗅ぐ力が鋭くまた屈伸が自在で物をまき上げたり、水を吸ひこんだり、食物を採つたりする時に用ひられる。牙は五尺に及び、これをもつて樹の根などをよく掘り起す。常に群居を好み、夜出て樹葉等を食ふ。印度・シヤム・スマトラ等の地方に棲むものは印度象といはれ、前額が少しへこみ、耳が小さく頭は高い。印度地方では耕作・運搬の用にするために飼養してゐる。アフリカの中部及び南部に居るものはアフリカ象と稱せられ、印度象より一體に大きく、頭が低く前額のへこみは印度象より少く耳も大きい。象は性質が溫和でしかも力が強く、その一頭で物を運ぶ力は駱駝では五頭分にあたる。マンモス象は數萬年前まで、歐亞大陸の北部から北亞米利加に棲んだ大きな種で、象牙の長さは一丈餘に達したといふこの象牙は今日は化石として掘り出される。

ゾーエン(蒼鉛) 礦 銀・亞鉛・銅など、一緒に出るけれども産額は頗る少ない。但馬・豊後などには自然蒼鉛を産するが大抵は輝蒼鉛となつて出る。銀白色に紅を帯び大さう美しい金屬で、模型を造り、或は合金などとする。

ゾーシツコン(草質根) 植 ダイコン・ムギ・カブラなどの根のやうに、やはらかくして草質のものをいふ。これに對して木質根がある。

ゾーシヨクブツ(雙子葉植物) 植 二枚の子葉を有し、葉の脈は網狀をなす植物で、これを更に合瓣花類及び離瓣花類の二つにわけける。また雙子葉植物に對して單子葉植物がある。

ゾーボーキン(僧帽筋) 生 背の上部にある菱形の筋肉で、この收縮によつて頭を傾け又は仰がしめ、肩を引かせる。

ゾーホン(草本) 植 草本莖を有つてゐる植物で、通常單に草といつてゐる。これを一

年生草本・二年生草本・多年生草本の三つに別ける。

ソーホンケイ (草本莖) 植 草質莖ともいひ、木本莖にくらべて、質が軟く、一年内に全く枯れてしまふかまたは地上の部分だけが枯れる植物の莖をいふ。

ソールイ (藻類) 植 菌藻植物の一つで、獨立した生活を營んでゐる。葉緑素を有し、根部を以て他の物に著き體の全面から養分を吸ひ取る。胞子は所謂游走子と呼ばれるもので、自ら運動する働きをもつてゐる。この胞子は水流によつて運ばれ適當の場所にいたつて育ちて繁殖する。海に生ずるものを海藻といひ、これを紅藻類・褐藻類・綠藻類・珪藻類などに區分し、淡水に産するものを淡水藻と稱し、これを接合藻類・輪藻類などに分ける。

ソクコン (側根) 植 支根または副根ともいひ、主根から出た枝根である。時としては莖葉などから出ることもある。

ソシヤク (咀嚼) 生 口の中で食物を噛み砕くことである。

ソシヤクキン (咀嚼筋) 生 下顎を引き上げて食物を噛み砕かしめるために働く筋肉

で、食物を噛むときに耳の孔の前下方が動くのはこれが收縮するためである。

ソテツルイ (蘇鐵類) 植 裸子植物に屬してゐる。花は萼と花冠とを缺き、葉は羽狀複葉であつて種子に胚乳ある類をいふ。蘇鐵科といふ一科をふくむ。

ソバカス (雀斑) 生 表皮の下層なる粘液層に色素が集つて生ずるものである。

ソメイヨシノ 植 ヨシノザクラに同じ。

ソラマメ (蠶豆) 植 裏海沿岸の原産で、その莢の天を仰いで直立するのでソラマメの名を得たといふ。十月頃種を播き、翌年五六月頃に紫白色の花を開く。莖は四角で二三尺に達し、種子を食ひ、莖や葉は綠肥とする。

タ

タイ (鯛) 動 タヒはオホダヒ・マダヒなどいはれる。楕圓形で縦に扁たく、背は淡い樺色で側面に小さい緑色の斑點があり、腹は白。本邦の近海ことに瀬戸内海に多く産する。冬は深い所にすみ、四五月頃浅い所に來て産卵する。體の長さは大きなもの

は三尺にも及び、肉は甚だ美味である。小魚・貝類及び甲殻類を食ふ。

ダイオン (體溫) 生 食物が消化せられて營養物質となつたものが、血液中の酸素に遇つてこれと化合するによつて生ずるもので、人體の外部に曝されないとこで計るとほゞ三十七度である。概していへば幼兒は少しく高く、老人は少しく低い。また一日の中では朝が一番低くこれから次第に昇り夕方には一番高くなり、これから再び降るものである。

ダイキョーキン (大胸筋) 生 胸にある。手を前に運動させるのはこの筋の收縮によるのである。

ダイコムシ 動 ヤゴに同じ。トンボの條を見よ。

ダイコン (蘿蔔) 植 十字科植物である。我が國の蔬菜類の中では最も重要なもので、品種が頗る多い。普通に大根といはれるのは秋大根のことで、練馬・宮重・櫻島に産するものは昔から殊に名高い。二十日大根は舶來の品種で時なし大根ともいはれ、種を播いて一箇月たてば食膳に上せることが出来る。春大根は二年子または三月大根と稱

せられるもので、秋季種を播き、翌春三四月頃に收穫し、夏大根は三月大根と秋大根との中間に收穫する。春の七草にスズシロと云ふのはこれである。

ダイジュンクワン (大循環) 生 ケツエキジュンクワン (血液循環) の條を見よ。

ダイダイ (臭橙) 植 樹蜜柑やオレンジなどの柑橘類に似てゐる。この果實は冬に到つて熟し、赤黄色を呈するが、若しそのまゝ枝に着けておけば、翌年の夏になつて再び緑色になり、また冬が来ると更に赤黄色にかはる。外果皮を藥用に供し、または橙皮油といふ油を取るに用ひる。

ダイチヨ (大腸) 生 小腸よりは太く短く、U字を倒にしたやうに彎曲り、末の方は眞直になつて體外に開いてゐる。曲つた部分を結腸、眞直な部分を直腸、出口を肛門といひ、大腸は水分を吸収し、不用物を體外に出す作用を營む。

ダイデンキン (大臀筋) 生 臀部にある筋で、腰を伸ばすときに收縮する。

ダイノ (大脳) 生 腦髓のうちで一番大きく、前後に走る溝によつて左右の兩半球に分れ、表面には廻轉と稱する複雑な皺襞がある。實質は神經纖維より成る白質と、神

經細胞より、成る灰白質とから出來てゐる。白質は内部にあつて髓質、灰白質は外部にあつて皮質とも呼ばれてゐる。皮質部は高尚なる精神作用を營むところで、智能言語・視覚・聽覺・四肢顔面の運動中樞は何れもここにある。

タイマイ(毒瑠)動 ウミガメの條を見よ。

ダイリセキ(大理石)鑛 稍粗い結晶質の石灰岩である(石灰岩の條を見よ)通常は白色であるけれども、灰・黒・褐色のものもある。磨いて彫刻材や建築材などとする。

タイルイ(苔類)植 體が多くは平たくて概ね莖と葉の區別がなく、表面と裏面を有する植物で、蘚苔植物の一つである。

ダエキ(唾液)生 唾腺から出た液で、食物を潤し又は溶かして呑みこみ易くする。唾液中に含まれる唾液素は食物中の澱粉を砂糖に變ぜしめる作用がある。

タカ(鷹)動 鷲・鳶等と同じ類で、クマタカ・ハイタカ・大鷹・ノスリ・ハヤブサ等種類が多い。各の條を見よ。

タガメ(田鼈)動 カツバムシともいはれ、體が扁たく暗褐色で水中にすみ、夜燈火を

追うてくることが多い。大きい昆虫である。

タガヤサン(鐵刀木)植 材は堅くて重く、黒褐色を呈して美しいので、有用木材の中でも著名である。東印度の原産で、白色の四瓣を有する大形の花を開く。

タクヨー(托葉)植 葉片の保護をするもので、或は葉片狀、或は鞘狀、或は羽狀、或は刺狀をなしてゐる。エンドウの如きはその托葉が大そう大きくして兼て同化作用をも營なむ。

タクワクワ(多花果)植 複果ともいふ。イチジクやクワなどの果實のやうに、多くの花が一所に群り生じ、各の花から出來た澤山の果實は集り結んで丁度一の果實のやうに見えるものをいふ。

タケ(竹)植 タケは丈高い植物の意であるといふ。古人は籜のあるところから、エロと共に苞木類といふ中へ入れ、喬木や灌木と區別をしてゐた。竹は東洋の特産であつて、日常の用途の廣いことは言ふを俟たない所である。その種類が多い中にも主なものはマダケ・ハチク・マウソウチク・メダケ・虎斑竹、ネマガリタケ・クマザサなど

である。

タコ(豚胝)生 同一の場所を永い間、繰返し使用したため、その部分の表皮が厚くなつたものを云ふ。

タコ(章魚)動 體は柔軟く、烏賊のやうな甲がなく、頭には大きな眼がある。腹が大さう太く脹れ八本の脚がある。マダコは體の長さが五寸、脚の長さが二三尺位で、色はすみ所によつて違ふが、紫褐色または灰色である。イヒダコはカヒダコまたはイシダコともいはれ、大さう小さく、頭・背兩眼の間に青黒い斑點がある。章魚は多くは海の岩の間に隠れ、脚を伸ばして小魚・甲殻類などを捕へて食ふ。強く運動するにはイカと同じく、漏斗管から水を噴き出し、その反動で飛ぶのである。

タコノキ(林投樹)植 我が國では小笠原島や沖繩などに産する固有の植物で、莖から大きい氣根を出すので名高い。葉は帽子・敷物などを造り、また屋根を葺くに用ひられる。

タシギ(田嶋又眞嶋)動 我が國に最も普通のシギでチシギともいはれる鳥である。八月頃から渡來して翌年の初夏まで池・沼・水田などをあさる。頭の頂は黒褐色、胸と腹とは白くして暗色の紋がある。嘴は割合に大きく、鼻溝が延びて上嘴の長さの大部を占めてゐる。

ダセン(唾腺)生 唾液を出す腺で、耳の下にあるのを耳下腺、舌の下にあるのを舌下腺、下顎の内にあるのを顎下腺といひ、共に一對づゝある。俗にいふオタフカセは耳下腺に熱をもつた病である。

タソクルイ(多足類)動 同じ形の環節がいくつもつながつて、胸腹の區別がない。環節ごとに一對の脚がある。ゲヂ・ムカデなどはこの類である。

タチバナ(橘)植 我が國の特産であつて、九州南部及土佐に自生してゐる。幹の高さが二丈五尺餘で、針をもつてゐる常緑喬木である。葉の長さは一寸から三寸位あつて、葉柄には翼がない。花は蜜柑と同じやうに白色五瓣で芳香がある。果實は平たくて丸く、黄色を呈してよい香を放つが大さう酸味があるから食用にはならない。我が國の蜜柑はこれから出たものである。

ダチョー (駝鳥) 動 鳥類の中で一番大きな類で、高さは八尺位、體重は三十六貫もある。翼が大さう小さくて用に立たないかはりに脚はきはめて長く、強く太くして馬の脚のやうである。一時間に十里を走ることが出来るといふ。頸も頗る長く、視力・聴力はよく發達してゐる。雄は雌よりも黒く、翼と尾とは白色である、此の羽毛は裝飾に用ひられて價が大さう高い。食物は木葉・種子・果實の類・昆蟲その他の小動物などであるが、瓜類が一番好きである。地中に穴を掘つて卵を生む。卵は一つの目方が三百六十匁、大きな子供の頭程ある。亞フリカの熱帯に産する。近頃は無暗に捕つたので大さう減つたさうである、

ダツキユー (脱臼) 生 骨のハズレと稱せられるもので、骨が關節面を脱けたのである。
ダツノオトシゴ (海馬) 動 海藻の間に棲む魚類であるが、その頭は馬の頭のやうである。常に體を直立させて泳ぐ。尾は尾鰭がなく、象の鼻のやうに、よく海藻などにからむことが出来る。雄の腹には囊があつて、雌の産んだ卵を入れて育てる奇性がある。
ダドー (蠕動) 生 消化管の筋肉が伸縮して食物を下方へ送る運動をいふ。

ダニ (壁蝨) 動 この類は動物または植物體に寄生し、その口部を以てこれを刺して養分を吸ひとるもので、蜘蛛類にいれられてある。普通のダニは犬に寄生することが多いから、イヌダニといはれる。草叢や山林などにすみ、體は大さう小さく平たいが、人や犬などの血を吸ふと豌豆程の大きさになる。

タニシ (田螺) 動 殻は右巻で外面は黒く内面は蒼白い。體を殻の中に引つこめる時は丈夫な層をする。胎生である。カクタニシ・マルタニシなどの種類がある。

タニユリ 又 **タニマノヒメユリ** 植 古來スッランまたはキミカゲサウと呼んでゐる。廣く二三葉を根生し、六月の初頃中心に花莖をぬいて、眞白の小花を開き、花はみな列をなして垂れ下る。歐米の詩家の賞するものである。百合科に屬する。

タニマノヒメユリ 植 タニユリに同じ。
タヌキ (狸) 動 狸は地方によつてはムジナといはれて居る。體は狐より小さくて口吻が尖り、四肢が短い。暗灰色の毛を密生し、所々に黒い毛がまじつて居る。昔よりの傳説のために人にさらはれて居るけれども反つて野鼠を捕食する益獸で、我が國で

は到る所の山野に穴居し毛皮は狐と同じく種々の用に供せられる。ムジナにつきては博物要説を見よ。

タネンセイコン (多年生根) 植 多年生植物の根をいふ。

タネンセイシヨクブツ (多年生植物) 植 多年の間枯れない莖を有つてゐる植物をいふ。

タネンセイソーパーン (多年生草本) 植 多年の間生存する草本をいふ。キク・シヤクヤクなどのやうに、地上部はその年内に枯れても、根は永く生存してゐる草本は特に宿根草本と呼ばれてゐる。

タバコ (煙草) 植 その莖葉の中にニコチンと稱する有毒性の物質を含んで、之を喫する習慣をつけると、その中毒によりつひに廢すことが出来なくなるものである。ニコチンは無色透明の液であつて、僅かに五ミリグラムの少量を犬に與へても直ぐに斃れるほど毒の烈しいものである。普通の刻煙草の中には百分中一・九三だけ含まれてゐる。煙草の原産地は南亞米利加であるが、現今栽培の盛んなのは北米合衆國で、世界産額

の四分の一を産する。我が國では到る所に産出するけれども、薩摩の國分地方、常陸の久慈地方が古から名高い。茄科に屬する。

タピラコ (鶏腸草) 植 春の七草の一でホトケノザと呼ばれるのはこの種である。初めて葉を出した時のやうすが、佛の座する八葉の蓮華に似てゐるのでこの名がある。紫草科に屬し、ワスルナグサのやうな花を開く、唇形科にもホトケノザとよぶのがあるけれども七草の一ではない。一説には昔のホトケノザは今のコオニタバコであらうとも云つてゐる。

タン (痰) 生 喉頭や氣管などの内面にある粘膜から出る粘液中、咳嗽によりて口腔へ送られる。

タンクワクワ (單花果) 植 一つの花から生じた果實をいふ。又、これを單果ともいふ。ダンコー (斷口) 鑛 壁開を有しない鑛物を碎くと一種の破口をあらはす。之れを斷口といふ。黒曜石の如きものは貝殻狀、碧玉の如きものは平であるから平坦狀、角閃石の如きものは鋭い多くの小さい凸凹があるから參差狀、蛇紋石の如きものは不規則の隆

起があるから多片状の斷口を有すといふ。

タンジユー(胆汁)生 緑色の苦味ある液で、脂肪を乳化して吸収を容易ならしめ、又、腸内の食物の腐敗を防ぐなどの作用がある。

タンシヨウシヨクブツ(單子葉植物)植 雙子葉植物に對し、一枚の子葉を有し、葉脈は並行、莖には年輪を生ずることなく、花部の三の數より成る植物の總稱で、ユリ・アヤメ・シユロ・スゲ・タケの類は皆この中に含まれる。

タンソウ(炭層)鑛 セキタンの條を見よ。

タンチヨウヅル(丹頂鶴)動 ツルの條を見よ。

タンデン(炭田)鑛 セキタンの條を見よ。

タンノ(膽囊)生 肝臓の分泌する胆汁を一時貯へる囊で、肝臓の裏にある。

タンパクモキ(蛋白石)鑛 水を含んでゐる非晶質の石英で、白・灰・黄褐などの色があり、鐘乳状・葡萄状をなし、岩石の裂目などにある。玻璃及び脂肪光澤を有し、斷口は貝殻状である。貴蛋白石と稱せられるものは乳白色であるけれども、見る方向によ

つて種々の色をあらはし、飾石として貴ばれ、玉滴石は温泉に溶けた蛋白石が細かい砂粒を中心としてその外面を包んで出来たもので、魚の卵のやうになつてゐる。木化石も亦蛋白石の一種である。

タンポポ(蒲公英)植 スミレと共に春の野に多い草でよく知られてゐる。黄色い花は一つのやうに見えるけれども、實は澤山の花がかたまつて咲いてゐるのである。九州四國の地方では花の色の白い種類があつて、シロバナタンポポと稱せられる。すべてタンポポの花は夜は勿論、晝でも日光のあたりぬ所では閉ぢてゐるものである。

タンヨ(單葉)植 一枚の葉身をもつてゐるもので、ダイコンのやうなのを羽状、モミヂのやうなのを掌状といふ。

タラ(鱈)動 我が國では北海道及び樺太近海に一番多く産する魚である。體は二尺より四尺位に達し、淡青色で腹が膨れて大きく、下顎に鬚があり、皮がうすく鱗が軟である。この肝臓から製した肝油は營養品として知られてゐる。スケトウダラについては同條を見よ。



チーク (麻栗) 植 東印度原産の常緑木で幹は眞直に成長して高さ十丈以上に及び、樹の皮は灰白色である。葉は對生し倒卵形で裏は白く、長さは一二尺ある。花は白色で小さく一種の香氣をもつてゐる。その材が大さう堅く、水や虫の害を受けないので、船艦の材として第一位におかれてゐる。

チイルイ (地衣類) 植 菌類と藻類とがかたまつて一團となり、互に助けあつて生活してゐる植物體をいふ。即ち藻類は菌類の菌絲に包まれてこれより水分や無機分などの營養を得、その代りに同化作用によつて作つた炭水化物を菌絲にあたへるのであつて分類上菌類の一族とせられる。ウメノキゴケ・イハタケなどはこれに屬する。

チカク (地殻) 鑛 地球の地心を被ふてゐる部分即ち地皮である。地殻は種々の岩石より成り、その厚さは一説によれば六十哩ほどであらうといふ。

チカグイ (地下莖) 植 地下にある莖で、アヤメ・タケなどはこれを有してゐる。地下

莖の中でも、カキツバタのやうに根の如く見えるものを根莖、ジャガタライモのやうに塊状をなしてゐるものを塊莖、ユリのやうに鱗状になつてゐるのを鱗莖と云ふ。

チガヤ (白茅) 植 山野に自生する種類で莖は一尺乃至四尺に及び幅五分内外のススキに似た葉を叢生する。春季絹絲のやうな毛のついてゐる穂を出し、果實はこの毛により風力を以て散布せられる。この穂をツバナといふ。葉は乾かして蓆を織る。

チコン (地根) 植 キク・カシ・タウナスなど普通地下にある根をいふ。

チサ 植 チシヤに同じ。

チシギ 動 タシギに同じ。同條を見よ

チシヤ 植 チサとも云つてゐる。歐米ではサラダといつて生で食ふので、その栽培が盛であるが、近頃我國でもその需要が少くはない。これには早・中・晩のほか、タマチシヤ・タチチシヤ・チリメンチシヤなどの種類がある。タマチシヤは葉の形が甘藍に似て圓い葉が互に抱きあつて球状をなしてゐる。タチチシヤはその莖が直立し、これに長い葉が抱きあつて著いてゐる。それからチリメンチシヤは葉の縁が波状を呈してゐる

る。

チジョーケイ (地上莖) 植 氣莖ともいひ、普通に地上にある莖である。

チブサ (乳房) 生 男子に於ては要らない器官であるが、女子にあつてはこの内に小さい乳房腺が澤山あつて血の中から必要な成分を取り乳汁として分泌する。

チブスキン (窒扶斯菌) 植 短い桿状の細菌で時に絲のやうに連つてゐることがある。體温の温度に於ては甚だ活潑に運動する。體の面に多くの纖毛があるから、之を顯微鏡で覗くと蜘蛛のやうである。このものが腸に寄生すると腸チブス病をおこす。

チフテリアキン (實扶的里亞菌) 植 チフテリアの病原をなす細菌で、結核菌によく似てゐる。長さは殆んど同じく桿状をなし、幅がその二倍位ある。鞭毛がなく運動性もない。兩端が膨れて大きく中央が狭いから亞鈴のやうである。分裂して連鎖状をなし、稀には枝を分つものもある。胞子は殆んど形成しないといはれてゐる。

チムシ 動 金龜子の幼蟲である。コガネムシの條を見よ。

チヤ (茶又茗) 植 昔支那から渡つて來たもので、十月頃から白色の花を開く。その嫩

葉を摘んで綠茶及び紅茶をつくり、種子を搾つて油をとる。綠茶を製するには、生葉を蒸し、蒸の上にかわかし、火にかけながら撚り固める。紅茶を製するには、生葉を日光に晒し、萎びたのを揉み固め、布をかけてまた日に晒し、褐色になつた時火にかけて乾かす。我が國では主に綠茶を飲むが、外國では多く紅茶を用ひる。抹茶又はヒキ茶といふのは、一種の綠茶を粉にしたものである。茶にはテインといふ成分があるので、適當に飲めば疲労を直すことがある。

チユーノー (中腦) 生 大腦と延髓との中間にある。四疊體ともいひ、前後に二對あつて前の一對は視覺、後の一對は聽覺の反射中樞となつてゐる。

チヨ (腸) 生 胃の幽門につゞき肛門に終る長い管で、小腸と大腸とに分たれ、食物は腸腺から出る腸液やその他の消化液のために全く消化し、吸収せられ、殘滓は體外に排出される。

チヨエキ (腸液) 生 小腸内にある腸腺から出る液で、その作用は臍液に似て弱い。矢張り澱粉・蛋白質・脂肪などを消化する。